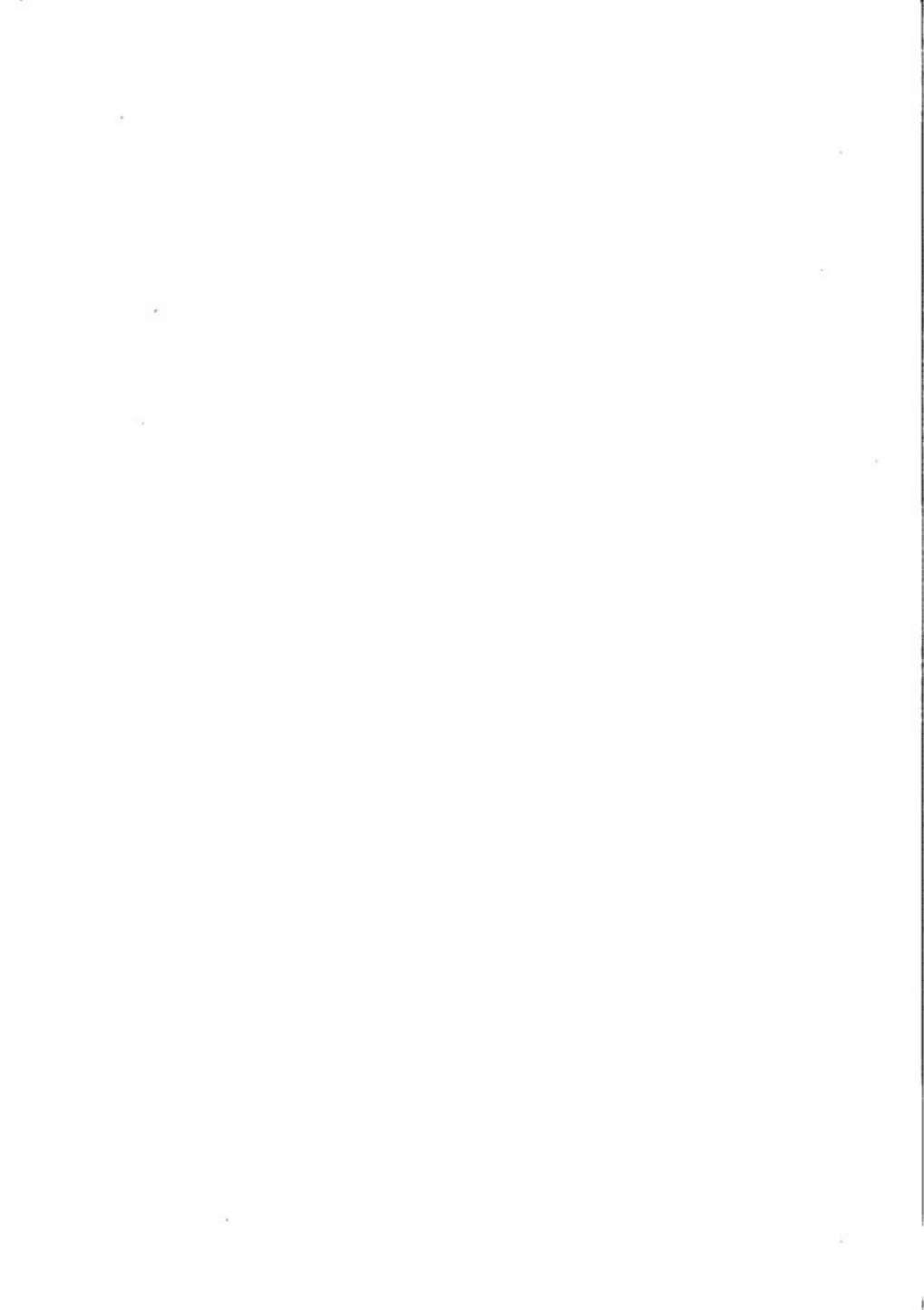


八尾市文化財調査研究会年報
平成元年度

財団法人 八尾市文化財調査研究会



八尾市文化財調査研究会
平成元年度年報

正誤表

頁	行	誤	正
2P	8行目	帝塚短期大学教授	帝塚山短期大学教授
2P	13行目	八尾市農業共同組合組合長	八尾市農業協同組合組合長
4P	右10行目	縄文時代のについては、	縄文時代については、
38P	右5行目	ことことは、	のことば、
68P	左13行目	環濠式前方円墳	環濠式前方後円墳
75P	左12行目	北西に流化していた	北西に流下していた

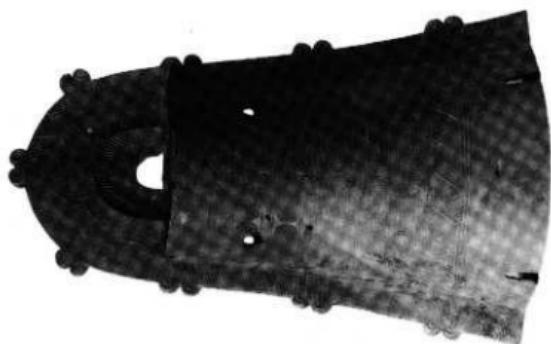
八尾市文化財調査研究会年報

平成元年度

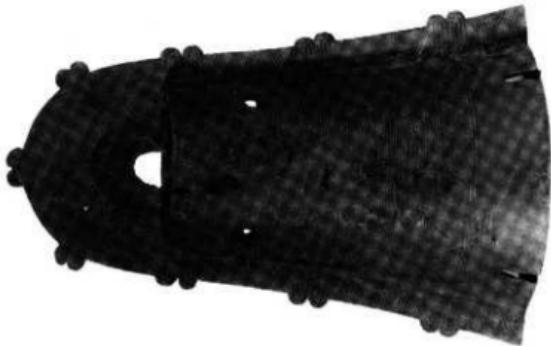


財団法人 八尾市文化財調査研究会

跡部遺跡出土銅鐸



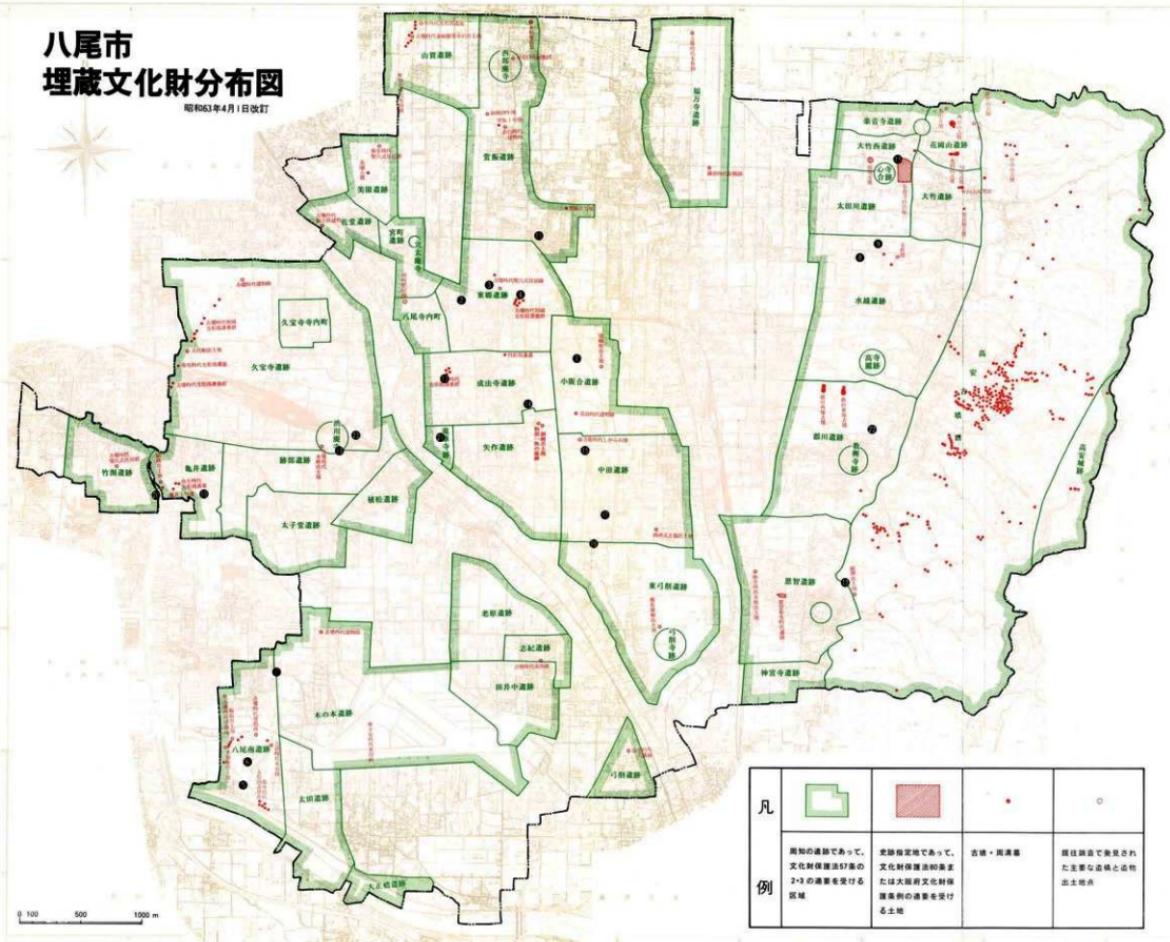
A面



B面

八尾市 埋蔵文化財分布図

昭和63年4月1日改訂



例	凡		
歴史的道跡であって、 文化財保護法第97条の 2-3の適用を受けた 区域。	史跡指定地であって、 文化財保護法第97条の 2-3の適用を受けた 区域。	古墳・周溝墓	既社跡などで発見され た主要な遺跡と出土 出土点

序 文

大阪府の東部に位置する八尾市は、河内平野の中心部に当たり、古代から人々が活動した地域であります。しかしながら近年の開発が増加するに伴い、貴重な埋蔵文化財が破壊されるおそれのあるものについては事前に発掘調査を行い記録による保存を行う必要があります。

当調査研究会が実施しました平成元年度の発掘調査は、24件で約7,338平方米に及ぶものであります。これらの調査の結果、数多くの遺構・遺物が検出され、その成果は、この地域の歴史を考える上で、極めて貴重な資料であると思っています。

また、市民の啓発事業につきましても発掘調査成果の速報として「現地説明会」の開催や、「文化財講座」の開催、さらにまた小中学生を対象にした古代の土器づくり体験学習等を毎年趣向をこらして実施しています。また、1年間の成果を見ていただくため市立歴史民俗資料館においての写真パネルや出土遺物の展示等の事業を行っています。

本書は、平成元年度に実施した調査事業の概要を収録して年報としたもので、できるだけ早期にその調査成果を公開するものであります。今後は、調査で得られた主な遺構・遺物については詳細な報告書も刊行する予定にいたしております。

最後になりましたが、これら調査の実施にあたり、ご指導とご協力を賜りました関係機関各位に対しまして、心から厚くお礼を申し上げます。

平成2年12月

財團法人 八尾市文化財調査研究会

理事長 福島 孝

例 言

1、本書は、財団法人八尾市文化財調査研究会が、平成元年度に実施した調査事業の概要をまとめたものである。

1、埋蔵文化財の発掘調査の項は、調査担当者（高萩千秋・原田昌則・成海佳子・西村公助・坪田真一・青木勘時）の報告書をもとに、成海が、検討を加えてまとめた。

1、本書に掲載した地図は、八尾市発行の2,500分の1（昭和60年測量）を使用した。埋蔵文化財分布図は、八尾市教育委員会発行（昭和63年4月1日）のものをもとに作成した。なお、調査位置内のスクリーントーンは、調査地—■、当調査研究会—□、八尾市教育委員会—▨、大阪府教育委員会・その他—▨以下のように表した。

1、本書と埋蔵文化財発掘調査報告書の内容が異なる場合は、後者を正しいものとする。

1、本書に掲載した各遺跡のカッコ内の記号は以下の略号である。

例 1. 小阪合遺跡 (KS 89-18)
遺跡名の略号
西端下 2 ケタ

本 文 目 次

埋蔵文化財分布図

序文

例言

I	八尾市文化財調査研究会の概要	1
II	埋蔵文化財の発掘調査	4
1.	小阪合遺跡 (第18次調査: 青山町3丁目2-1)	7
2.	東郷遺跡 (第30次調査: 本町7丁目39-1)	10
3.	東郷遺跡 (第31次調査: 光町1丁目61)	12
4.	東郷遺跡 (第32次調査: 光町2丁目59)	20
5.	八尾南遺跡 (第14次調査: 若林町3丁目116)	24
6.	八尾南遺跡 (第15次調査: 若林町1丁目76)	27

7. 八尾南遺跡	(第16次調査: 北木の本1丁目~南木の本4丁目)	32
8. 水越遺跡	(第2次調査: 千坂170)	34
9. 水越遺跡	(第3次調査: 水越2丁目117)	37
10. 亀井遺跡	(第2次調査: 南亀井町1丁目39-2・39-6・40-2)	39
11. 蓋板遺跡	(第8次調査: 緑ヶ丘1丁目)	42
12. 恩智遺跡	(第4次調査: 恩智町4丁目55)	46
13. 成法寺遺跡	(第5次調査: 光南町1丁目46, 47-1)	51
14. 成法寺遺跡	(第6次調査: 南木町4丁目24)	56
15. 中田遺跡	(第2次調査: 中田3~4丁目)	58
16. 中田遺跡	(第3次調査: 八尾木北4~5丁目)	61
17. 中田遺跡	(第4次調査: 八尾木北5丁目)	63
18. 藤部遺跡	(第5次調査: 春日町1丁目45-1)	65
19. 心合寺山古墳	(第1次調査: 大竹5丁目141, 142)	68
20. 竹渕遺跡	(第2次調査: 竹渕東2丁目)	72
21. 竜華寺跡	(第1次調査: 陽光園)	75
22. 郡川遺跡	(第1次調査: 黒谷474)	84
23. 渋川磨寺	(第1次調査: 渋川町5丁目41)	87
III 委託業務		90
1. 八尾市立歴史民俗資料館の管理		90
2. 環山櫻の公開		93
3. 河内木綿伝習所の管理		93
IV 啓発普及事業		94
V その他		97
VI 受贈図書一覧		98

I 八尾市文化財調査研究会の概要

1. 目的

八尾市域の文化財の調査・保存・研究を通じて文化財の保護を図るとともに、市民の文化財保護に関する理解を深め、地域文化の発展に寄与し、永く後世に文化遺産を継承することを目的とする。

2. 事業内容

- ・埋蔵文化財の発掘調査および内業整理業務の受託
- ・埋蔵文化財以外の文化財の調査研究
- ・文化財に関する講座・講演会および展示会の開催
- ・八尾市教育委員会からの受託業務
- ・その他目的を達成するために必要な業務

3. 設立年月日

昭和57年7月1日

4. 事務局所在地

大阪府八尾市清水町1丁目2番1号

5. 歴史民俗資料館所在地

大阪府八尾市千塚3丁目180番地の1

6. 役員（平成2年3月31日現在）

顧問 1名

理事 11名

監事 2名

評議員 13名

顧問 山脇悦司 八尾市長（前理事長）

(50音順)

理事長 福島 孝

理事 今川金治 八尾商工会議所会頭

- タ 川瀬 誠 大阪府教育委員会文化財保護課長
- タ 貴島正男 八尾市郷土文化推進協議会会長
- タ 小谷 蓼 八光信用金庫理事長
- タ 田代克巳 帝塚短期大学教授
- タ 辻合喜代太郎 帝国女子大学名誉教授
- タ 徳丸義也 八尾市議会議員
- タ 西谷信次 八尾市教育長
- タ 古橋 了 ホシデン株式会社取締役社長
- タ 森岡安治郎 八尾市農業共同組合組合長

監事 伊藤 弘 八尾商工会議所副会頭

- タ 西崎 弘 八尾市収入役

評議員 浅井允品 塙女子短期大学教授

- タ 安積由高 やお文化協会常任理事
- タ 阿部 孝 やお文化協会事務局長
- タ 池田照仁 八尾市議会議員
- タ 上井久義 関西大学教授
- タ 奥野俊雄 やお文化協会常任理事
- タ 櫻井敏雄 近畿大学教授
- タ 標榜利光 大阪府立八尾高等学校教諭
- タ 塙口義信 塙女子短期大学教授
- タ 細見二郎 八尾商工会議所副会頭
- タ 松井一雄 八尾市教育委員会社会教育部長
- タ 三上幸寿 八尾市史編纂委員
- タ 村川行弘 大阪経済法科大学教授

7. 事務局組織および氏名（平成2年3月31日現在）



8. 理事会・評議員会の開催

会議名	開催年月日	事業内容
第1回 理事会		・評議員の選出に関する件 ・理事の選任に関する件 ・昭和63年度事業報告承認の件 ・昭和63年度収支決算承認の件
第1回 評議員会	平成元年 6月23日	
第2回 理事会		・平成2年度事業計画承認の件
第2回 評議員会	平成2年 3月30日	・平成2年度収支予算承認の件

II 埋蔵文化財の発掘調査

平成元年度の発掘調査は24件を行なった。これらは開発に伴い破壊されるおそれがあるものについて八尾市教育委員会が実施した遺構確認調査の結果、事前に発掘調査を実施することになったもので、事業者と八尾市教育委員会及び財団法人八尾市文化財調査研究会（以下、「調査研究会」という）との間で取りかわした三者協定に基づき、調査研究会が事業者から委託を受けて実施したものである。発掘調査の総面積は7337.98m²で、ここ数年増加の傾向がみられるが、これらの要因としては、近年の目覚しい地下高騰による近郊農耕地の宅地開発の増加及び公共事業の整備開発等が考えられる。発掘調査では貴重な埋蔵文化財を後世に残すため、開発で破壊されるおそれのあるものに対しては記録による保存の実施を行っている。また、発掘調査で得られた成果を速報として現地説明会を開催して、一般公開を実施している。

なお、高安古墳群芝塚古墳の調査は、年度にまたがった事業であり、その調査成果については昭和63年度の年報に掲載し、ここでは除外している。また、渋川廃寺の調査は平成2年度にまたがっているが元年度に掲載した。今年度の発掘調査の成果では、縄文時代中期から室町時代にかけての各時代の遺構・遺物を検出している。以下、その調査成果について各調査ごとに記載しているが、これらで得られた成果を八尾市域の全体としての各時代ごとに概説する。

旧石器時代

旧石器時代に相当する地層は、5八尾南・6八尾南の調査で検出した。今迄に調査した八尾南遺跡ではこの時期の地層（長原地山（第14層））が確認されており、またその地層中から石器が出土している。しかし、今回の調査地では、地層を確認しているが、石器は出土しなかった。

縄文時代

縄文時代については、6八尾南・8水越の調査で検出した。水越遺跡では下層調査の河川内から中期に比定される土器片が出土している。八尾南遺跡では晩期に比定される土器・石器片とともに円形の竪穴住居1棟を検出している。

弥生時代

弥生時代については前期（紀元前2世紀）ものが、1小阪合・6八尾南・8水越・17中田・18跡部・20竹洞の6遺跡で検出した。八尾南遺跡では大阪府下の発掘調査でも出土例が少ない古段階の土器が河川内から出土している。また、その中には北九州の七器（板付1式）が出土しており、遠方との交流を裏付ける資料である。また中田遺跡・竹洞遺跡では中段階の壺などが出土している。その他の遺跡でも中期の包含層に混じって若干の前期の土器片が確認されており、その周辺には遺構の存在が想定される。

中期（紀元前1世紀）は、1小阪合・9水越・10龜井・16中田の調査で検出した。小阪



跡部遺跡発掘調査の関係者視察風景（北から）

合遺跡ではこの時期の集落遺構が初めて確認された。水越遺跡では環壕をもつ集落を検出しており、環壕集落を研究する上で重要な資料である。亀井・中田遺跡では小面積の調査で詳細なことは不明であるが、遺物包含層を確認している。

後期（2世紀）は、1小阪合・6八尾南・10亀井・13成法寺・15中田・16中田・18跡部の調査で検出した。成法寺遺跡では、溝内から多量の土器（第V様式）を出土している。八尾南遺跡では方形周溝墓が検出しており、墓域の広がりが確認された。跡部遺跡の調査では銅鐸及びその埋納痕が検出され、テレビ・新聞などの報道で話題を呼んだ。銅鐸は山間部で出土することが多く、今回のように低平地上にも存在することが発掘調査によって明らかになった。

古墳時代

古墳時代については前期（3～4世紀）のものが、1小阪合・3東郷・6八尾南・7八尾南・8水越・10亀井・13成法寺・15中田・

16中田・18跡部の調査で検出した。成法寺遺跡では昭和55年度の調査で検出している方形周溝墓が今回の調査でも確認された。中田遺跡では集落遺構に関連する遺構を検出している。中期（5世紀）は、1小阪合・6八尾南・13成法寺・16中田・22郡川の調査で検出した。成法寺遺跡では埴輪円筒棺が検出しており、八尾市内の沖積地上の遺跡では4例目である。郡川遺跡では溝内から高安古墳群の造営に関連する時期の須恵器が出土しており、古墳の成立の時期を考える上で貴重な資料が確認されている。

後期（7世紀）は、23渋川廃寺で検出した。渋川廃寺は、現在の渋川町・春日町にあったと伝えられている白鳳時代の寺院があるが、この渋川廃寺に関連する遺構を検出している。遺物では金堂に使用されたのではないかと考えられる鶴尾の破片が出土している。また、土壘状構内から地鎮祭的な祭祀で埋納されたと考えられる須恵器が出土している。



渋川廃寺発掘調査風景（北から）

奈良時代

奈良時代については、今回明瞭な遺構は検出されなかった。

平安時代

平安時代については、11董振・23渋川廃寺の調査で検出した。董振跡の調査では掘立柱建物・井戸など集落遺構を検出しておらず、当遺跡南部の調査で初めての確認である。また渋川廃寺の調査では寺院の廃絶後に建てられたと考えられる掘立柱建物を検出している。

鎌倉時代

鎌倉時代については、2東郷・11董振・15

平成元年度事業一覧表

番号	遺跡名(施設)	調査地	原図者	原図	調査期間	面積(m ²)	担当
1	小坂台(第18次)	青山町3丁目112-1	松田芳彦	大岡生也	4月4日～4月28日	204	成海
2	東郷(第30次)	本町7丁目39-1	田中貴基	ジル渡駿	4月17日～4月26日	85	西村
3	東郷(第31次)	元町1丁目61	鳴野豊一	事務所建設	5月18日～7月8日	660	原田
4	東郷(第32次)	元町2丁目59	栗田博	大岡生也	9月25日～10月7日	130	成海
5	八尾南(第14次)	若林町3丁目116	堀高原	大岡生也	5月8日～5月19日	100	高萩
6	八尾南(第15次)	若林町1丁目76	鈴木超郎	社團施設	11月6日～2年2月15日	846	青木
7	八尾南(第16次)	北木の本1丁目～青木の木4丁目	八尾市	公共下水道	10月25日～2年2月22日	97.38	高萩
8	水路(第2次)	千葉170	飯田村機業工業	上海建設	5月16日～6月21日	600	西村
9	水路(第3次)	水路2丁目117	八尾市	体育館改築	6月26日～7月19日	451.6	高萩
10	鬼井(第2次)	南鬼井1丁目39-2・39-6・40-2	川端芳司	曾根施設	6月12日～7月4日	300	成海
11	曾根(第8次)	緑ヶ丘1丁11	八尾市	市営住宅	7月17日～9月30日	900	西村
12	忍寺(第4次)	忍寺町4丁目55	八尾市	青少年施設	9月1日～11月6日	1,178	原田
13	成海寺(第5次)	光南町1丁目46, 47-1	柳ピーバーハウス	大岡生也	10月9日～11月16日	400	坪田
14	成法寺(第6次)	南本町4丁目224	大石友二郎	大岡生也	2年2月20日～3月3日	200	原田
15	中田(第2次)	中田3～4丁目	八尾市	公共下水道	10月13日～11月27日	70	青木
16	中田(第3次)	八尾木北4～5丁目	八尾市	公共下水道	12月2日～2年3月31日	132	坪田
17	中田(第4次)	八尾木北5丁目	八尾市	公共下水道	3月12日～2年1月18日	95	坪田
18	御前(第5次)	春日町1丁目45-1	八尾市	公共下水道	10月17日～11月30日	100	西村
19	心合寺古墳(第1次)	大竹5丁目141, 142	八尾市	改修工事	12月6日～2年1月30日	127	原田
20	竹河(第2次)	竹南町2丁目	八尾市	公共下水道	2年1月12日～3月31日	127	坪田
21	龜山寺跡(第1次)	龜山町	上江司謙	大岡生也	2年1月22日～1月30日	100	坪田
22	郡川(第1次)	萬代74	八尾市	改修工事	2年2月6日～2月13日	60	原田
23	洪川発掘(第1次)	洪川町3丁目41	柳ピーバーハウス	大岡生也	2年3月7日～4月15日	350	青木

中田・18跡部の調査で検出した。東郷遺跡では後期に比定される曲物井戸・小穴などの集落遺構を検出しておらず、当遺跡の南西部にも存在することが判明した。跡部遺跡では土坑内から瓦器2点が出土している。

室町時代から近代

各遺跡の調査で確認している。すべて農耕に関連されるものである。動溝などの遺構は近世条里を復元する上で貴重な資料である。以上、平成元年度に実施した発掘調査で得られた各時代ごとの成果である。

1. 小阪合遺跡 (KS 89-18)

調査地 八尾市青山町3丁目2-1

調査期間 平成元年4月4日～4月28日

調査面積 204m²

はじめに

小阪合遺跡は、玉串川と長瀬川に挟まれた沖積地に位置しており、その中でも楠根川流域に属している。この三角州状の低平地は遺跡密度の高いことが知られており、当遺跡の南は中田遺跡、南西は矢作遺跡と接し、西および北には成法寺遺跡・東郷遺跡・萱振遺跡などが近接して位置している。

当遺跡では、昭和57年度から土地区画整理事業が行われており、道路・下水道・河川改修などの公的な開発に伴う発掘調査は、昭和63年度で終了しており、各調査で多大な成果が得られている。

調査概要

調査地に2本のトレンチ（東西3m・南北34m）を設定した。掘削深度はこれまでの調査や試掘調査の結果を参考に、機械掘削0.6m、人力掘削0.4m前後の約1mまでとし、古墳時代前期までを調査対象と計画した。

西側のトレンチを第1トレンチとし、調査を進めた結果、現地表（標高約8m）下0.8～1.0m付近で古墳時代前期（布留式期）の溝・河川と平安時代末期～鎌倉時代の溝等を検出した（第1面）。第1面の調査終了後、第1面下0.3～0.5mで弥生時代後期の水田遺



調査地位置図

構を検出した（第2面）。第2面への掘削途中、側溝で弥生時代中期の遺物包含層が認められたため、第2面の調査終了後に下層部分を確認することとし、部分的に掘削を続行した。その結果、第2面下0.4～0.5mに弥生時代中期（II様式）の遺構のあることが明らかになった（第3面）。そこで予定を変更し、東側の第2トレンチでは、現地表下1.5～2.0mにある弥生時代中期の遺物包含層（第8層）直上までを機械掘削とし、以下、0.2～0.6mを手掘りとして調査を進めた。ここではトレンチ中央部に河川の堆積土層であるシルト～粗砂が厚く堆積しており、この部分を中心に壁面が何度も崩れ、危険な状態になつたため、遺構の存在の希薄なトレンチ南半分の人力掘削は中止した。

第1トレンチ

第1面

標高7.0～7.5m(第3層黄茶色シルト～粘土

1 小阪合遺跡

上面)では平安時代末期～鎌倉時代の溝20条と古墳時代前期(布留式期)の溝1条・河川1条を検出した。前者はいわゆる「中世素掘り溝」で、農耕に伴う鋤溝などである。上層に堆積する第2層は、南部で5～6枚に分れるもので、鋤溝は第3層までの各層上面から縱横に掘り込まれており、深いものや、第3層上面から切り込まれたものだけが調査対象となった。各溝内部からは、古墳時代から江戸時代に至る遺物の小片が出土している。後者は西隣の調査地(KS87-8第3調査区)でも検出したもので、トレンチ北西隅でわずかに検出した。内部から布留式甕を主とする遺物が出上している。ここでは、河川が完全に埋まった後耕地として利用され、鋤溝群が掘り込まれている。この河川の影響をうけたためか、調査南部は堤防状の高まりとなり、北部とは20～30cmの段差がある。

第2面

標高6.6～7.0m(第6層青灰色粘土上面)から弥生時代後期(V様式)の水田遺構を検出した。畦畔は調査区南部で3条認められ、うち1条は粘土のブロック層を盛り上げた大畦である。大畦畔は南西～北東に伸び、西では2条の畦畔に分かれ、南側には1条の畦畔が平行して伸びている。この大畦畔の東の延長は、第2トレンチでも検出している。上層の第5層および第6層上面からは、弥生時代後期(V様式)の遺物が若干出土している。

第3面

標高6.0m前後(第9層緑灰色シルト上面)で、弥生時代中期(II様式)の落ち込み4基、

溝3条、小穴47個を検出した。2基の落ち込み内には灰・焼土などが堆積しており、石核(サスカイト)や台石が出土している。小穴内には柱根の残るもののが数個ある。各遺構内および上層の第8層からは、II様式の土器のほか、石包丁、石錐、石棺未成品などが出土している。

第2トレンチ

標高5.5～6.0m(第9層緑灰色シルト上面)で、弥生時代中期(II様式)の井戸1基、落ち込み3基、大溝1条、溝7条、小穴27個のほか、南部で河川1条を検出した。第1トレンチ第3面に対応する遺構面で、ここで多数の遺構・遺物を検出したが、特に大溝、河川北岸斜面からは、土器を主として木器・石器の成品・未成品のほか、獸骨・種子・貝殻・植物遺体等が多量に出土しており、この部分からの出土量はコンテナ10箱を数える。また、サスカイトの剝片・出土もかなりの量にのぼる。

その他、平面的には検出していないが、第1面に対応する土層上面から切り込む溝、第2面の大畦畔の東の延長などを確認している。

まとめ

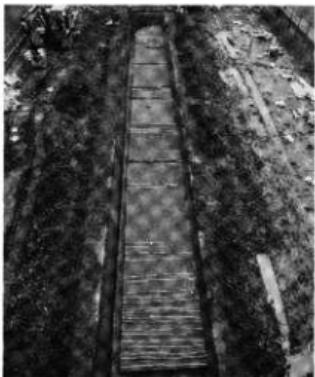
今回の調査では、小阪合遺跡の深層部が明らかになったことにより、多大な成果が得られた。

当遺跡では、これまで平安時代後期から鎌倉時代と古墳時代前期から中期の概ね2時期の遺構群が、比較的浅いところでしかも接近

して検出されていた。ところが、今回の調査ではさらに下層に弥生時代中期の集落遺構と同後期の集落遺構・水田遺構のあることが明らかになった。今回検出した弥生時代中期（II様式）の出土遺物の特徴は、その量の多さ、密度の高さなどもさることながら、第

ト）が多量に出土したことがあげられる。これらの遺物が出土するということは、この場で石器が製作されたことの結果である。さらに河川内からは弥生時代前期の土器も少量ではあるが出土しており、ごく近隣にこの時期の生活面があるものと考えられる。

1・2両トレンチで、石核・剝片（サスカイ



第1トレンチ第1面全景（南から）



第1トレンチ第2面全景（南から）



第1トレンチ第3面（北から）



第2トレンチ第3面（北から）

2. 東郷遺跡(T G 89-30)

調査地 八尾市本町7丁目39-1

調査期間 平成元年4月17日～4月27日

調査面積 85m²

はじめに

東郷遺跡は、現在の行政区画では本町・東本町・光町・桜ヶ丘一帯に所在する弥生時代から鎌倉時代にかけての複合遺跡である。当遺跡は、旧大和川の主流である長瀬川・玉串川に挟まれた沖積地に位置している。同一の沖積地上には、多くの遺跡が存在しており、当遺跡の周辺には限れば、南東に小阪合遺跡、南西に成法寺遺跡、北西に宮町遺跡、南東に萱振遺跡が存在している。

調査概要

調査に際しては、八尾市教育委員会の指示書に基づき、現地表下1.0～0.8mまでの土層を機械で掘削し、以下の各層は人力掘削を実施して、遺構・遺物の検出に努めた。

当調査地での基本層序は、第0層：盛土、第1層：茶褐色細砂混粘質土、第2層：暗灰色細砂混粘土（上面は近世の遺構検出面）、第3層：黄褐色シルト混粘質土（上面は平安時代末期から鎌倉時代の遺構検出面）である。調査の結果、現地表下1.1～1.0m（標高7.7～7.8m）に存在する第3層上面で平安時代末期から鎌倉時代の井戸2基（SE-1・SE-2）、土坑4基（SK-1～SK-4）、溝8条（SD-1～SD-8）、小穴13個

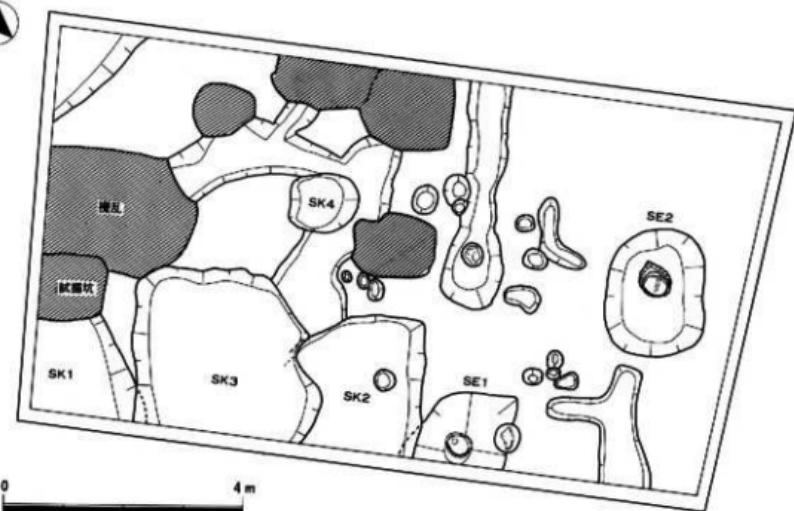


（SP-1～SP-13）と、現地表下1.0～0.9m（標高7.8～7.9m）に存在する第2層上面で、近世の小穴3個（SP-14～SP-16）を検出した。

なお、第2層上面から切り込まれている遺構については、第2層の層厚が比較的薄く、結果的には第3層上面で検出するかたちをなった。

まとめ

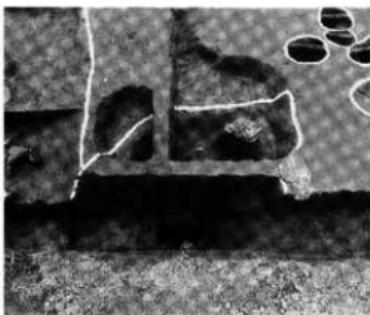
今回の調査では、平安時代末期から鎌倉時代の居住地を確認した。この時期のものとしては調査地の北東部に当たる当遺跡中央部から水田遺構が検出されており、生産域と集落域が明らかになった。また、近世の遺構も検出していることから当調査地付近一帯が長年の間、ほぼ同じ場所で集落が営まれていたことが窺える。



検出遺構平面図



調査地全景（西から）



SE1（南から）

3. 東郷遺跡 (TG 89-31)

調査地 八尾市光町1丁目61

調査期間 平成元年5月18日～7月8日

調査面積 660m²

はじめに

今回の発掘調査は共同住宅の建設に伴うもので、市教育委員会・当調査研究会が当遺跡内で実施した第31次調査にあたる。調査地点は、第3次調査地 (TG 81-3) と第18次調査地 (TG 84-18) の間に位置する。

調査概要

調査対象地は東西30m・南北22mで、面積660m²を測るものであったが、掘削土を場外に搬出しない条件のため、調査区を3区（第1～第3区）に分割して調査を実施した。

掘削に際しては、既往調査の調査結果に従って現地表下1.1～1.3m前後までを機械掘削し、以下約0.4mは層理に従って人力掘削を実施した。その結果、第2区・第3区の現地表下1.6～1.8m（標高6.2～6.3m）前後に存在する第6層上面で古墳時代前期の土坑2基（SK-1・SK-2）、溝2条（SD-1・SD-2）小穴5個（SP-1～SP-5）の他、近世の井戸1基（SE-1）を検出した。

遺物は主に第5層から弥生時代後期から古墳時代前期に比定される土器類が出土したが、大半が小破片であった。出土遺物の総量はコンテナ箱4箱程度である。



調査位置図

1) 基本層序

第0層：盛土。層厚0.8～1.0m。

第1層：旧耕土。黒灰色砂質。層厚0.1～0.2m。

第2層：床土。灰青色砂質。層厚0.1～0.3m。

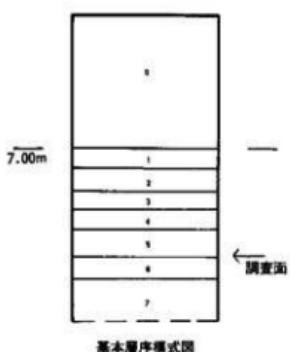
第3層：褐灰色粗砂。層厚0.1～0.2m。

第4層：茶褐色粘土。層厚0.1～0.2m。酸化鉄・マンガンが斑点状に付着する。
上面は水田面。

第5層：灰青～茶灰色粘土。層厚0.1～0.3m。
マンガンが斑点状に付着する。弥生時代後期～古墳時代前期に比定される土器の小破片を含む。

第6層：淡灰色シルト混粘土。層厚0.2～0.3m。遺構検出面。

第7層：灰色～暗灰色粘土。層厚0.3m。マンガンが斑点状に付着する。



2) 検出遺構

井戸 (S E)

S E - 1

2区の北部で検出した。第6層上面で検出したが本来の構築面は、第2層上面である。掘形の上面は円形を呈し、東西3.4m、南北2.6m（検出長）、深さ3.4m以上を測る。

井戸側は掘形のやや南部に設置されており、下部に方形の木枠（板幅横浅どめ）幅1.0m、長さ1.96mを設置し、さらに上部には径0.75~0.85m、長さ0.8mを測る桶を二段積み重ねている。なお、井戸側内部から井戸側用の瓦を出土していることから、上部はこれらの井戸側用の瓦を使用して井戸側とていたようである。出土遺物は、掘形内および井戸側内から井戸側用の瓦のはか近世・近代に比定される陶磁器の小破片が少量出土している。

溝 (S D)

S D - 1

2区・3区の南部で検出した。東西方方向に弓状に伸びるもので検出長10.3mを測る。断

面の形状は逆台形で幅0.5~0.8m、深さ0.07mを測る。内部堆積土は暗灰色粘質シルトである。遺物は弥生時代後期に比定される甕(12)を出土した。

S D - 2

3区の北部で検出した。南西-北西方向に伸びるもので検出長2.3mを測る。

断面の形状は逆台形で幅0.4m、深さ0.03mを測る。内部堆積土は暗灰色粘質シルトである。遺物は土器の小破片が極少量出土した。

土坑 (S K)

S K - 1

3区の東部で検出した。東部は調査区外のため全容は不明であるが、検出部分で東西2.5m、南北2.3m、深さ0.25mを測る。内部堆積土は暗灰色粘土である。遺物は古墳時代前期に比定される土器の小破片が少量出土した。

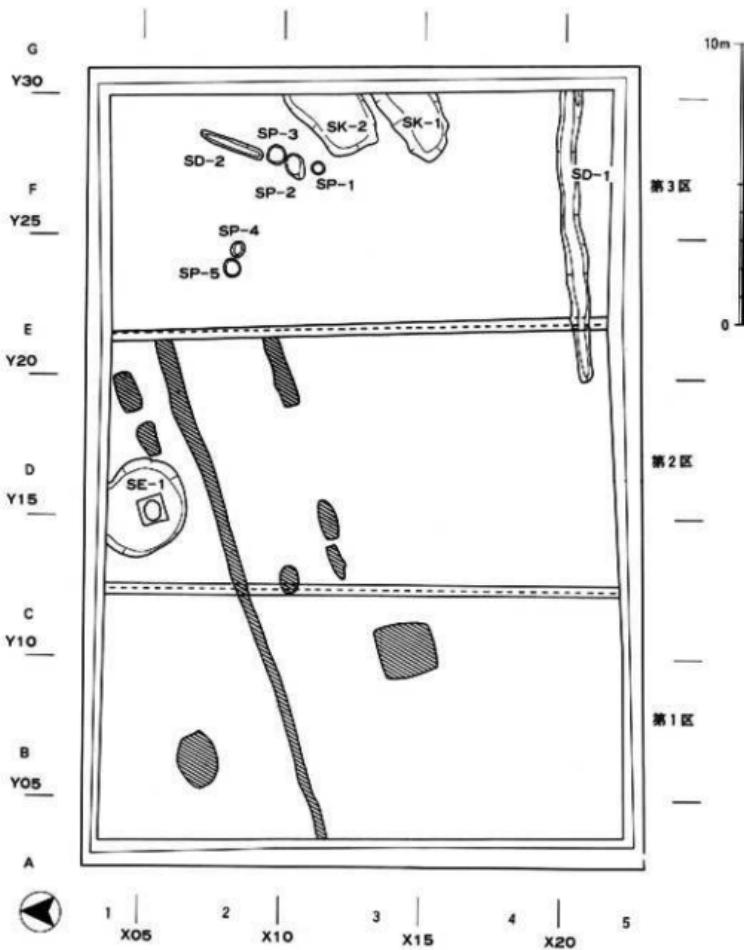
S K - 2

S K - 1の北側で検出した。東部は調査区外に至るため全容は不明である。検出部で東西2.0m、南北2.8m、深さ0.15mを測る。内部堆積土は暗灰色粘土一層である。遺物は古墳時代前期に比定される高杯(21)・小型鉢(25)が出土した。

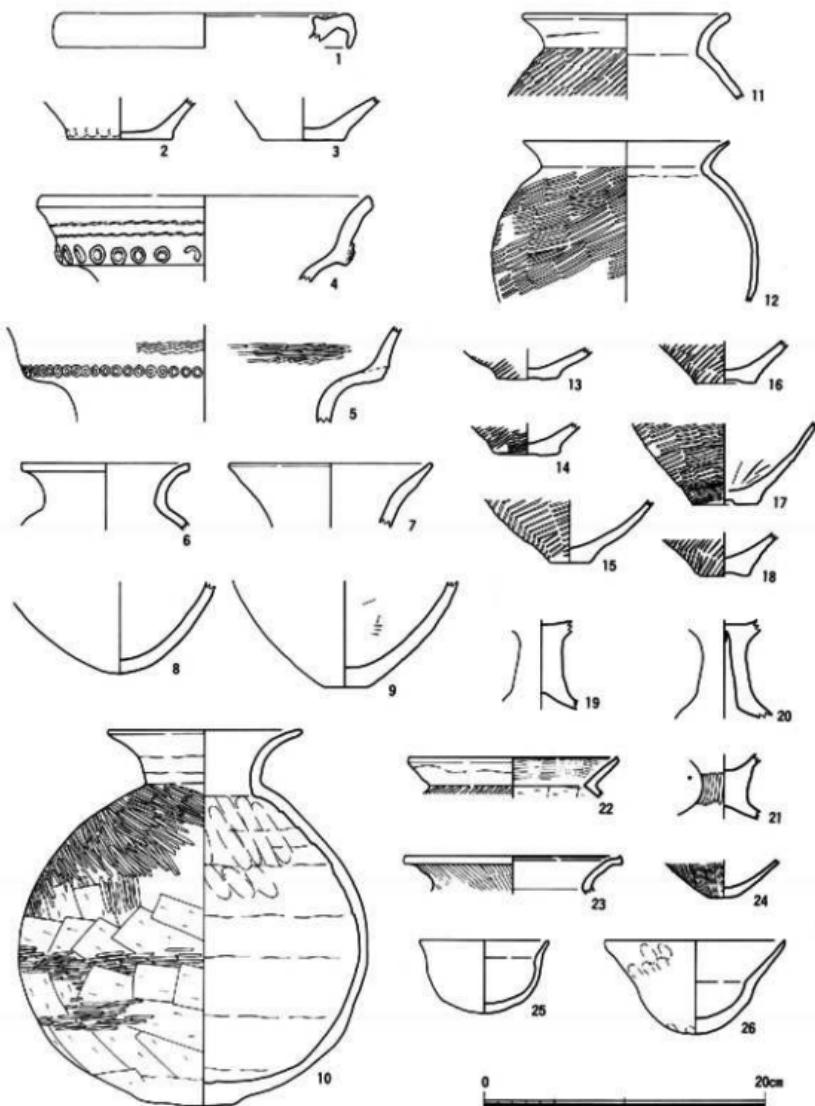
小穴 (S P)

S P - 1 ~ S P - 5

小穴は5個を検出した。すべて3区の北部で検出した。上面の形状は円形ないしは橢円形を呈するもので幅0.45~0.8m、深さ0.05m前後を測る。内部堆積土は暗灰色粘土である。



検出遺構平面図



出土遺物實測圖

3 東郷遺跡
出土遺物観察表

遺物番号	器種	法量 (cm)	口径 器高	調査等の特徴	色調	胎土	焼成	備考 遺存状況
1	壺形土器 蓋付	口 径 20.5		垂下する口縁部を有する。 口縁部内外面ヨコナギ、体部内面ナゲ。	褐色	やや粗 角閃石・長 石・黒雲母 (0.1~2mm) を含む。	良好	1B区 5層 1/6
2	壺形土器 蓋	底 径 7.3		平底の底盤。 体部および底部内外面ナゲ。	内 外 青褐色 黒褐色	やや粗 角閃石(0.5 ~2mm)が散 見される。	良好	2E区 5層 1/4
3	同上	底 径 5.6		平底の底盤。 体部および底部内外面ナゲ。	明褐色~ 暗赤褐色	やや粗 角閃石・長 石(0.1~3 mm)を多量 に含む。	良好	3F区 5層 底部完存
4	七輪器 複合八脚蓋	口 径 23.6		2段に屈曲する口縁部を有する。 口縁部外側に5条の波文状と円形浮文を施す。	内 外 オリ ブ黑色 赤褐色	粗 長石・黒雲 母(0.5~3 mm)を多量 に含む。	やや不 良	1B区 5層 1/6
5	同上			口縁部外側下半に円形浮文を施す。 口縁部内外面ヨコナギ。	浅黄色	やや粗 角閃石・長 石(0.5~2 mm)を多量 に含む。	良好	3B区 5層 1/4
6	土器器 広口壺	口 径 12.0		口縁部が上方外方へ外反して伸びる。口縁部 は水平な面を有する。 口縁部内外面ヨコナギ、体部内外面ナゲ。	浅褐色	粗 長石・黒雲 母(1~2mm) を多量に含 む。	良好	2B区 5層 1/6
7	同上	口 径 14.6		口縁部が斜上方へ外反気味に伸びる。 口縁部内外面ヨコナギ。	浅黄色	粗 長石・チヤ ート(0.5~ 3mm)を多量 に含む。	良好	2B区 5層 1/4
8	土器器 壺			尖り気味底。 底部および体部内外面ナゲ。	内 外 オリ ブ黑色 灰白色	やや粗 角閃石・長 石(0.5~1 mm)を少量 含む。	良好	2B区 5層 底部完存
9	同上	底 径 3.0		突出しない平底。 底部および体部内外面ナゲ。	灰白色	粗 長石(0.5~ 4mm)を多量 に含む。	良好	3F区 5層 底部完存
10	土器器 広口壺	口 径 14.0 深 底 最大径 26.7 25.0		突出しない平底の底盤。体部は球形。口縁 部は斜上方へ外反する。 口縁部内外面ヨコナギ、体部上位へラミガ キ、体部中位以下へラケズリの後一部ハラ ガキ。	灰黃色	やや粗 長石・チヤ ート(0.5~ 2mm)を少量 含む。	良好	2A区 5層 1/2以上
11	壺形土器 蓋	口 径 14.6		口縁部が斜上方へ外反する。 口縁部内外面ヨコナギ、体部外面右上がり の低いタタキ、内面ナゲ。	にぶい黃 色	やや粗 長石・赤色 酸化土粒 (0.5~5mm) を多量に含 む。	良好	1B区 5層 1/4
12	同上	口 径 14.8		口縁部が斜上方へ外反する。 口縁部内外面ヨコナギ、体部外面右上がり のタタキ。	褐灰色	粗 長石・赤色 酸化土粒 (0.5~5mm) を多量に含 む。	良好	S.D. - I 1/4
13	同上	底 径 4.4		突出した底盤。底部外面中央部はわずかに くぼむ。 底部内外面ナゲ、体部外面右上がりのタタ キ。	褐灰色	粗 角閃石・長 石(0.1~2 mm)を多量 に含む。	良好	2B区 5層 底部完存

遺物番号	器種	法量 (cm)	口径 器高	調査等の特徴	色	調	胎土	焼成	備考
14	弥生土器 素	底径	4.5	突出した底部。底部外側中央部はわずかにくぼむ。底部内外面ナデ、体部外側右上がりのタタキ。	赤褐色	粗	粗角閃石・長石(0.1~3mm)を多量に含む。	良好	1・2 C D 区 5層 底部充存
15	同上	底径	2.8	やや突出した底部。底部内外面ナデ、体部外側右上がりのタタキ。	内外 褐色 灰褐色	粗	粗角閃石・長石・黑雲母(0.1~2mm)を多量に含む。	良好	1・2 E F 区 5層 底部充存
16	同上	底径	4.3	やや突出したくぼみ底。底部内外面ナデ、体部外側右上がりのタタキ。	灰褐色	粗	粗長石(0.5~5mm)を多量に含む。	良好	2 D E 区 5層 底部充存
17	弥生土器 素	底径	4.5	やや突出したくぼみ底。底部内外面ナデ、体部外側水平方向のタタキ。	にじい黄褐色	やや粗	粗長石(0.5mm)を散見する。	良好	2 B 区 5層 1/2
18	同上	底径	3.6	突出しないくぼみ底。底部内外面ナデ、体部外側右上がりのタタキ。	褐色	粗	粗角閃石・長石・黑雲母(0.5~3mm)を多量に含む。	良好	4 E F 区 5層 底部充存
19	弥生土器 高杯			中実の柱状部。 柱状部外側および脚部内外面ナデ、杯部内外面ナデ。	灰白色	やや粗	粗角閃石・長石・赤褐色 酸化土粒(0.1~2mm)を多量に含む。	良好	2 D E 区 5層 柱状部充存
20	同上			中空の柱状部。 器壁剥離のため調査不明。	にじい黄色	粗	粗角閃石・長石・石英・黑雲母(0.1~3mm)を多量に含む。	良好	1 B 区 5層 柱状部充存
21	同上			中実の柱状部。 柱状部外側壁のヘラミガキの後ナデ、脚部内外面ナデ。	浅黄色	やや粗	粗長石・角閃石(0.1~2mm)を少量含む。	良好	S K - 2 柱状部充存
22	土器 素	口径	14.8	「く」の次に屈曲する口縁部。 口縁部は上つまみ上げ気味になる。 口縁部外側口コナデ、内面ハケナデ、体部外側右上がりの繊筋タタキ、内面ヘラケズリ。	灰黃褐色	やや粗	粗長石・角閃石(0.1~1mm)を多量に含む。	良好	3 F G 区 5層 1/4
23	同上	口径	15.4	口縁部は斜上方へ外反して伸びる。口縁部は上方へつまみ上げられ、外輪する面を有する。 口縁部外側ハケナデの後ヨコナデ、口縁部内面ヨコナデ。	灰黃褐色	やや粗	粗長石・角閃石(0.5~2mm)を多量に含む。	良好	2 B 区 5層 1/4
24	同上	底径	1.8	小さい平部の底部。 底部内外面ナデ、体部外側壁の織かいわケナデ、内面ナデ。	内外 黒褐色	やや粗	粗長石・角閃石(1mm)を少量含む。	良好	2 B 区 5層 底部充存
25	土器 小型鉢	口径 器高	9.2 5.2	丸底の底から内湾気味に体部が上方へ伸びた後、小さく上方へ外反する口縁部に至る。	灰白色	粗	粗長石・角閃石(0.5~1mm)を多量に含む。	やや不良	S K - 2 1/4
26	同上	口径 器高	12.8 6.7	丸底の底部に、斜上方へ直線的に大きく開く口縁部が付く。 口縁部内外ヨコナデ、底部外側指込成形後ナデ、内面ナデ。	灰黃褐色	やや粗	粗長石・石英(0.5~2mm)を散見する。	良好	2・3 D E 区 5層 1/2以上

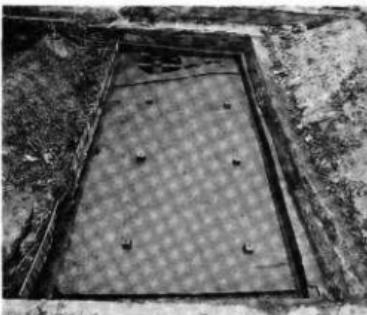
まとめ

今回の調査では、特に調査地の東部を中心 に遺構・遺物が検出された。当調査地を含めた東郷遺跡内では、昭和53年以降の近鉄八尾駅開発を境に各種工事を伴う発掘調査が30次 にわたって実施され、遺跡の全容が明らかに なりつつある。当調査地に隣接する東側では 第5次・第14次・第18次、西側では第3次・ 第16次が実施されている。特に第5次・第14 次調査では古墳時代前期の堅穴住居・井戸・

土坑・溝を主体とする居住地が検出された他、 第3次調査では調査地点が沼沢地であったこ とが確認されている。以上のことから、調査 地の東側(3区)で検出された遺構群は、調査 地の東側で確認されている居住地に関連した 遺構であると考えられている。また、調査区 西部(1区)においては、第3次調査で確認さ れた沼沢地の広がりが想定されたが、それ らに該当する土層の存在は認められなかつた。



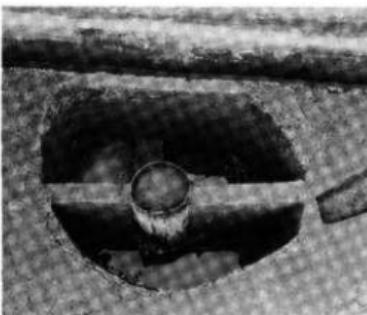
第1調査区全景（南西から）



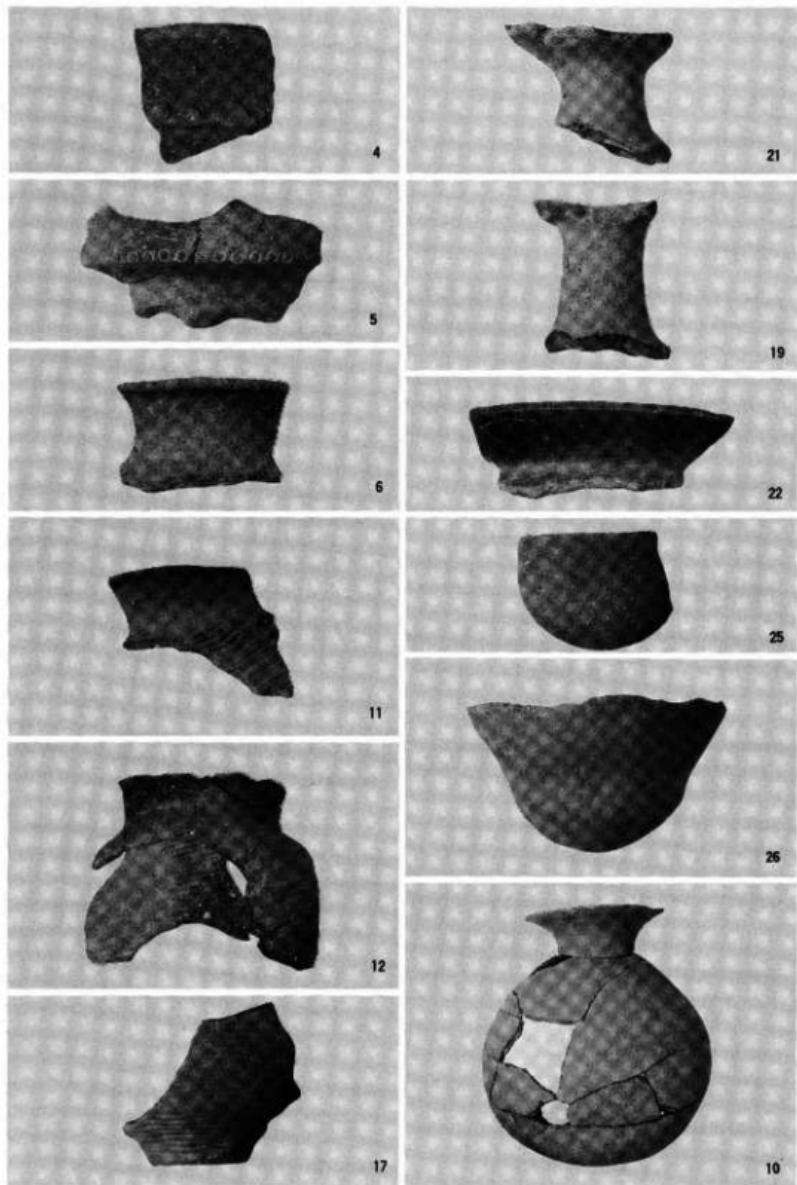
第2調査区全景（南西から）



第3調査区全景（南西から）



SE-1検出状況（南西から）



第5層(4~6・10・11・17・19・22・26)、SD-1(12)、SK-2(21・25)出土遺物

4. 東郷遺跡 (TG 89-32)

調査地 八尾市光町2丁目59番地

調査期間 平成元年9月25日～10月7日

調査面積 130m²

はじめに

今回の発掘調査は、共同住宅の建設に伴うものである。調査地は、当遺跡推定範囲内の中心部である近鉄大阪線八尾駅周辺にあたっており、開発の盛んな地域で、発掘調査件数もかなりの件数にのぼっている。今回の調査は第32次調査にあたり、第29次調査地のすぐ南に位置している。

調査概要

約256m²の調査地に2本のトレンチを設定し、1本6日の日程で順次調査を行う計画を立てた。なお、敷地が狭く排土の置場が確保できないため南側の第1トレンチの機械掘削排土約100m²を場外搬出し、掘削を行った。掘削は、第1トレンチでは機械で、約1.4～1.6m、人力で0.4～0.6m、第2トレンチでは機械で1.6～1.8m、人力で0.3～0.4m程度である。両トレンチで、平面的な調査終了後、下層部分の確認をした。

調査地の旧状は駐車場で、1.0～1.2m程度の盛土があり、現地表面の標高は、7.8～7.9mを測る。旧耕土は厚さ10～20cmで、上面の標高は、6.8m前後を測る。床土にあたる第2層緑灰色砂混粘土、第3層灰綠色砂混粘土は20～30cmの厚さで堆積している。



調査地位置図

第4層灰茶色砂混粘土からは、中世の土器類が若干出土している。その下層に堆積する第5層黄茶色粘質シルト、第6層暗灰茶色粘質シルトが、第29次調査で検出した弥生時代後期～古墳時代の遺物包含層、遺構内埋土である。調査対象とした土層は、その直下の第7層灰色微砂～微砂混シルトで、西へ行くほど粘性が高く落ち込んで行く。上面の標高は、南東部（第1トレンチ東部）が6.3～6.4mと高く、中央部から西部は、5.8～6.0mと低くなっている。下層部分の土層堆積は、第8層植物遺体を多量に含む灰色～暗灰色粘土、第9層灰青色粘土、第10層青灰色シルト・砂・礫の互層、第11層粗砂～礫、第12層青灰色シルトとなり、河川内部の堆積状況を示している。このうち、第11層上面で、弥生時代中期のものと思われる土器片を検出した。

遺構は、溝8条（SD-1～SD-8）のほか、第2トレンチで落ち込みを検出した。溝のうち、SD-1のみ、方向・規模・内部

ており、詳細は不明である。遺構に伴う出土遺物は皆無である。

検出遺構

SD-1

第1トレンチ南西で検出した。この溝のみ東南東から西北西へ伸びる。幅60~80cm、深さは、40~50cm程度である。内部堆積土は上層から茶灰色砂粘質シルト(第6層に対応する)・灰色微砂混シルト・灰色微砂・灰色細砂である。

SD-2

第1トレンチ西部で検出した。幅40~55cm、深さ10cm前後と浅く、底部は平坦である。内部堆積土は黄灰色シルトである。ほぼ南北に伸びるが、南端は途切れている。

SD-3

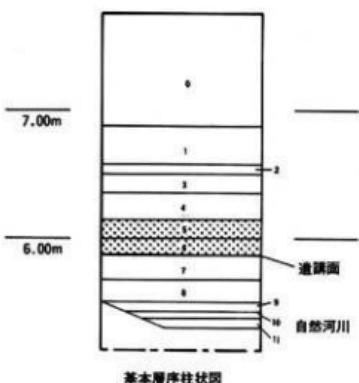
SD-2の東1.9mで検出した。幅40~55cm・深さ15~20cm、断面の形状はV字形である。内部堆積土は第6層の暗灰茶色粘質シルトである。ほぼ南北に伸びる。

SD-4

SD-3の東1.7mで検出した。幅30~45cm・深さ15~20cm、断面の形状はU字形である。内部には、上層から第6層・黄灰色シルトの2層が堆積している。ほぼ南北に伸びる。

SD-5

SD-4の東1.5~2.0mで検出した。幅40~60cm・深さ15~30cm、断面の形状はV字形である。内部堆積土はSD-4同様、第6層・黄灰色シルトの2層からなる。流路方向はほぼ南北であるが、北部でやや東へ振って



基本層序柱図

堆積土などが大きく異なり、第6層上面から切り込まれている可能性がある。SD-2~SD-7は、概ね1.5~3.0m間隔ではほぼ南北に伸び、内部堆積土は第6層を主としている。また、第1トレンチの西部~中央部に位置しているSD-2~SD-5は、第2トレンチでは検出していない。第2トレンチのこの部分は落ち込みとなっており、この部分へ合流するものと思われる。SD-6は、SD-7に合流するものである。

出土遺物は、第2層・第3層から近世の陶磁器の小破片が若干量、第4層から中世の土師器・須恵器・瓦器・陶磁器などの小破片が10数点出土している程度である。その他では、第1トレンチから、古墳時代のものと思われる土師器壺体部が、まとまった形で約4分の1程度出土しているが、磨耗が激しく詳細は不明である。この他、下層部分の埋没河川上面から弥生時代中期のものと思われる土器片3片が出土したが、これも磨耗を激しく受け

いる。この溝以東、遺構面である第7層上面は10cm程度高くなっている。

SD-6

SD-5の東2.5~3.0mで検出した。幅30~50cm・深さ5~10cm、断面の形状は浅い半円形である。内部堆積土は第6層、流路方向は概ね南北からやや東へ振っている。

SD-7

SD-5の東1.5~2.0mで検出した。幅50~100cm、深さ10~20cm、断面の形状は浅い半円形、内部堆積土は第6層、ほぼ南北に伸びる。この溝以東も、第7層上面が段をもって10cmほど高くなっている。

SD-8

第2トレンチ東端、SD-7の東3m付近で検出したが、東の肩は平面的に検出できていない。東壁・南壁の観察から、幅1~2m、深さ20~30cmと規模は大きい。流路方向は南南西から北北東である。内部堆積土は、上層から茶灰色砂混粘土・黄灰色粘土混微砂・灰色粘土である。

落ち込み

第2トレンチ中央部以西で、第7層が緩やかに落ち込み、砂・粘土の互層が堆積する部分を確認した。内部には、灰色粘土・灰色中砂混粘土・茶灰色粘土・灰黄色粘土・灰色細砂・灰茶色砂混粘土などが堆積している。

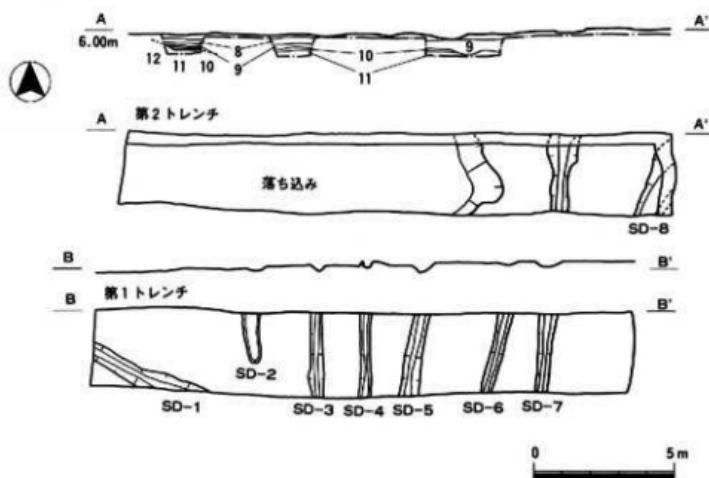
これらのうち、SD-3~SD-5とSD-6・SD-7の各溝の間には、第1トレンチ北部第7層上面に暗灰色微砂混粘土が部分的に堆積しており、この層を遺構内部の堆積土と考えれば、SD-3~SD-5が第2ト

レンチの落ち込みへ続くこと、SD-6とSD-7が合流することは明らかである。

まとめ

今回の調査では、北隣りの第29次調査地や南東の第20次調査地で検出されている古墳時代前期の方形周溝墓に関連する遺構は検出されなかった。一方、西側の調査地のような、生活に密着した遺構も検出されていないことから、当地が居住域としても墓域としても利用されていないことが明らかになった。このことの理由のひとつには、下層部分で検出した河川が、この時期まで強く影響を及ぼしていたことがあげられるだろう。今回検出した小溝群SD-2~SD-7は、落ち込みに合流することから、排水・取水施設と考えることができる。また、整然と並び、SD-5とSD-7を境として遺構間に段差がついていることから、土地区画をかねた水路などの可能性も考えられる。

なお、下層で検出した河川は、当調査地で検出した弥生時代中期の埋没河川に続くものである。その堆積状況から、第2トレンチ北西端付近の現地表下2.2~2.3m（標高5.5m前後）に第12層青灰色シルトからなる一時期の岸辺があり、東部へ深く落ち込んでいることがわかる。



邊境平断面図



第1トレンチ（東より）



第2トレンチ（東より）

5. 八尾南遺跡 (YS89-14)

調査地 八尾市若林町3丁目116

調査期間 平成元年5月8日～5月19日

調査面積 100m²

はじめに

八尾南遺跡は八尾市の南端部にあたり、現在の行政区画では若林町・西木の本一帯に所在する。地形的には南方から伸びる羽曳野丘陵の縁辺部に立地し、遺跡の南部では地形が南から北へ向かい緩やかに傾斜しているが、北部では河内低平地に続く平坦な地形となっている。

当遺跡の周辺には西に市域（大阪市）を境とするが、同一遺跡と考えられる長原遺跡をはじめとし、東に木の本遺跡、南に津堂遺跡、北に城山遺跡が存在する。

今回の発掘調査は共同住宅の建設に伴うもので、当遺跡推定範囲内の南側に位置する。

調査概要

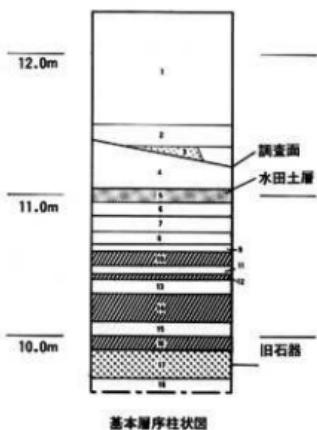
調査は、八尾市教育委員会の指示書に基づき、調査地の建設予定内に25m×4mの南北トレンチ（調査区）を設定した。調査にあたっては、現地表下約1m前後（旧耕土下）までを機械掘削し、それより以下の土層については、建築基礎の部分4箇所に2×2mのグリッド（北から1～4G）を設定して人力掘削した。

調査の結果、地表下2.5mまでの調査から18層の基本層序を確認することができた。上



調査地位置図

から第1層：盛土、第2層：旧耕土、第3層：褐色粘質土、第4層：茶灰色粗砂混細砂、第5層：暗褐色粘土、第6層：暗灰褐色細砂混粘土、第7層：灰橙色細砂、第8層：暗灰色細砂混粘土、第9層：灰色粘土、第10層：暗灰褐色粘土、第11層：暗灰青色粘土、第12層：暗灰黑色粘土、第13層：暗青灰色粘土、第14層：暗灰黑色粘質シルト、第15層：暗青灰色粘質シルト、第16層：暗灰黄色シルト、第17層：乳灰黄色シルト、第18層：乳灰青色シルトである。このうち、第2層直下から切込んでいる鎌倉時代の溝2条を検出した。第4面上面で古墳時代中期に比定される遺構面を検出した。遺構は小穴5個である。この遺構面は調査区内の南部が高く、北東へ緩やかに傾斜しており、北側には古墳時代中期に比定される遺物包含層（第3層）が薄く堆積している。第5層以下の土層は下層調査（グリッド）で確認し、旧石器時代の相当層（第17層）の調査を実施した。



中世の遺構

旧耕土の直下から切込む南北方向の溝2条(SD-1・SD-2)を検出した。SD-1は幅30~60cm、深さ16cmを測り、淡灰色粘質土が堆積する。SD-2は1.5m以上、深さ15cmを測り、淡灰色粘質土が堆積する。これらの溝は調査区内の中央で合流し南側で1条となる。遺物は、溝内から土師器・壺・古錢(熙寧元寶1067~1085)などがごく少量出土した。

古墳時代中期の遺構

調査区の北部の第4層上面で小穴5個を検出した。平面の形状は円形及び楕円形で、SP-1が径36cm、深さ6cm、SP-2が東西30cm、南北40cm、深さ8cm、SP-3が径44cm、深さ18cm、SP-4が径33cm、深さ6cm、SP-5が径46cm、深さ17cmをそれぞれ測る。断面はすべて逆台形を呈し、暗灰褐色粘質土が堆積している。遺物は内部から出

土していないが、この遺構面の上面に堆積している第3層内から土師器・形象埴輪などの小片がごく少量出土していることから、古墳時代中期の遺構と判断した。

下層調査

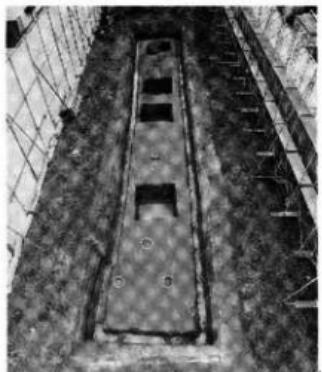
第5層が弥生時代後期の水田土層と考えられ、その上面から足跡と考えられる縫みが見られる。畦畔などは検出しなかった。第6層内からは弥生時代中期と考えられる弥生式土器の小片がごく少量出土している。その直下の第7層上面で平面調査を実施したが、遺構は検出できなかった。しかし、2Gの東断面から炭化物を含む小穴状の縫みが1箇所観察できた。これより以下の土層から遺構は検出しなかったが、第10層・第12層・第14層・第16層の土層は、既往調査の結果から判断すると、上方から弥生時代前期~縄文時代後期までの各包含層と考えられる。また、第17層は長原地山といわれる旧石器時代の相当層であるが石器などは検出できなかった。

まとめ

今回の調査では、鎌倉時代の溝2条と調査区の北部で古墳時代中期の小穴5個を検出しただけである。鎌倉時代の溝は、働溝とか畠溝と言われるいわゆる耕作溝で、当遺跡全域にみられる。古墳時代中期の遺構は、調査区の南と北で実施した八尾市教育委員会の試掘調査、西側に隣接する調査では古墳時代中期の遺構が検出されており、今回の調査区は空白部分にあたり、居住域の広場の部分と考えられる。

5 八尾南遺跡

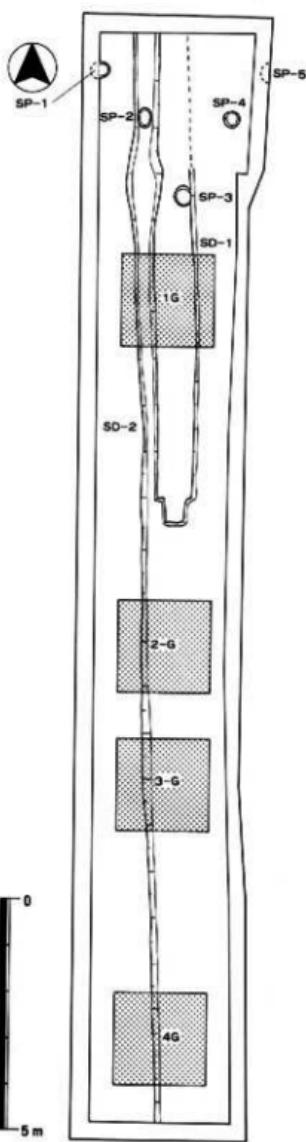
下層調査では、旧石器時代の相当層（いわゆる長原地山）の土層までの調査を行い、遺構・遺物の確認を実施したが、グリット内では検出できなかった。



調査区全景（北から）



下層調査（3 G）（西から）



検出遺構平面図

6. 八尾南遺跡 (Y S 89-15)

調査地 八尾市若林町1丁目76番地

調査期間 平成元年11月6日～2年2月15日

調査面積 846m²

はじめに

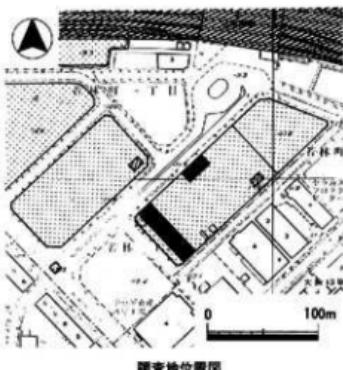
今回の発掘調査は、社屋の建設に伴うもので、当遺跡推定範囲内の中心部にあたる地下鉄谷町線八尾南駅のすぐ南側に位置している。この調査は当調査研究会が当遺跡内で実施した第15次調査にあたる。

調査概要

本調査は、(株)三起商行社屋建設に伴う調査であるが、昭和61年にも同様の契機での調査を実施している(第5次調査)。今回の調査は建築物の計画変更により前回の調査区を拡張するかたちで調査区を設定しており、掘削深度も建築物が地下構造になるために深く、対象とする遺構面も3面以上存在することが予想された。

調査は、第5次調査北調査区の南西隅に接する調査区(N区)と同南調査区の南に延長した調査区(S区)の2ヶ所で実施した。

N・S区の両調査区とともに、現地表面下1.5mまで機械掘削により耕土をおこない、それ以下は順次、人力掘削による遺物包含層および遺構の確認、精土に努めた。また、S区では上層と中層の遺構面の調査終了後に、再度機械掘削をおこない下層遺構面を確認した後、最終的に部分的なトレンチ・グリッド



調査地位置図

併用により最下層遺構面(後期旧石器時代)

確認のため、人力掘削による精査を行った。

調査は、元年11月6日に開始し、同2年2月16日にすべての調査を終了した。実働75日を要し、総調査面積は846m²である。

なお、2年2月10日に現地説明会を実施し、調査の成果を一般に公開した。その結果、約450人の見学者が現地を訪れた。

1. N区の調査

層序：遺構面となるような明確な土層を把握するのが困難な堆積状態であったが、基本的には、次のような状況となっている。なお、併せて長原遺跡の基本層序との対比も記すことにする。

第0層 (NG 0) : 盛土。層厚130cm。

第1層 (NG 1) : 旧耕土。層厚20cm。

第2層 (NG 2) : 灰白～灰褐色砂泥粘質土。層厚10cm。近世・近代の遺構を含む。

第3層（NG 4）：灰色～青黄色砂質シルト。層厚35cm。古墳時代～中世の遺物を含む。

第4層（NG 7）：明黄褐色～にぶい黄褐色シルト質粘土。層厚40cm。

第5層（NG 8 b）：灰～明黄褐色粘質微砂。層厚15cm。

第6層（NG 8 b）：灰白～浅黄色シルト質微砂・細砂。層厚50cm。

第7層（NG 8 c）：灰白～明黄褐色シルト質粘土・細砂。層厚100cm。自然河道堆積。若干量の弥生時代前期の上器片を含む。

第8層（NG 9・括）：暗灰～暗褐色砂混粘質土・粘土。層厚20cm。

第9層（NG 9 A）：灰オリーブ～褐色砂。シルト粘質土。層厚20cm。

第10層（NG 10・11）：線灰～青灰色微混シルト・シルト質粘土。層厚30cm。木成層。

第11層（NG 12）暗褐色～黒褐色粘土質シルト。層厚35cm。縄文土器及び石器を含む。

第12層（NG 13以下）：明オリーブ灰～明緑灰色粘質シルト・微砂。層厚30cm以上。

検出遺構と出土遺物

明確な遺構は検出されなかったが、上層及び調査区中央の擾乱坑内壁の土層断面精査により、数条の南北方向の自然河道を確認している。第7層を累積層としており、弥生時代

前期古・中段階の土器片を包含する。検出した河道の累積は、すべて同様のものであるが、介在する土層の存在から時期的に近接する時期が考えられ、層序の対比および遺物からも縄文時代晩期～弥生時代前期の小河川として理解しておきたい。

また、調査区西隅では、第11層より微量の縄文時代の上器片およびサヌカイト製の剣片が出土している。

なお、N区全体での遺物出土量は、コンテナにして2箱程度であった。

2. S区の調査

層序：基本的にはN区の層序とあまり変化はないが、各遺構面ともに良好な堆積状態を示している。

ここでは、長原遺跡の層序表記を使用し、主要な土層についてのみ概説しておく。

第0層（NG 0）：盛土。層厚120cm。

第1層（NG 1）：旧耕土。層厚120cm。

第2層（NG 2）：層厚10cm。

第3層（NG 3）：浅黄色微砂混粘土質シルト。層厚10cm。

第4層（NG 4）：層厚20cm。

第5層（NG 6・7）：明黄褐色～にぶい黄褐色微砂混シルト質粘土。層厚20cm。上部に須恵器、土師器、埴輪などの小片を含む。

第6層（NG 7）：層厚25cm。

第7層（NG 8 a）：層厚20cm。

第8層（NG 8 b）：層厚25cm。

第9層（NG 8 c）：層厚80cm。自然河道堆積。多量の弥生時代前期の土器片

出土。

第10層（NG 9 A）：層厚10cm。上面で小穴群を検出。

縄文時代晩期の土器（長原式）を出土。

第11層（NG 9 B）：灰～明オリーブ灰色微砂泥粘土。層厚30cm。

第12層（NG 9 C）：黒褐色砂泥シルト質粘土。層厚20cm。

上部に縄文時代後期の土器片、サヌカイト製の石器を含む。下部上面で住居跡を検出。

第13層（NG 10・11）：層厚30cm。

第14層（NG 12）：層厚15cm。

第15層（NG 13以下）：層厚40cm以上。

遺構検出面は、第5層、第9層上部、第10層、第12層下部である。第9層上部遺構面は調査区内での分布範囲が狭く、土層断面での確認のみである。

の弥生時代前期の土器である。

まとめ

今回の調査では、従前の調査の成果に加えてさらに多くの新たな知見を得ることができた。まず第一に、自然河道より多量の弥生時代前期古・中段階の土器が出土したことがあげられ、それらは、中河内地域における弥生文化受容期の土器様相を検討するうえでの良好な資料となり得るであろう。

また、前期古段階の資料の豊富な存在は、中河内における当遺跡の先進性を裏付けるものと言える。

次に、縄文後期の住居跡の検出は、当遺跡での集落域を推定するための一助となり、今回確認した当核期の良好な遺物包含層（NG 9 C層）とともに、今後の調査ではなお留意する必要がある。

検出遺構と出土遺物

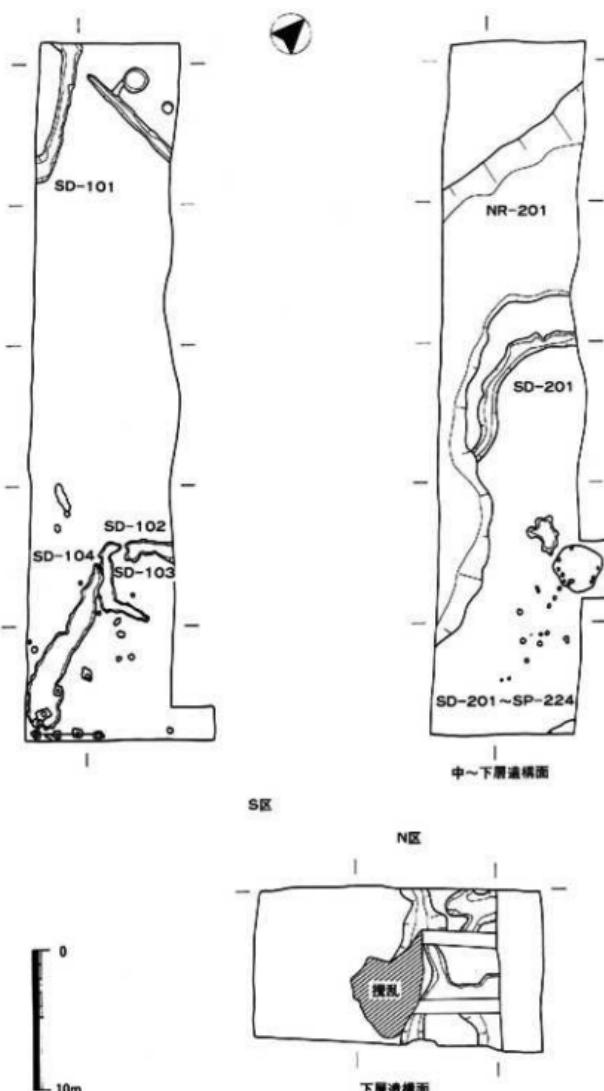
前述した3面を対象として調査を実施した。それぞれを上層、中層、下層として、以下、各遺構面毎の概要を記す。

①上層遺構面（第5層上面）…弥生時代後期～古墳時代後期

②中層遺構面（第10層上面）…縄文時代晩期～弥生時代前期

③下層遺構面（第12層下部上面）…縄文時代後期

④最下層（第13層以下）…確認調査以上、SJKでは、遺物出土量はコンテナにして23箱である。そのうち半数の12箱は自然河道出土



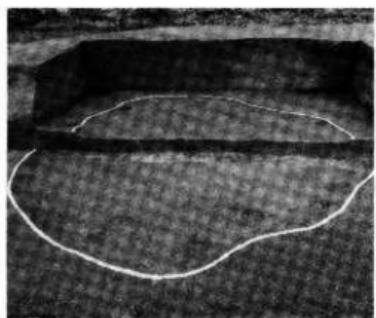
遺構平面図



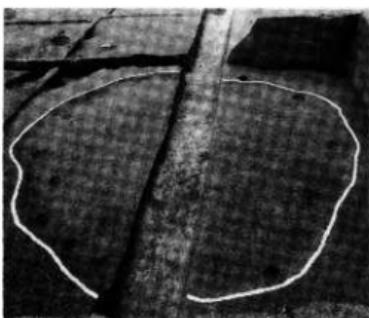
N区下層遺構面（西から）



S区中～下層遺構面（北から）



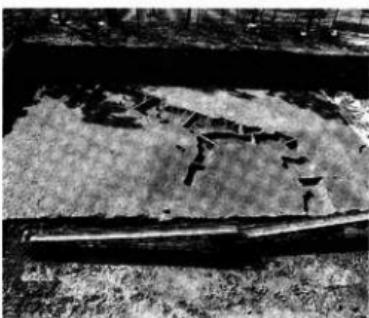
S型住居跡（西から）



S型住居跡（南から）



S区上層遺構面（南から5）



溝（SD102～104）・獨立柱遺物（北から）

7. 八尾南遺跡（Y S89-16）

調査地 八尾市北木の本1丁目～南木の本4丁目

調査期間 平成元年10月25日～2年2月22日

調査面積 97.38m²

はじめに

当遺跡では、現在（平成2年2月）までに23件の発掘調査が実施されている。調査主体の内訳としては大阪府教育委員会3件、八尾市教育委員会5件、当調査研究会15件である。これらの調査成果から、特に当遺跡の南部には旧石器時代～鎌倉時代に至る遺構・遺物が重複し、広範囲に分布していることが明らかになっている。今回の調査地は、当遺跡の北部の沖積地に位置し、当調査研究会が実施した第16次調査にあたる。

調査概要

発掘調査は八尾市公共下水道工事に伴うもので、八尾市教育委員会の指示に基づき、当調査研究会が事業者と協定書を締結して調査を実施した。

調査は、発進立坑（約100m²）と到着立坑（約32m²）部分の2箇所である。まず、最初に工事が先行する発進立坑（第1調査区）から調査を実施し、その調査の終了（2ヶ月）後、到着立坑（第2調査区）の調査を実施した。

第1調査区では、東部に隣接する第4次調査（註1）の調査成果から弥生時代後期の生



調査位置図

活面が現地表下約2.5m（標高約7.3m）で確認されており、その結果をもとに機械掘削（約2m）及び人力掘削（約1m）を実施した。その結果、第5次調査の生活面に相当する土層（第11層）を確認したが、古墳時代前期（庄内式）の土器片2点を出土しただけで、遺構は検出できなかった。

第2調査区では、北西部に隣接する第11次調査（註2）の調査成果から弥生時代後期の生活面が現地表下3m（標高7.5m）で確認されており、その結果をもとに機械掘削（約3m）及び人力掘削（約1m）を実施した。その結果、調査区全域が現地表下2.5m付近から砂層（第5層）で埋没した古墳時代の自然河川を検出し、第11次調査で検出している弥生時代後期の生活面は検出できなかった。なお、それぞれの調査区では幅1m、長さ4mの規模で下層確認トレンチの調査を実施したが、遺構・遺物は検出できなかった。また、次頁に掲載しているのは、第1調査区と

第2調査区の基本層序の柱状図である。

まとめ

今回の調査は、隣接する既往調査の成果を踏まえて、遺構の広がりがあるものと考えていたが、第1・2調査区ともに小面積な調査であり、遺構を確認することはできなかった。第1調査区では、弥生時代後期の遺物包含層と考えられる土層が第4次調査と同一レベルで確認したが、遺構は検出できなかった。第2調査区では、調査区全体で古墳時代中期以降に埋没した自然河川を検出しており、第11次調査で検出している弥生時代後期の遺構面は検出できなかった。また、それぞれの調査区で下層確認の調査を実施したが、上層と同様、遺構・遺物は確認することができなかつた。

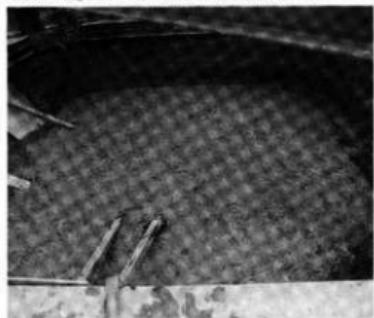
註

註1 (財)八尾市文化財調査研究会「昭和59年度事業概要報

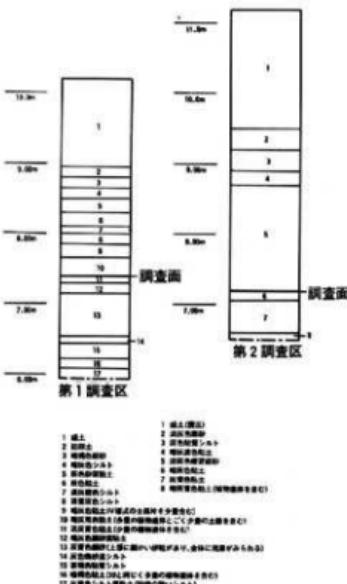
告」(財)八尾市文化財調査研究会報告7

註2 (財)八尾市文化財調査研究会「八尾市文化財調査年報

昭和63年度」(財)八尾市文化財調査研究会報告25



第1調査区（北から）



第2調査区下層確認トレンチ（東から）

8. 水越遺跡 (MK89-2)

調査地 八尾市千塚170番地

調査期間 平成元年5月16日～6月21日

調査面積 約600m²

はじめに

水越遺跡は八尾市の北東部で、行政区画では水越・千塚一帯にあたり、縄文から中世に至る複合遺跡である。地形的には、生駒山地西麓から西へ広がる扇状地に位置している。

周辺には、多くの遺跡や古墳が存在しており、当遺跡の周辺に限れば、北西に太田川遺跡・北に心合寺山古墳、大竹遺跡が存在している。

調査概要

調査予定地内に4箇所のトレンチ（北から第1～4調査区）を設定し、調査を行った。調査に際しては、八尾市教育委員会の指示書に基づき、現地表下0.6～0.8mまでの土層を機械で掘削し、以下の各層は人力掘削を実施して、遺構・遺物の検出に努めた。

当調査地での基本層序は、第0層：盛土・第1層：耕土【暗灰色細砂混粘土】・第2層：床土【淡青灰色細砂混粘土】・第3層：茶褐色細砂混粘土・第4層：暗灰褐色細砂混粘土・第5層：淡茶褐色シルト混粘土・第6層：暗灰色粗砂混粘土・第7層：灰茶色粘土・第8層：灰青色細砂混粘土・第9層：灰青色シルト混粘土である。

調査の結果、第1調査区～第4調査区では、現地表下0.7～1.2m（標高14.8～15.6m）の



調査地位置図

第5層上面で、弥生時代中期の竪穴住居3棟、井戸6基、土坑14基、小穴195個、溝24条と古墳時代前期【布留式期】の井戸1基を検出し、第4層上面で中世の溝2条を検出した。なお、第4層上面から切り込まれている遺構については、第4層の層厚が比較的薄く結果的には第5層上面で検出するかたちとなった。また第2調査区東側の下層確認トレンチ（第9層上面）で縄文時代中期の自然河道1条を検出した。

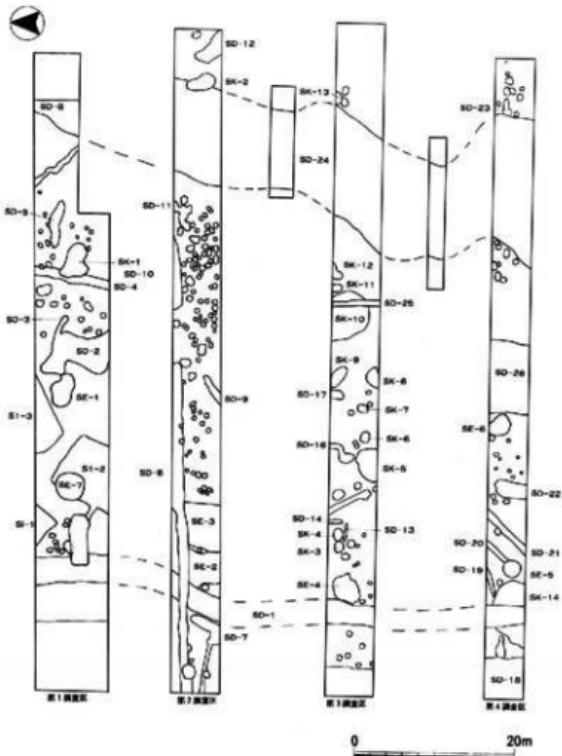
まとめ

今回の調査では、弥生時代中期と古墳時代前期の遺構・遺物を検出した。また下層確認トレンチでは、縄文時代中期の遺構を検出している。

検出した遺構の中でも弥生時代中期の遺構は、中期初頭から中期後半（第II様式～第IV様式の新段階）にかけてのもので、この時期に当調査地で生活していたことが明らかにな

った。特に調査区の東側で検出した断面V字形の溝は集落を区画しており、この溝の西側に居住域があったと思われる。この溝は、扇状地を南北に切っている環濠と思われる。居住域の中でも、第1調査区では竪穴式住居を検出しており、調査地内の北側に竪穴式住居が集中していることがわかった。また、第2調査区の中央付近では柱穴を特に多く検出しており、掘立柱建物が建てられていたものと思われる。

今回の調査地の東約100mで、昭和53年度に大阪府教育委員会が行った府立泉友高等学校建設に伴う発掘調査では、弥生時代の方形周溝墓・溝・土器窓などを検出しており、今回の調査地でわかった居住域の近隣に墓域が存在していることがわかった。また、縄文時代中期の遺構を検出したことから、当地域一帯に集落が存在していた可能性があると思われる。

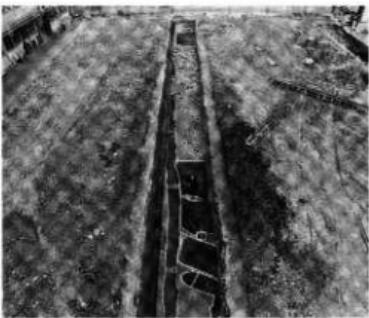


検出遺構平面図

8 水道跡



第1調査区全景（西から）



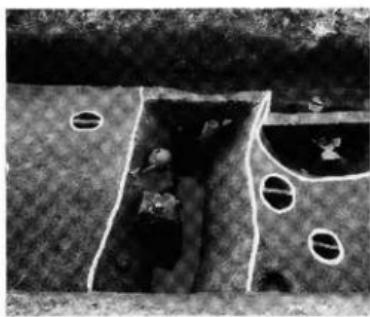
第2調査区全景（西から）



第3調査区全景（西から）



第4調査区全景（東から）



第2調査区溝（SD-1）内遺物出土状況（南から）



第1調査区溝（SD-2）内遺物出土状況（南から）

9. 水越遺跡 (MK89-3)

調査地 八尾市水越2丁目117

調査期間 平成元年6月26日～7月19日

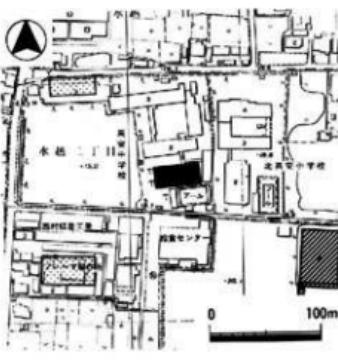
調査面積 451m²

はじめに

今回の調査地は、南北に通る旧東高野街道から東に入る式内社の玉祖神社への参道「松の馬場」の接点で、この南東部の水越181番地内に所在する市立高安中学校内にある。調査は八尾市の計画事業である体育館建て替え工事に伴うもので、当調査研究会が当遺跡内で実施した第3次調査にあたる。

調査概要

調査区は、市立高安中学校の敷地内から南東部にあたる旧体育館跡で、そこに新体育館を新築するものである。調査区の設定はその計画地内で、建設基礎工事によって破壊される部分を対象としたが、既設（旧体育館）の基礎で破壊されている為、その部分については除外して設定した。調査区は「L」字形で東西に東西9.5m、南北24.3mを測るトレンチと、このトレンチの北西角から西に延びる幅3.5m、長さ34.5mを測るトレンチである。掘削については、八尾市教育委員会の試掘データに基づき、機械掘削を実施した。その結果、現地表下約0.3mまでの掘削であったが、西側が深く落ち込んでおり、機械掘削の深度が0.3～1.5mとなった。機械掘削終了後、八尾市教育委員会から新たに指示があり、旧体



調査位置図

育館跡地の部分については引き続き機械掘削を実施した。機械掘削後の土層については手掘りによる掘削・精査を実施した。

当調査区では、現地表面から約2.7mまでに存在する土層内から普遍的に見られる7層を摘出して基本層序とした。現地表面は標高17.5mを測る。

第1層：盛土。層厚40～250cm。当中学校の建設の際に整地された土層である。西側に行くに従って堆積しており、西側では約2.5mを測る。また、旧体育館の基礎工事によっても大きく擾乱されている。

第2層：暗茶灰色細砂混粘土。層厚10～20cm。この土層は近世の堆積で、造成によって削平されており、西側ではなく、東南側に堆積する。この上面は標高15.8mを測る。

第3層：淡橙茶色粘質土。層厚60～80cm。この上面から古墳時代前期の遺構が

9 水路遺跡

切り込んでいる。西部・南部の一部は擾乱されている。

第4層：青灰色細砂混粘質土。層厚20cm。

第5層：暗青灰色細砂混粘質土。層厚20～30cm。

第6層：黒灰色粘質土。層厚50～80cm。

以上、当調査区内の基本層序である。このうち、第3層上面から弥生時代後期の土坑2基、古墳時代前期の自然河川1条を検出した。下層調査では、さらに古い自然河川を確認している。第3層上面を調査対象面とした。しかし、調査区西側は削平されており、東側の部分の調査となった。調査の結果、弥生時代後期の土坑2基、古墳時代前期に比定される自然河川1条を検出した。

まとめ

調査区は、高安中学校の建設工事の際の造成によって大半が削平を受けており、若干の遺構を検出しただけである。検出した遺構には

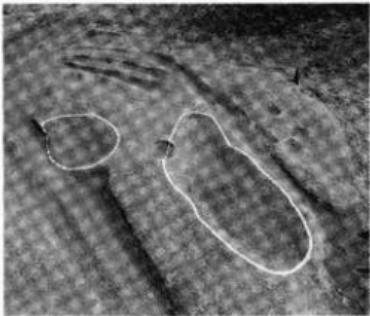
土坑2基・自然河川1条がある。土坑は弥生時代後期のものと考えられるが、詳細なことは不明である。自然河川は、一時的な氾濫が何回か繰り返されていることが堆積状況から窺える。ことことは、当調査区の南東部に隣接する府立清友高等学校の建設工事に伴う発掘調査や南部の第2次調査では、居住地や墓域などの遺構が検出されており、これらの調査地は小高い丘陵地上に立地しているようで、その谷間にになっているのが、今回の調査区である。



遺構検出状況（北から）



遺構検出状況（西から）



土坑検出状況（西から）

10. 亀井遺跡 (KM89-2)

調査地 八尾市南亀井町1丁目39-2・

39-6・40-2

調査期間 平成元年6月12日～7月4日

調査面積 約200m²

はじめに

亀井遺跡は、八尾市南西部の亀井町・南亀井町・跡部南町にあり、平野川流域に広がる弥生時代の大集落遺跡である。近隣には、東から北には太子堂遺跡・跡部遺跡・久宝寺遺跡・西には竹測遺跡がある。また市域を異にするが、南西には城山遺跡・北西には加美遺跡などがある。当遺跡では、近畿自動車道や長吉ポンプ場・平野川改修工事などに伴う調査が、(財)大阪文化財センターと大阪府教育委員会によってなされており、数々の成果が得られている。

今回の調査は、当研究会が亀井遺跡内で実施した第2次調査で、調査地は、第1次調査地の南西に隣接している。

第1次調査では、弥生時代後期の土坑・落ち込み状遺構・溝などと、弥生時代中期の土器棺墓（方形周溝墓？）を検出しておらず、特に、弥生時代後期の遺物の出土量は夥しいものであった。

調査概要

第1次調査の結果を踏まえ、現地表下2.5-2.7mまでに堆積する弥生時代後期の遺物を包含層上面までを機械掘削とした。以下



調査位置図

1.5m-2.0mを人力掘削とし、3つの遺構面を捉えた。最終的には機械によって1.2m程度を掘削し、断面観察を行った。調査地の旧地形は、南部の1/4-1/3が河川跡（平野川）で、古い時代ほど北へ広がっており、時代が新しくなるにつれ縮小していく様子が窺える。他の部分では、北西から南東に向かって緩やかに下がっており、調査区中央部が窪地状となっている。

2層～4層は中世までの耕作土・床土などである。5層・6層は古墳時代中期～後期の遺物を含む土層で、河川の最終的な時期と一致する。

7層～13層には弥生時代後期（V様式）の遺物が含まれており、このうちの9層上面を第1面、11層上面を第2面とした。13層は調査区中央部にレンズ状に薄く堆積する土層で、遺構内埋土とも考えられるが、平面的には捉えていない。

14層・15層には主に弥生時代中期（II様式

10 龜井遺跡

～IV様式)の遺物が含まれているが、弥生時代前期(I様式)のものもわずかに認められるほか、焼分を含んでいる。

16層～20層は無遺物層で、16層上面を第3面として調査を実施した。

第1面(9層暗緑灰色シルト上面)

調査区の北部で東西方向の溝1条(SD-101)、調査区中央部で南東～北西方向の溝1条(SD-102)を検出した。この2条の溝の関係を把握する目的で、調査区西部約5m²を拡張した結果、東西溝は南北溝に切られていることが確認できた。

第2面(11層緑灰色粘質シルト上面)

溝3条・土坑2基・小穴4個を検出した。北部には、居住域と密接に関係すると思われる小溝・土坑・小穴などがある。

これらの遺構群には複数の時期のものが混在しており、先後関係がみられる。

第3面(16層緑青色疊混微砂上面)

溝状の落ち込みを捉えた。内部からは弥生時代中期初頭～中後期(II様式～IV様式)の遺物が出土している。

まとめ

調査の結果、弥生時代中期・後期の遺構・遺物を検出した。このうち弥生時代後期については、第7層～第13層までの約1mにわたって切れ目なく遺物が含まれており、この中に何時期もの生活面が複合していることは明らかである。この点は内業整理を進めることによって明確にしたい。

弥生時代中期の遺物を含む14層・15層は焼

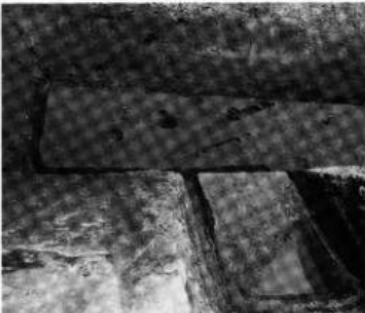
分を多量に含んでいることから、さまざまな動物遺体も含まれていたと考えられる。

龜井遺跡でいわゆる「地山」と呼ばれるものは17層の疊層であろうが、この層は調査区中央部～北部で著しく下がり、ここまで掘削は不可能であったため、一層上を最終調査面としたわけであるが、この「地山」の窪みがそのまま弥生時代後期まで影響し、さまざまなものが多量に堆積し続けたものと考えられている。

なお、北東に隣接する第1次調査地の調査結果を参考にすれば、当遺跡の集落の中心部はここより北東にあることは明らかである。第1面で検出した溝が、集落を区画する溝と考えれば、当調査地は集落の南端であったと考えられる。遺物の出土量はコンテナにして第1面の遺構が2箱、第2面の遺構が2箱、第3面の遺構が1箱、遺構に伴わない7層～15層が3箱の計8箱で、調査面積に比べて多量である。出土状況の特徴は、上層ほど小さい破片が多く、下層ほど大きい破片または完形に近いものが多い。量的には上層ほど多く下層ほど少ない。平面的な特徴は、遺構の内外にかかわらず、ほぼ均一な密度で含まれていた。土器の他、砥石・石槍・石鎌などの石器やその未製品・剥片なども20点程出土している。



第1面全景（南から）



第2面全景（南から）



第2面全景（西から）



第3面全景（北から）



溝101（西から）



溝102（西から）

11. 萱振遺跡 (K F 89-8)

調査地 八尾市緑ヶ丘1丁目

調査期間 平成元年7月17日～9月30日

調査面積 900m²

はじめに

今回の発掘調査は市営萱振住宅建替（第3期）事業に伴うもので、当調査研究会が当遺跡内で実施した第8次調査にあたる。

当遺跡は、旧大和川の主流である長瀬川と玉串川に挟まれた沖積地に位置しており、現在の行政区画では緑ヶ丘、萱振、泉町、桂町、幸町一帯に所在している。

今回の調査地が位置する当遺跡の南東では、昭和55年～昭和63年に至るまで大阪府教育委員会・八尾市教育委員会・当調査研究会による発掘調査が実施されており、その結果、弥生時代後期～鎌倉時代末期に至る遺構・遺物を検出している。

調査概要

調査は、住宅・集会場・受水槽・防火水槽の建設予定地にあわせて調査区5箇所を設定した。掘削方法については、八尾市教育委員会の指示書に基づいて現地表下約0.5m（標高6.5m）前後までの土層を機械で掘削し、以下0.7mの包含層を人力により掘削して遺構・遺物の検出に努めた。その結果、現地表下0.6m（標高6.2m）前後に堆積する茶灰色粘土層上面（第1調査面）で平安時代に比定される遺構を検出。さらに、その面から約



調査位置図

0.3～0.5m下面（第2調査面）で古墳時代前期（布留式期）に比定される遺構を検出した。

第1調査区

第1調査面では、掘立柱建物2棟、井戸1基、土坑3基、小穴22個、溝2条を検出した。第2調査面では、掘立柱建物1棟、土坑2基、小穴23個、溝3条、柵列を検出した。

第2調査区

第1調査面では、掘立柱建物1棟、土坑2基、小穴6個、溝3条を検出した。

第2調査面では、古墳時代前期に比定される溝2条を検出した。

第3調査区

第1調査面では、小穴1個を検出した。

第2調査面では、遺構の検出はなかった。

第4調査区

第1調査面では、溝27条を検出した。

第2調査面では、溝1条を検出した。

第5調査区

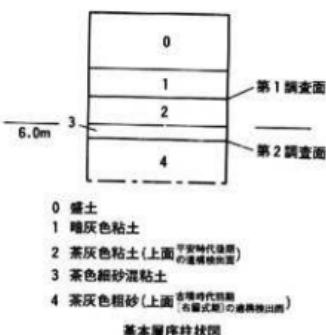
第1調査面では、溝10条を検出した。

第2調査面では、溝1条を検出した。

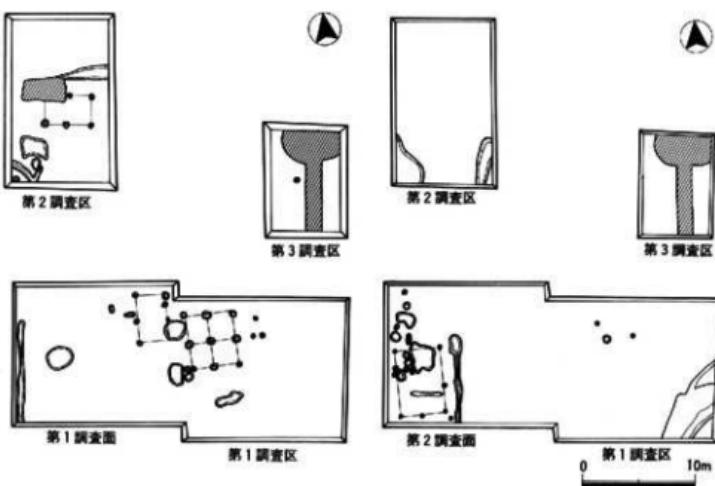
まとめ

今回の調査では、古墳時代前期（布留式期）と平安時代に比定される遺構・遺物を検出した。調査区の中でも第1調査区と第4調査区の第2調査面で検出した布留式古相の溝は、第4次調査（第3調査区第2調査面）で検出した溝と同一のものと思われる。この時期の掘立柱建物・土坑・小穴・溝を第1調査区の西側で検出しており、居住域であることがわかった。また、掘立柱建物には排水溝と思われる溝が検出している。

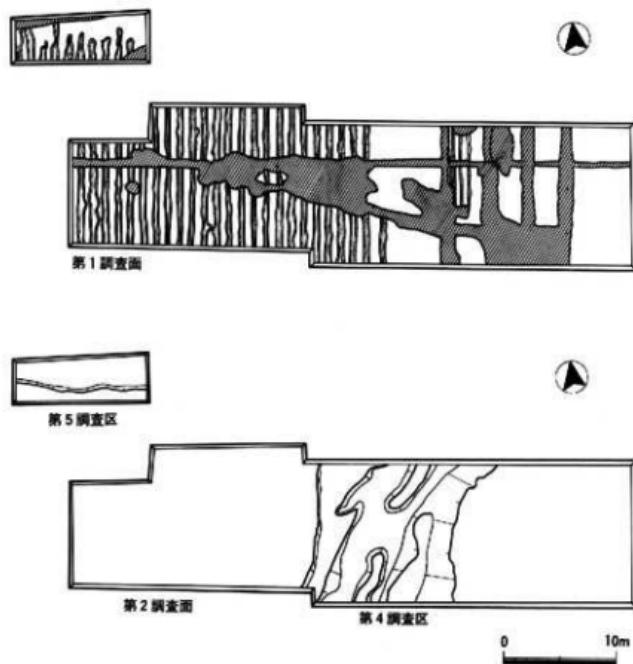
第1調査区と第2調査区の第1調査面で平安時代の掘立柱建物や井戸を検出したこと、



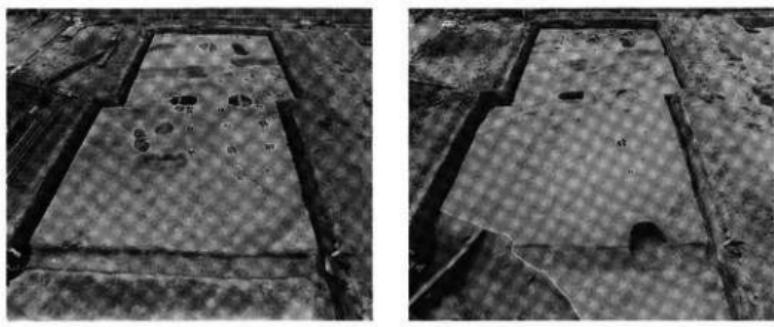
第1調査区の南北方向に伸びる溝や第2調査区の東西方向に伸びる溝は、屋敷を区画している堀のような可能性が考えられる。この時期の集落遺構は、当遺跡内の南部で初めての検出である。



検出遺構平面図



検出遺構平面図



第1調査区第1調査面（東から）

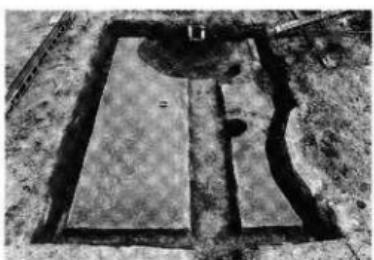
第1調査区第2調査面（東から）



第2調査区第1調査面（南から）



第2調査区第2調査面（南から）



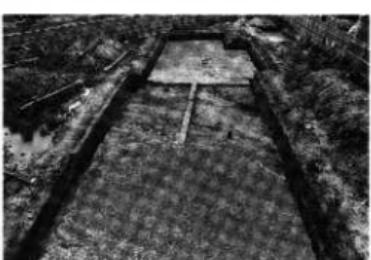
第3調査区第1調査面（南から）



第3調査区第2調査面（南から）



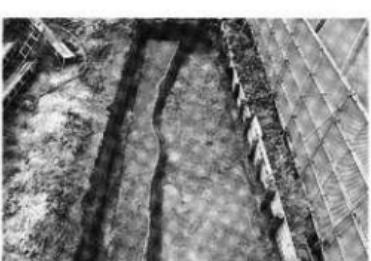
第4調査区第1調査面（東から）



第4調査区第2調査面（東から）



第5調査区第1調査面（東から）



第5調査区第2調査面（東から）

12. 恩智遺跡 (O J 89-4)

調査地 八尾市恩智中町4丁目55他

調査期間 平成元年9月1日～11月6日

調査面積 1178m²

はじめに

恩智遺跡は、生駒山地西麓部に形成された扇状地末端から河内平野にかけて広がる縄文時代前期から鎌倉時代に至る複合遺跡で、現在の行政区画では八尾市恩智北町・恩智中町・恩智南町一帯に所在している。

今回の調査地点は、遺跡推定範囲の東端に位置し、地形的には生駒山地西麓部の標高50m前後の丘陵地帯にあたる。なお、調査地南側の尾根からは銅鋸2個（垣内山一外縁鋸2式、都塚山一扁平鋸式）が出土している。

調査概要

調査地は丘陵の南・西斜面および平坦面で、比高差は最大で8.7mを測る。地区割には第IV系国土座標（基準点3D地区北東-X 154.595.000・Y 33.108.000）を使用し、1区画単位を10mとした。地区名の表示は東西線はアルファベット（A～G）、南北線は数字（北から1～6）で区別し、地区名の表示は1A～6Gと呼称した。

調査では、現状の樹木を保護することが事前協議で確認されていた為、樹木以外の竹・下草等を伐採した後、調査を開始した。

掘削にあたっては、地形に沿って人力掘削（0.2～1.7m）を行い、最終的には地山面に

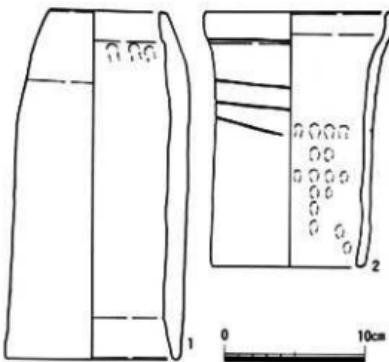


調査位置図

達するまで掘削を実施した。調査の結果、5F地区で近世の暗渠を2ヶ所（暗渠1・暗渠2）2B・C地区で石組み水路を検出した。

暗渠1

5F地区的南端で検出した。東西方向に伸びるもので、検出長1.26mを測る。東西の比高差は18cmで西が低い。暗渠は瓦質土管1



暗渠1 瓦質土管(1・2)

(長さ25cm・径8.4~13.4cm) 2本と瓦質土管

管2 (長さ18.1cm・径11.3~14.1cm) 6本で構成されている。

暗渠2

暗渠1の西1.5mの地点で検出した。瓦質土管と石組みで構成されている。瓦質土管3 (長さ33cm・径15.5cm) は暗渠1と同様東西に伸びるもので計3本を検出した。

石組みは、拳大から40cm大の花崗岩20個前後で構成されており、中央部は空洞になっていて。さらに、石組みの南側には陶質の土管1本が遺存していることから、瓦質土管から流れ出た水が、石組み内で流れを南に変え最後には陶質土管内に流れる構造の暗渠であった

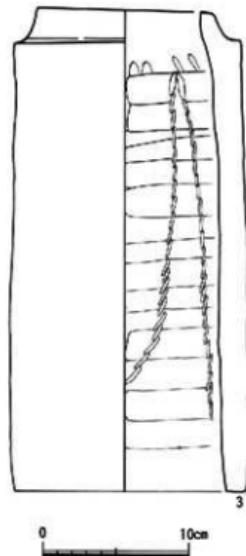
ことが推定できる。

石組み水路

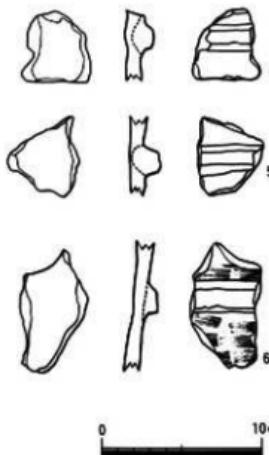
2B・C地区で検出した。丘陵の斜面に沿って伸びるもので、検出長15m、幅40cm前後を測る。石組み水路は拳大から人頭大の石で構成されているが、一部を除けば大半が破壊を受けしており、詳細は不明である。内部から近世に比定される国産磁器の小片が出土している。

まとめ

今回の調査では、近世の暗渠および石組み水路を検出した。暗渠は位置的にみて南部の谷部に伸びるもので、谷部から下部の水田へ取水するために設置されたものと考えられる。



暗渠2 瓦質土管(3)



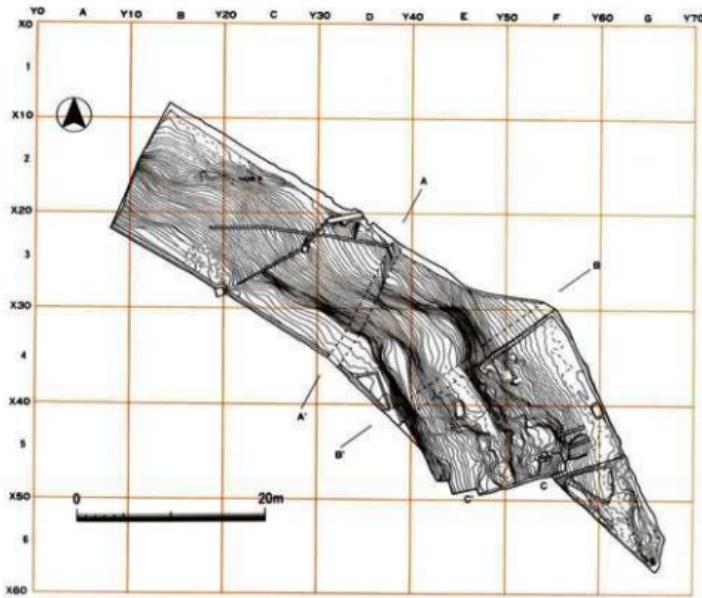
円筒埴輪実測図(4~6)

12 恩智遺跡

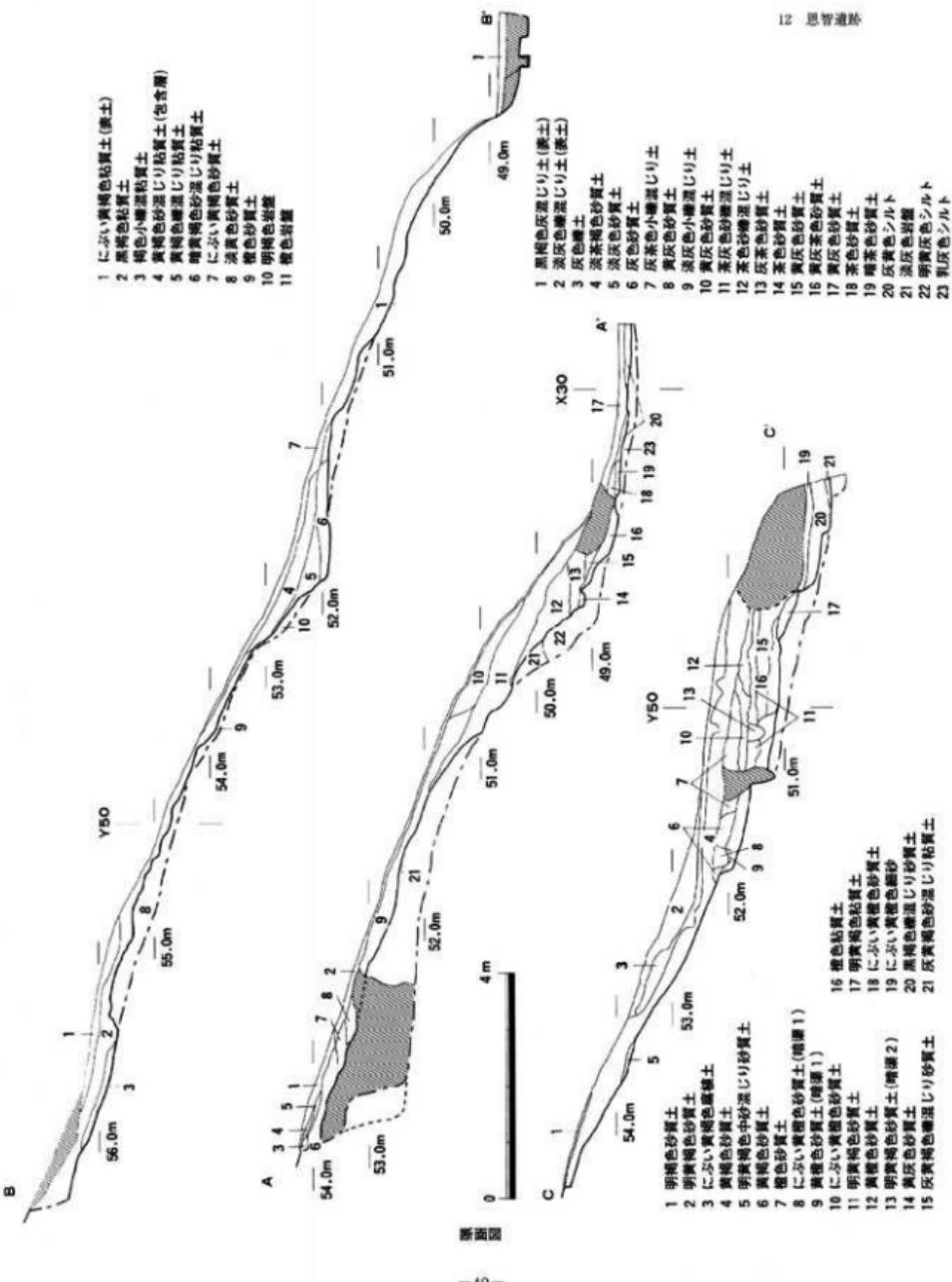
石組み水路も大半が破壊されており、旧状を認めたいが、暗渠同様の役割を果たしたものと推定できよう。以上の結果から、少なくとも近世以降はこの地点で水田開発が実施され

たことが明らかとなった。

また、調査区の北西部では、5世紀中葉に比定される円筒埴輪片（4～6）が出土しており、付近に古墳が存在した可能性が高い。



地区割り図および調査後地形図



12 忍智遺跡



調査地全景（南から）



暗渠 2（西から）



暗渠 1（南から）



石組み水路（西から）

13. 成法寺遺跡 (SH89-5)

調査地 八尾市光南町1丁目46・47-1

調査期間 平成元年10月9日～11月16日

調査面積 400m²

はじめに

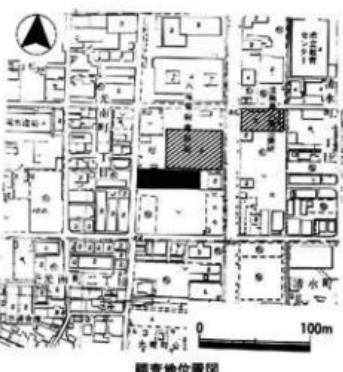
成法寺遺跡は、八尾市の中央部西に位置し、現在の行政区画では、光南町・清水町・南本町・高美町・松山町・明美町・陽光園一帯にあたる。当遺跡は、北側で東郷遺跡・東側で小阪合遺跡・南側で矢作遺跡に接しており、旧大和川の主流である長瀬川と玉串川に挟まれた沖積地に立地している。

当遺跡は、昭和56年5月、八尾市教育委員会が光南町1丁目29で実施した試掘調査により確認されたもので、以降、八尾市教育委員会・大阪府教育委員会・当調査研究会により、数次の発掘調査が行われている。当調査地の北東側では、昭和56年度に八尾市教育委員会により発掘調査が行われている。

調査概要

当調査は、建造物の基礎部分を対象としたため、調査区の平面形は狹長なコの字形になっている。掘削土処理の都合上、調査区を三分割し、順次埋め戻しながら調査を進めた。

掘削は、前記調査区の層序を参考に、I・II区で地表下約1.8m、II区で約1.6mを機械で行い、以下を人力で行った。その結果、I区で3枚・II区・III区で2枚の造構面を確認した。また、出土遺物の量は、コンテナに約



調査位置図

50箱を数える。

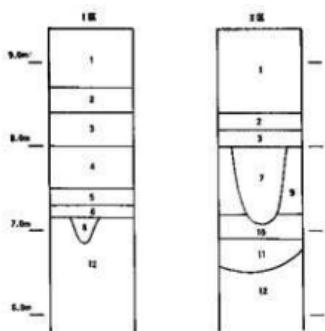
1) 基本層序

当調査地の基本層序をみると、地表下約1.4m (T.P.8.0m)までについては、I～III区とも普遍的なものである。①層…盛土、②層…旧耕土、③層は②層に伴う整地層と思われ、近世以降のものであろう。以下の層序は、I区とII区・III区とでは、全く様相が異なる。

まずI区では、④層～⑥層が調査区全域にわたってほぼ水平に堆積している。⑤層上面 (T.P.7.5m)が第1次面、⑥層上面 (T.P.7.3m)が第2次面、⑪層上面 (T.P.7.1m)が第3次面となる。④層には中世の遺物が若干認められ、第一次面は中世頃の生活面と考えられる。⑤層は古墳時代後期の遺物包含層で、わずかに奈良時代の遺物も含んでいる。⑥層は弥生時代末期～古墳時代初頭の遺物包含層である。

⑪層の明灰色砂が地山層で、無遺物層である。

I・II区をみると、調査区の大部分が河川-01の堆土で占められている。II区西部とIII区南部には、⑨層の褐灰色砂質土が、T.P. 7.2m~8.0mにわたって厚く存在する。この⑨層は河川-01の左岸ベースとなっており、I区では全くみられなかったが、弥生時代後期の土器を多量に含む遺物包含層である。地山層は、I区同様⑫層明灰色砂層である。



基本層序 (S=1/80)
1 盛土
2 旧耕土
3 淡灰褐色砂質土
4 灰褐色粘質土
5 明灰褐色砂質土
6 褐青灰色砂質土
7 河川01
8 方形周溝墓
9 褐灰色砂質土
10 雜灰青色砂混粘土
11 S.O.4
12 明灰色砂

2) 主な検出遺構と出土遺物

(I区)

第一次面では、東西方向の素掘り溝7条を検出した。これらは、農耕に関する溝と考えられる。第二次面では、第1次面の溝と同一方向に掘られた溝11条とそれぞれに直交する溝21条を検出した。

第三次面では、方形周溝墓2基 (SX-1・SX-2) を検出した。SX-1は周溝

南辺の外側を確認した。これは昭和56年度調査のSX-2に連続するものと考えられ、周溝幅12.5mの規模を有する。SX-2は、溝が屈曲していることから、方形周溝墓の北角部分と考えた。両墓とも周溝のみが遺存しているだけで、墳丘は完全に削平されている。周溝埋土は青黒色粘土混砂で、硬く締まっている。SX-1周溝からは供獻土器と考えられる布留式期の二重口縁壺1個体が出土している。

(II・III区)

第一次面では、東西方向の河川を検出した。河川内には古墳時代後期の遺物を多く含んでいる。

II区の3D地区では埴輪円筒棺を検出した。主軸を東西に向け、底面レベルは約T.P. 7.2mを測る。河川-01によって南部・上部を削平されており、底部・北部のみが河川-01の右肩に遺存している。残存部長約1.1mで、掘形は長辺約1.9mの長方形と考えられる。埴輪の時期は、5世紀前半と考えられる。

II区の第2次面ではSK-5・SD-4を検出した。SK-5は2.8×1.7m以上の掘方をもち、弥生時代後期末の壺9・壺1・鉢2がまとまった状況で出土している。意図的な集積と考えられる。SD-4は、幅1.0m以上、深さ0.3~0.4mを測り、埋土は青灰色系の粘土・シルトで構成される。ベースはI区の第三次面と同様、明灰色砂である。底部から弥生後期の土器約50個体が出土しており、完形品や、それに近いものが多くを占める。

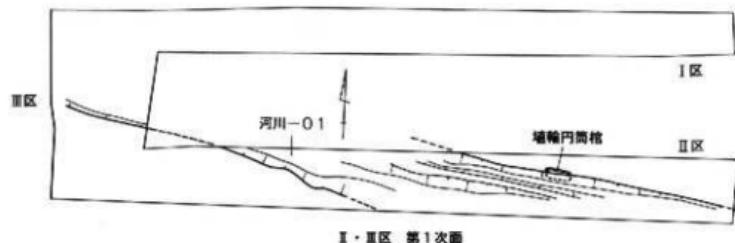
まとめ

今回の調査では、弥生時代後期から中世の遺構を確認した。

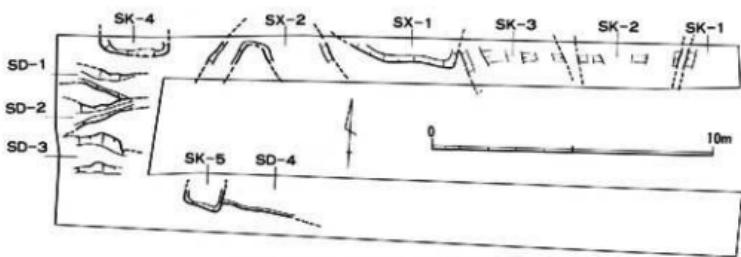
これまでの調査では、弥生時代後期～庄内式期の当地周辺が墓域であることが知られていたが、今回の5世紀前半の埴輪円筒棺の検出により、墓域としての時期は古墳時代中期前半頃まで下がることが明らかとなった。

その後、当調査地北側で確認されている古墳時代後期の集落が、河川-01に伴って営まれたのであろう。奈良時代以降については、建物等の明確な遺構は検出されなかったが、素掘り溝の存在から、中世頃までの耕地としての土地利用が推測される。

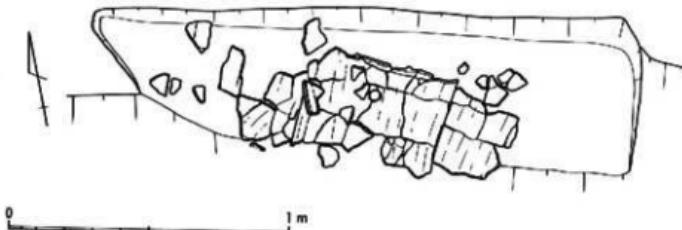
遺物では、SD-4・SK-5で、弥生後期の良好な一括資料が得られた。



I・II区 第1次面



I区 第3次面、II・III区 第2次面 ($S=1/200$)



I区 第1次面 塩輪円筒棺

13 成法寺遺跡



I区第一次面（西から）



I区第二次面（西から）



I区第三次面（西から）



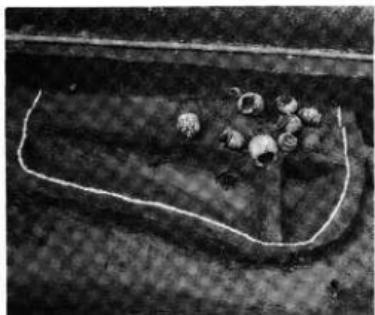
I区第三次面SK 3内遺物出土状況



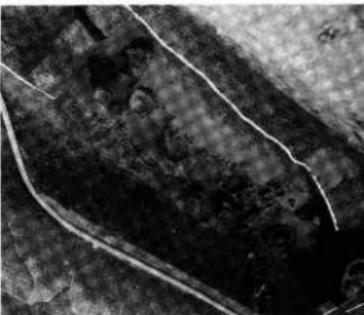
II区第一次面埴輪円筒棺（南から）



II区第二次面（西から）



II区第二次面SK 5（南から）



II区第二次面SD 4遺物出土状況（南東から）



II区第二次面（東から）



II区第二次面SD 4遺物出土状況（南東から）



III区第二次面（北から）



III区第二次面SD 3北肩部遺物出土状況（西から）

14. 成法寺遺跡 (SH89-6)

調査地 八尾市南木町4丁目24

調査期間 平成2年2月20日～3月3日

調査面積 200m²

はじめに

今回の調査地点は、遺跡推定範囲の南東部に位置し、東側に小阪合遺跡、南側に矢作遺跡が隣接している。なお、当調査地から南約200mの地点では昭和61年に八尾市教育委員会により発掘調査が実施されており、古墳時代後期の大型擧立柱建物が検出されている。

調査概要

建物の建設予定地に合わせて東西8m、南北21mの調査区を設定した。掘削に際しては、現地表下0.4mまでは機械掘削し、以下0.1mを人力掘削して遺構・遺物の検出に努めた。その結果、現地表下0.5m前後（標高8.9m）に存在する第4層茶褐色シルト上面で室町時代に比定される土坑3基、溝3条、小穴15個を検出した。出土遺物の総量はコンテナ箱に4箱程度である。

1) 基本層序

第1層：耕土。暗灰色砂質土。層厚0.1m

前後。上面の標高は9.4m前後。

第2層：灰色砂質土。層厚0.15～0.2m。

遺物包含層。

第3層：灰茶色砂質土。層厚0.1～0.3m。

北側に行くにしたがって漸増する。

遺物包含層。



調査地位置図

第4層：茶褐色シルト。層厚0.1～0.4m。

遺構検出面。

第5層：淡灰色細砂～粗砂。層厚0.2m。

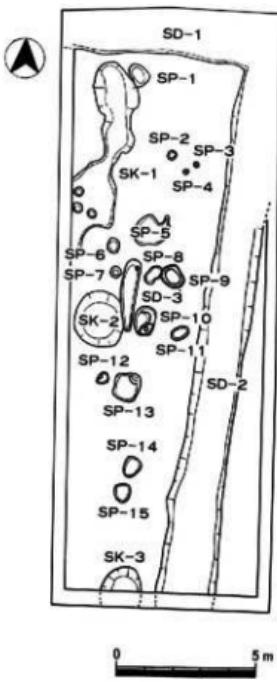
以上。

まとめ

今回の調査では、室町時代中期に比定される遺構・遺物を検出した。検出した遺構の位置から見て、SD-1・SD-2は屋敷地を区画する性格を有するものと理解できよう。

一方、調査地一帯の地形は南北方向に伸びる自然堤防上に位置しており、遺構検出面より下部は粗砂の堆積が顕著であった。

なお、粗砂中からは弥生時代後期に比定される土器の小破片が少量出土しており、自然堤防の成立時期を示唆する貴重な資料と言えよう。



検出遺構平面図



調査区全景（南から）

15. 中田遺跡 (N T 89-2)

調査地 八尾市中田3~4丁目

調査期間 平成元年10月13日~11月27日

調査面積 70m²

はじめに

中田遺跡は、八尾市のほぼ中央部にあたる玉串川と長瀬川とに挟まれた沖積地の南端に位置する集落遺跡である。現在の行政区画では中田・八尾木・刑部地区一帯に所存する。当遺跡の周辺では、西に矢作遺跡、南に東弓削遺跡、北に小阪合遺跡が近接しており、ともに同様の立地基盤上にある遺跡である。

調査概要

今回の調査は、公共下水道工事に伴い、推進立坑2ヶ所の発掘調査と到達立坑1ヶ所の立会調査を実施した。発掘に係わる調査区は、市道安中・教興寺線沿いの2ヶ所であり、東よりI区、II区とした。また、府道八尾・道明寺線との合流地点の道路中央部での立会調査区をIII区とした。

1. I区の調査

基本層序は基本的に、以下のような層序を示す。

第0層：盛土。層厚110cm。

第1層：旧耕土。層厚15cm。調査区の西端にわずかに残る。

第2層：褐色粘質土。層厚約30cm。近世～近代の遺物を含む。

第3層：灰黄褐色粘土。層厚約35cm。古墳



調査位置図

～中世の遺物を含む。上部には厚さ約15cmの明褐色砂泥粘質土の堆積があり、一部で畦状の高まりをもつ。

第4層：黄灰色シルト質土。層厚約30cm。

庄内～布留式の土器片を多く含む。

第5層：灰白色～褐灰色シルト・粗砂・細砂。上部のシルト層のみ庄内式の土器片を含むが、それ以下はシルト・粗砂・細砂の互層となり、遺物はまったく見られない。

明確な遺構は検出されなかったが、土層断面に見られた第3層の畦状の高まりはほぼ南北にまっすぐに伸びており、水田の畦畔であると考えられる。時期はおそらく近世頃であろう。また、第5層以下にみられるシルトと砂の互層は調査区全面にわたり厚く堆積することなどから旧河道であると思われるが、道路方向等は不明である。

遺物はコンテナに2箱程度の量が出土している。大半は第4層および第5層上部出土の

上器である。時期的には、庄内式新相より布留式中段階の須恵器を伴わないものがほとんどである。いずれもやや磨滅した破片であり、完形に復元できるものは少ない。

2. II区の調査

当調査区の調査は、調査区周辺の交通事情等の都合により、立坑上的一部を覆工板で塞がれた状態が続いていたために、調査範囲に制約を受けたまま実施した。そのため、調査区の3分の1については遺構検出はできず、遺物採集および下層遺構の検出に努めた。

基本層序は、調査区北陸の土層断面を図に示すが、基本的には以下のような状況となっている。

第0層：盛土。層厚120cm。

第1層：旧耕土。層厚10~20cm。調査区の東南隅でのみ認められた。

第2層：黄灰褐色砂混粘質土。層厚20~30cm。古墳~中世の遺物を含む。

第3層：灰黄褐色砂混粘質土。層厚20~50cm。弥生後期~布留式の土器片を多く含む。

第4層：にぶい黄褐色粘質土。層厚約30cm。弥生後期~庄内式の土器片を極めて多く含む。

第5層：にぶい黄褐色砂質土。層厚30~40cm。若干の遺物を含む。

第6層：明黄褐色細砂。層厚約25cm。遺物はまったく含まれていない。

なお、遺構面は第2層および第4層、第5層の上面で確認することができた。

遺構は土坑3基、溝3条、大溝1条、不明

遺構1基を検出した。

3. III区の調査

特殊人坑の掘削に併行して夜間立会調査を実施した。

現地表面下4mまでの掘削工事であったが、盛土以下は厚く砂の堆積が見られ遺物包含層を確認することはできなかった。

まとめ

今回の調査の成果として、以下各調査区毎に要点をまとめておく。

1、I区では、調査区全域が自然河道であるために大きな成果はなかった。河川の時期については、出土土器より庄内式(新)頃であると思われる。出土遺物の総量はコンテナ2箱である。掘削深度は現地表面下約3mである。

2、II区では、遺構検出面を3面確認することができた。また、各遺構面の時期が近接し、一部で重複しながらも削平を繰り返して遺物包含層を形成していることから、頻繁な生活領域の改善がなされたいたことが窺える。

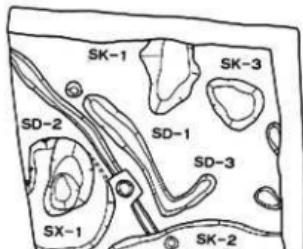
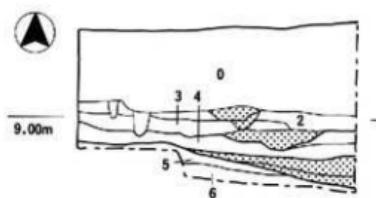
遺構についても各溝は著しく削平を受け柱穴等の遺構は伴わないものの、形状から住居跡の壁溝の可能性は否定できない。下層大溝からの土器片の大量出土については溝上部の第4層出土土器と併せて検討を加える必要があると考える。出土遺物の総量はコンテナ10箱を越える。掘削深度は約2.5mである。

3、III区では、遺物もほとんど認められな

かったが、河川の堆積土層を確認した。

以上が今回の調査の成果である。これらの知見からⅡ区の調査で検出された遺構群はⅠ区およびⅡ区の自然河道に挟まれた微高地上

に営まれた居住域であるとも推察することができ、小面積の調査にもかかわらず多大な成果を得られたと言える。



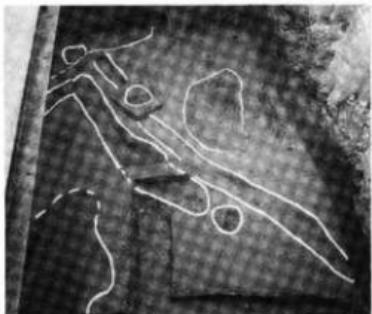
第2調査区遺構平面図



第1調査区（西から）



第2調査区（東から）



第2調査区（北から）



第3調査区（西から）

16. 中田遺跡 (NT 89-3)

調査地 八尾市八尾木北4~5丁目

調査期間 平成元年12月2日~2年3月31日

調査面積 132m²

はじめに

昭和45年の区画整理事業の際に発見された遺跡で、以後中田遺跡調査会・八尾市教育委員会・大阪府教育委員会・当調査研究会により調査が続けられている。これらの調査成果から、当遺跡は弥生時代中~後期を中心に、弥生時代前期~中世にわたる複合遺跡であることが確認されている。

今回の2区のすぐ北側は、昭和60年に大阪府教育委員会により調査が行われた地点であり、弥生時代中期の土坑・古墳時代初頭の不明構造が検出されている。

調査概要

今回の調査は、当調査研究会が中田遺跡内で行った第3次調査である。下水道工事の立坑部分の掘削に伴うものであり、調査区は1~3区の三か所で、3区は夜間立会を行った。

掘削は1区では地表下約1.8m、2区では約1.5mを機械で行い、以下を人力で行った。また、1区は、既設水道管・ガス管があるため、立坑の北半分の調査となった。

1) 基本層序

<1区>

第1~6層は、安定した水平堆積がみられ



調査地位置図

た。第1~4層には、弥生時代中期~古墳時代初頭の遺物がわずかに含まれている。第5層上面が第一次面である。第5・6層は弥生時代中期の遺物を少量含んでいる。第9層がベース層で、この上面が第二次面である。

<2区>

第3・4層が黒灰色系の粘土で、弥生時代中期~古墳時代初頭の遺物を多く含んでいる。第5層は弥生時代中期頃の遺物を少量含み、弥生時代前期の遺物も1点出土している。この上面が第一次面で、これがベース面と考えられ、第6層以下は無遺物層である。

<3区>

約G.L.-1.5m (T.P.9.0m) までは盛土等の擾乱層である。以下、T.P.6.5m までは青灰色系の細砂・粗砂が厚く堆積している。さらにその下約0.5mは植物遺体を多く含む粘土・シルト層である。

2) 主な検出遺構と出土遺物

〈1区〉

第一次面、約T.P.8.5mを測り、古墳時代前期初頭の土坑1基と、弥生時代中期の土坑1基を検出した。

第二次面は、約T.P.8.1mを測り、土坑1基、小穴6個、河川1条を検出した。

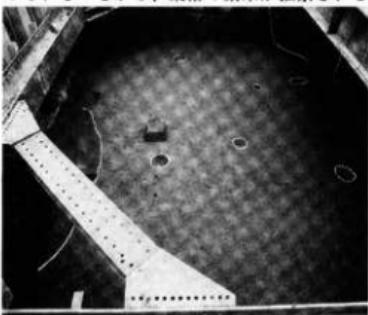
〈2区〉

第一次面は、約T.P.8.6mを測り、土坑2基、小穴3個を検出した。いずれも古墳時代前期初頭のものである。

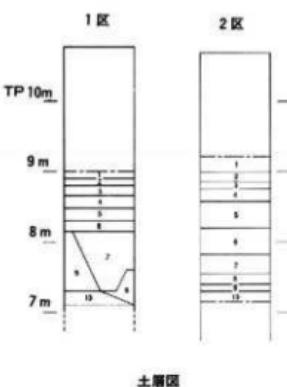
まとめ

今回の調査では、弥生時代中期～古墳時代初頭の遺構を検出した。

2区の第5層から弥生時代前期の土器が出土しているが、当遺跡内では当時の遺構は約300m北で検出されているのみであり、弥生時代前期の集落の広がりを考える上で重要な遺物といえる。弥生時代全期にわたって遺物の包含は希薄であり、集落の中心からははずれないと考えられるが、古墳時代前期初頭になると、2区で遺物を多量に含む包含層がみられることから、集落の繁栄が推察される。



1区第2次面(西から)



土層図

1区

1. 灰茶色砂
2. 灰褐色シルト・砂混じり粘土
3. 暗茶色粘土
4. 暗灰褐色砂混じり粘土
5. 暗緑灰色砂混じり粘質シルト
6. 暗褐色砂混じり粘質シルト
7. 河川1
8. 茶灰色荒砂
9. 淡青灰色粘質シルト
10. 増褐色粘土

2区

1. 暗灰色シルト質粘土
2. 暗青緑色粘土
3. 暗青緑色粘土
4. 暗灰色粗砂混じり粘土
5. 暗青灰色細砂・粗砂(黒色土のブロック含む)
6. 青灰色粘土
7. 灰色細砂
8. 灰色細砂・微砂
9. 茶褐色シルト(植物遺体を多く含む)
10. 灰色粗砂



2区第1次面(東から)

17. 中田遺跡 (NT-4)

調査地 八尾市八尾木北5丁目地内
調査期間 平成元年12月12日～2年1月18日
調査面積 97m²

はじめに

今回の発掘調査は八尾市公共下水道に伴うもので、当調査研究会が当遺跡内で実施した第4次調査に当たる。調査地は、第3次調査の北東部に位置し、式内社由義神社すぐ西の南北道路敷きにあたる。

調査概要

今回の調査は、当調査研究会が中田遺跡内で行った第4次調査である。下水道工事の立坑部分の掘削に伴うものであり、調査区は5か所で、約60～70m間隔で南北に連なっている。

掘削は地表下約2mまでを機械で行い、以下ベース面までを人力で行った。また、調査後の工事立会による下層確認ができるかぎり行った。以下、各区の調査結果について記す。

検出遺構と出土遺物

〈1区〉

第1層は弥生時代中期の包含層で、第2層は全く遺物を含んでいない。第3層は弥生時代前期の包含層である。第4層上面がベース面となり、弥生時代前期の遺構面である。直上には部分的に炭の堆積がみられた。

第4層上面で、土坑3基・小穴3個を検出した。出土遺物から、これらの遺構の時期は



調査位置図

弥生時代前期後半と考えられる。

また第3層から磨製石剣の破片が出土した。

〈2区〉

第1～3層は弥生時代中期～古墳時代前期(庄内式期)、第4・5層は弥生時代中期の包含層である。第4・6層上面が遺構面であり、第6層上面がベース面である。

第4層上面(一次面)、第6層上面(二次面)の2面を確認した。一次面では溝1条・土坑2基・小穴5個、二次面では土坑1基・小穴5個を検出した。

〈3区〉

第1～2層は庄内式期～平安時代末期の包含層で、第3層上面がベース面である。

第3層上面で、落ち込み1基を検出した。

〈4区〉

第1層は平安時代末期～鎌倉時代、第2・3層は弥生時代中期～庄内式期の包含層である。第2～4層上面が遺構面で、第4層上面がベース面である。

第2層上面（一次面）、第3層上面（二次面）、第4層上面（三次面）の3面を確認した。一次面では落ち込み2基を検出した。落ち込み1の時期は出土遺物から平安時代末期と考えられ、上層から獸骨（牛か馬）が出土している。二次面では土坑3基・小穴2基を検出した。三次面では土坑1基を検出した。

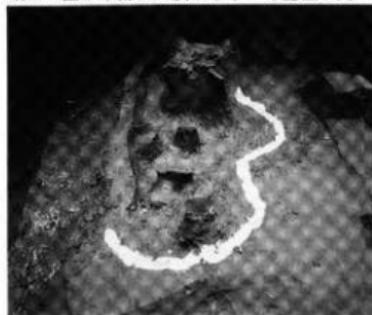
〈5区〉

第2層上面が遺構面で、第4層上面がベース面である。

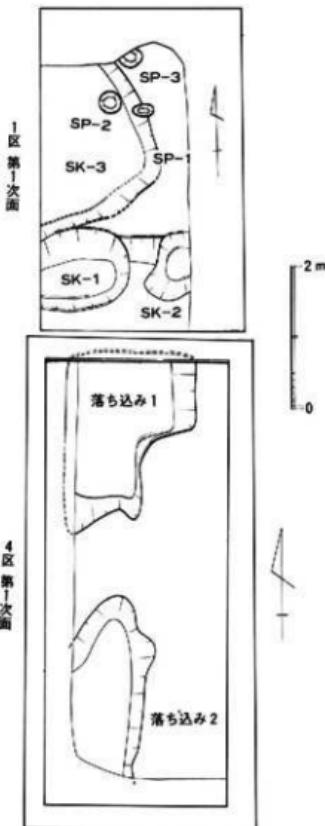
第2層上面で落ち込み1基を検出した。

まとめ

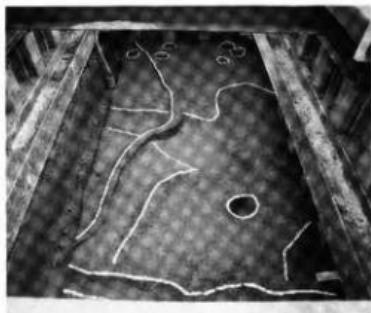
今回の調査は、各調査区の面積が狭く、遺構の広がりについては不明な点が多いことは否めない。しかしながら、調査範囲は南北約250mにわたっており、遺跡の広がりを確認するうえで貴重な資料を得ることができた。まず弥生時代中期については、遺物の出土状況からT.P.8.0m前後に、広範囲に集落が営まれていたと考えられる。弥生時代前期は、遺構が確認できたのは1区だけであり、集落域は2区より南には広がらない可能性が高い。



1区SK-2遺物出土状況（北から）



検出遺構平面図



2区第1・2次面（北から）

18. 跡部遺跡 (A T 89-5)

調査地 八尾市春日町1丁目45-1

調査期間 平成元年10月17日～11月30日

調査面積 100m²

はじめに

跡部遺跡は、八尾市の西部に位置する遺跡で、現在の行政区画では跡部本町・太子堂・東太子・春日町にあたる。

地理的には、八尾市域を北西方向に流下していた旧大和川の主流であった長瀬川が流路を北北西に変える地点 (JR八尾駅付近) から西側一帯にあたる。また、土地条件図によれば長瀬川の流路変化点から、さらに西流した埋没河川に挟まれた三角州状の微高地に位置し、現地表面の海拔は9.5m前後を測る。当遺跡の周辺には、東に植松遺跡、南に太子堂遺跡、西に龜井遺跡、北に久宝寺遺跡がある。他調査地の北部には浜川寺跡の推定地が含まれる。

当調査地の周辺では、昭和56年に八尾市教育委員会が春日町1丁目57 (当調査地西100m) で発掘調査を実施している。その結果、弥生時代前期～中期の土坑1基・溝3条、古墳時代前期の方形周溝墓が検出されている。その後、昭和57年には跡部本町1丁目3 (当調査地西300m) で当調査研究会が発掘調査を実施し、弥生時代後期～古墳時代前期の遺物包含層を確認している。さらに、昭和63年に前記調査地の西隣で当研究会が実施した発掘調査では、古墳時代前期の土坑9基・溝2



調査位置図

条を検出している。

調査概要

今回の発掘調査は、公共下水道工事に伴うもので、調査面積は約85m²を測る。調査地はL字形に鋼矢板が打設された範囲で、調査地の南部は道路の下にあたる。

現地表下2.0mまで機械掘削を行い、以下人力掘削を実施した結果、弥生時代後期～古墳時代前期の遺物を含む層があることが確認された。このため、この土層に関連する遺構の検出を目的として調査を進めた。

調査途中の元年10月24日に、古墳時代前期 [庄内式古相] の土壙を掘削していたところ、この土壙の北東部の底で銅鐸の鏹を発見した。この銅鐸は、原位置を保ったまま埋められている可能性が高く、そのため、想定されている状態を把握することと、銅鐸が埋められた時期を明確にすることと、および銅鐸の保存に関して万全の処理を講ずるために、跡部遺跡発

掘調査委員会を設置し、当初の調査期間を延長した。

調査の結果、標高7.0m付近で、弥生時代後期終末の溝1条、古墳時代前期（庄内式古相）の土壙1基、布留式古相の堅穴住居2棟、土壙1基、溝1条、小穴27個、平安時代後期の土壙1基を検出した（上層検出遺構）。その面から約5cm程度下で弥生時代後期終末以前の銅鐸埋納壙1基・溝1条、落ち込みを検出した（下層検出遺構）。

まとめ

銅鐸が埋納された時期の下限が弥生時代後期終末以前であることがわかった。

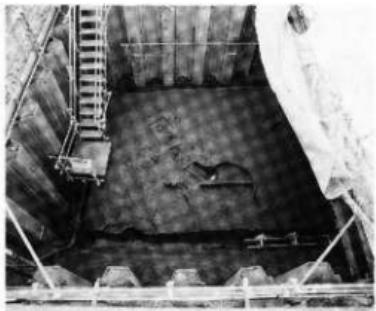
銅鐸及び銅鏡観察表

		偏平板式1区底水紋						
式	形	鋸	身	縫	縫	縫	身	
A 北東側	下辺横帯	鋸	身	全幅1区の底水紋。5条の突縫の枚様模様である。				
		縫		突縫3条・鋸歯紋8個・周縫1条。				
		縫		左右に3個の縫耳。				
B 南西側	下辺横帯	鋸	身	突縫は左右とも、上から1段めに4個、2段めに4個、3段めに2個。				
		縫		左右に1箇所と裏面に1個の縫耳。				
		縫		外側から鋸歯紋・麻手紋（波紋模様紋）・波形紋。 二重の波形紋の一番外側は、縫の途中から出て、途中で終わる三日月形になっている。				
銅鏡枚数15個								
C 内面	内面	鋸	身	全幅1区の底水紋。5条の突縫の枚様模様である。				
		縫		突縫3条・鋸歯紋8個・突縫1条。				
		縫		左右に3個の縫耳。				
D 別	別	鋸	身	突縫枚は左右とも、上から1段めに3個、2段めに3個、3段めに2個。				
		縫		左右に1個と裏面に1個の縫耳。				
		縫		外側から鋸歯紋・麻手紋（波紋模様紋）・波形紋。 三重の波形紋の一番外側は、北側とは違い、純全面にある。				
銅鏡枚数15個								
銅鏡		形	式	有蓋式	法	量	全	
				身	身	身	身	
				3.7cm			最大幅 1.0cm	
		円底・瓜生立透彫・馬首透彫等の銅鏡に類似するもので、円底・瓜生立透彫では無V様式の生活用底座下から出土している。						

銅鐸埋納壙が切込まれている層中からは、弥生時代前期～後期の土器の破片が出土しているが、現点では埋納壙の時期の上限を決定づける資料に乏しい。

以下、銅鐸の埋納の順序について述べる。

- 1、埋納壙を掘る。
- 2、埋納壙の底に粘土床を作る。
- 3、銅鐸を横向きにし、鋸を上下にした形で、粘土床に突き刺して置く。
- 4、銅鐸のまわりに粘土を押しつける。
- 5、最後に埋納壙の掘形内を掘削土で充填する。



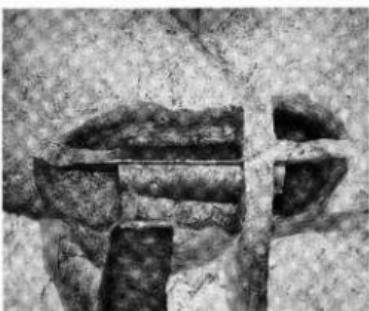
上層遺構北部全景（西から）



銅鐸検出状況（南から）



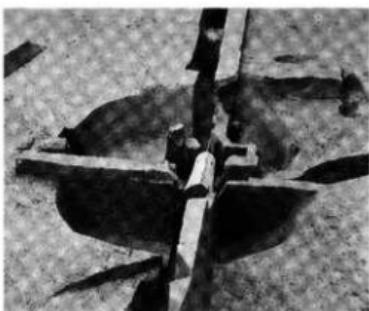
上層遺構北部全景（西から）



銅鐸検出状況（北東から）



下層遺構北部全景（北から）



銅鐸埋納構（北西から）

19. 心合寺山古墳（S O89-1）

調査地 八尾市大竹5丁目141・142番地

調査期間 平成元年12月6日～2年1月30日

調査面積 127m²

はじめに

今回の発掘調査は、心合寺山古墳西側周濠の北西隅の樋管付け替え工事に伴うもので、外堤を東西方向に掘削するため、外堤の築造状況および樋管の敷設状況を確認する目的で調査を実施した。

心合寺山古墳は、八尾市北東部の生駒西麓末端の標高35m地点に位置する中河内最大の規模を測る環濠式前方円墳である。心合寺山古墳の位置する八尾市大竹・楽音寺地区一帯には、西の山古墳（前期末葉）を盟主とし、花岡山古墳（中期初頭）・心合寺山古墳（中期前葉）・鏡塚古墳（中期後葉）に至る累積的な形成を示す楽音寺・大竹古墳群が存在している。

心合寺山古墳は前方部が南面するもので、墳丘長130m・後円部径47m・高さ11m、前方幅56m・高さ8mで、周濠を含めた全長は南北約225m、東西約150mを測る。周濠は、本古墳が扇状地末端の緩斜面を利用して南北方向に築造された古墳であるため、東・西の周濠の水位を異にしている。なお、昭和58年度と昭和63年度に八尾市教育委員会により発掘調査が実施されている。昭和58年度の調査では、東側周濠北東部の外堤の調査が行われ、外堤に使用された葺石が検出されている。



調査地位置図

一方、昭和63年度には前方部を横切る里道整備事業に伴う調査が行われ、埴輪列が検出されている。

調査概要

調査は心合寺山古墳西側周濠の北西隅の樋管付け替え工事に伴うもので、外堤を東西方向に掘削するため外堤の築造状況および樋管の敷設状況を確認する目的で調査を実施した。掘削に際しては、外堤上面の樹木を伐採した後、人力による掘削を実施した。調査では、樋管の敷設状況を確認するために、外堤のほぼ中央部を境として東側部分を下部まで掘り下げ、西壁面で樋管の掘形と樋管敷設位置の確認に努めた。その結果、外堤上部から5.2mの地点（標高24.85m）で樋管と縦板を検出した。さらに、外堤の構築状況を確認するため南壁および北壁の精査を実施した結果、三時期（第1期～第3期）にわたる築造状況が確認できた。

・樋管

樋管の掘形は、表土下部から確認でき、断面の形状は逆円錐状で上面幅5.8m以上・下幅約0.6mを測る。樋管は、外堤に直交する形で東西方向に埋設されており、樋門から排水口まで約19mを測った。樋管には瓦質土管と陶質土管の2種類あり、総数46点（但し3点欠損）で瓦質35点、陶質11点を数えた。

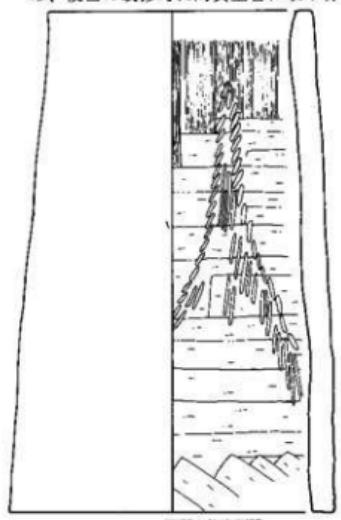
瓦質土管は双方の口径を異なる円筒形で、全長36cm・広口幅23~25cm・狭口幅18cm・厚さ1.5cmを測るもので、広口部に狭口部を挿入する形でつないでいる。

陶質土管は片方に受け口を持つもので、全長61~63cm・受け口幅26~27cm・狭口幅21.5cm・厚さ1.5cmを測る。なお、陶質土管の敷設位置は、池底部分に当たる。従って、この部分が取り替えが容易な場所であったため、後世の改修時に陶質土管に取り替えられ

たものと考えられ、樋管構築時はすべて瓦質土管を使用していたものと推定できる。

礎板は2枚（排水口側から礎板1~2と呼称）検出したが、排水口付近と池底部分は欠損していた。礎板の数値は全長4m・幅24cm・厚さ4cmを測るもので、端部に凹部と凸部をつくり、それらを合わせて繋いでいる。礎板1・礎板2とともに鉄釘が遺存しており転用材が使用されている。

これらの礎板は、樋門から排水口までの勾配を調整することや、土管の沈下防止の機能を果たしたものと考えられるが、遺存部分での標高は排水口側の方が逆に2.2cm高かった。礎板1の表面および礎板2の裏面には下記の墨書きが認められた。



瓦質土管実測図

礎板1の表面の南側	
(東→西)	正徳六年中三月五日
大竹村	庄屋吉左衛門
神立村	泉福寺松本
九郎兵衛	
大竹村	
〔西→東〕	
平丹波守	
〔東→西〕	
藤勝兵衛	
〔正徳六年申〕	
大竹村	庄屋吉左衛門
	年寄七右衛門
	庄屋吉左衛門
	勘兵衛
	弥次兵衛
	伝兵衛
	吉郎兵衛



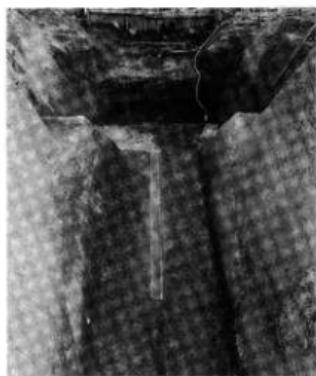
樋管掘出状況（東から）



礎板1表面墨書き（西から）



樋管検出状況（西から）



礎板検出状況（西から）

・外提

外提は壁面観察の結果、三時期（第1期～第3期）に分かれて築造されていることが確認できた。

<第1期>

基底部で約15m・高さ1.5m（検出部）を測るもので、上部は5cm前後の礎を含んだ土が堆積している。なお、基底部の西部で、樋管を検出した。切り合い関係からみて、今回検出した樋管より古い時期に比定されよう。遺物は旧の樋管に使用された瓦質土管が出土したが、それ以外の出土遺物はなかった。

<第2期>

1期の外提の頂点付近から西側に築造されているもので、高さ1m程度積み上げられている。遺物は出土しなかった。

<第3期>

2期の外提の頂点付近から西側約8m、高さ2.7mにわたって台形状に積み上げられている。築造方法は、5～10cm程度に薄く土を

水平に積み上げる版築方法を用いている。遺物は多量の屋瓦および中国産白磁碗の小破片が少量出土した。

まとめ

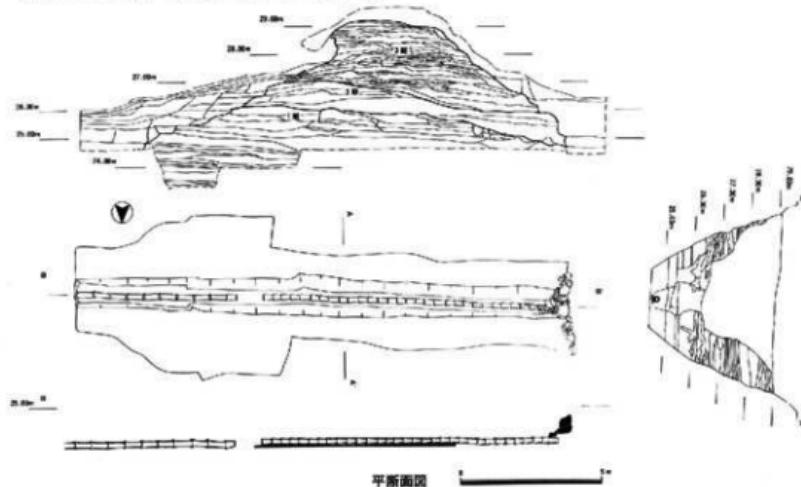
今回の調査では、樋管の敷設状況の確認と外提の築造状況を観察する目的で調査を実施した結果、多大な成果を得ることができた。樋管においては、樋管の下部で検出された磚板に記された墨書から樋管の敷設時期が正徳六年（1716）であることが明らかになった。

一方、外提については3時期にわたる築造が実施されたことが明らかとなった。外提は、第1期から第3期の順に西側に拡張され、その都度上部に積み重ねられていたよう、特に第3期には版築工法を用いて大掛かりな築造が実施されている。第3期外提の構築土の中からは土器片のほか多量の屋瓦片が出土しており、この部分の構築に際しては周辺に存

在したと推定される心合寺跡付近の土が運ばれてきた可能性が高い。外提の築造時期については、第1期外提の西部で今回検出した樋管より古い時期の旧樋管の一部が検出されており、この樋管の掘形が第2期外提におよばないことが明確である。したがって、第2期の外提は旧樋管の敷設後に構築されたものと考えられる。第3期の外提についても樋管の掘形で切られていることから、正徳六年には外提の構築が完了しており現在に近い景観を呈していたものと考えられる。

以上のことから、この部分の外提については古墳築造当初のものではなく、後世に築造されたものであることが明らかになった。この結果、この部分以外の外提の築造時期についても、今後、慎重な対応が必要であろう。

墨書解読に当っては、市立歴史民俗資料館の小谷利明、尾崎良史両氏の御指導を受けた。



20. 竹洞遺跡 (TK89-2)

調査地 八尾市竹洞東2丁目地内

調査期間 平成2年1月12日～3月31日

調査面積 127m²

はじめに

竹洞遺跡は、八尾市の西側に位置し、現在の行政区画では竹洞・竹洞東がその範囲となっている。昭和57年、市立竹洞小学校内の調査で確認された遺跡であり、その際古墳時代後期～近世の遺構が検出されている。

なお、竹洞遺跡は当市での呼称であり、本来は龜井遺跡と同一の遺跡と考えられる。龜井遺跡は、弥生～古墳時代の大集落であり、今回の調査の第4区の東側は、昭和55～58年に財團法人大阪文化財センターにより調査が行われている。

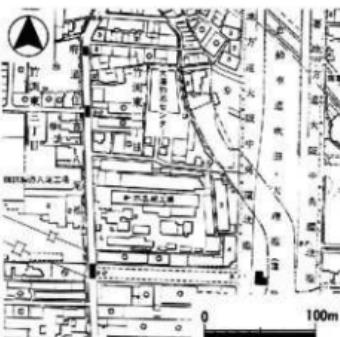
調査概要

今回の調査は、当調査研究会が竹洞遺跡内で行った第2次調査である。下水道工事の立坑部分の掘削に伴う調査であり、調査区は4か所である。掘削は地表下2.5～3.0mを機械で行い、以下を人力で行った。

1) 基本層序

〈1区〉

第6層までを機械掘削したが、立会では遺物・遺構は全く検出されなかった。第1～3層は河川の堆積と考えられる。第7・8層が弥生時代前期～中期の包含層で、中期の遺物



調査地位置図

はごく少量である。第9・10層がベースとなり、北側に向かって落ちて行くようである。

〈2区〉

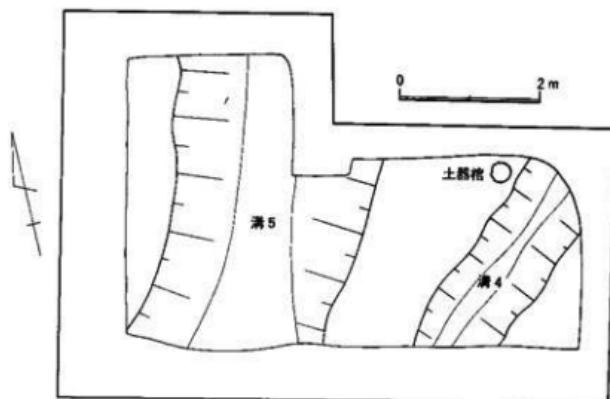
第1・2層が弥生時代前期～中期頃の遺物を少量含む包含層である。第3層以下がベースで、砂層が続く。

〈3区〉

全体に安定した水平堆積である。6層は植物遺体を多量に含んでいる。

〈4区〉

第1層は、近代～現代の盛土である。第2・3層は細砂・粗砂・粘土の互層で、旧東除川の堆積と考えられる。第4～11層は、青灰色系の粘土が続くが、遺物は全く検出されなかつた。第11・12層は弥生時代中期の遺物を少量含む包含層である。第17層は弥生時代前期～中期の遺物を少量含む包含層で、この上面が第一次面である。第19・20層が弥生時代前期～中期の包含層で、この上面が第二次面である。第25層上面がベース面で、第三次面である。



4区第3次面 (1/80)

2) 主な検出遺構と出土遺物

<1区>

第7・8層の黒青灰色粘土・暗青灰色粘土が弥生時代前期～中期の包含層で、特に前者に遺物は多い。浅い落ち込み状の遺構になる可能性がある。

<2区>

第1・2層の淡褐色砂礫混粘土・淡褐色粘土混砂礫が、弥生時代前期～中期頃の包含層である。少量の土器と、自然木・加工木片も多く含んでいる。河川の堆積層と考えられ、ベースとなる砂層はかなり起伏をもっており、また湧水も激しかった。

<3区>

遺構・遺物は全く検出されなかった。

<4区>

第一～三次面の3面を確認した。

第一次面は、T.P.6.3mを測り、溝3条を検出した。

第二次面は、T.P.6.1mを測り、河川1条を検出した。

第三次面は、T.P.5.8mを測り、溝2条・土器棺1基を検出した。土器棺は、口縁部を打ち欠いた壺に別個体の壺の底部を被せたもので、内部に人の歯1個が遺存していた。

まとめ

今回の調査では弥生時代前期～中期の遺構・遺物を検出した。十分な調査が行え、また明確な遺構が検出されたのも4区のみである。4区の調査成果と、前記の大坂文化財センターによる調査成果との関係をみると、連続すると考えられる遺構は検出されなかった。溝4については、北に約1.5m、南に約45mの地点に弥生時代中期頃の方形周溝墓が確認されており、それらの周溝の方向ともほぼ一致することから、方形周溝墓の可能性がある。

21. 竜華寺跡 (R K90-1)

調査地 八尾市陽光園2丁目

調査期間 平成2年1月22日～1月30日

調査面積 200m²

はじめに

竜華寺跡は安中庵寺ともよばれ、現在の行政区画の陽光園・安中町6丁目の一部がその範囲と推定されており、安中小学校校庭には『古蹟 竜華寺趾』の石碑が保存されている。地理的には長瀬川と玉串川に挟まれた冲積地であり、当調査区の南西約280mの地点は、北西に流化していた長瀬川が方向を変えて北上する屈曲部である。当遺跡は長瀬川が形成した自然堤防と平野部との境に位置している。竜華寺は『続日本紀』にその名がみられるが、昭和56年以降行われている発掘調査では奈良時代に遡る成果はなく、鎌倉時代以降の遺構・遺物の検出に止まっている。

調査概要

今回の調査は、当調査研究会が竜華寺跡内で実施した第1次調査である。マンション建設に伴う調査で、調査区の平面形はL字形を呈している。

掘削は、現地表下約2.0mを機械で行い、以下ベース面までを人力で行った。

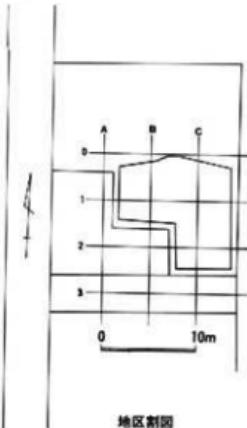
地区割は、調査区に合わせて5m方眼のランクを任意に設定し、遺物の取り上げや平面図の基準とした。



調査位置図

1) 基本層序

全体に安定した水平堆積である。現地表下約60cmまではアスファルト・盛土である。第3層は近世の耕作土である。第4・5層は中世の包含層で、少量の遺物を含んでいる。第6層～第11層から遺物は全く出土していない。遺構面は2面を確認した。標高約8.5mの第5・6層上面（第一次面）と、標高約8.3m



地区割図

の第7層上面（第二次面）である。

2) 棚出遺構と出土遺物

第一次面

溝3条（SD-1～SD-3）を検出した。

SD-1

幅約30cm、深さ約10cm、検出長7.3mを測る。埋土は褐色砂混粘質土である。

SD-2

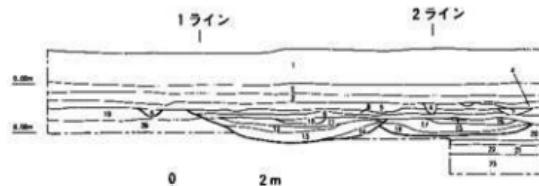
幅約30cm、深さ約5cm、検出長3.2mを測る。埋土はSD-1と同様である。

SD-3

幅約4.5m、深さ約0.7m、検出長11.0mを測る。埋土は、上層は青灰色系の粘土シルトで、下層は植物遺体を多量に含む明褐色粘土である。底のレベルは西側がわずかに低くなっている。出土遺物は、瓦質甕・瓦質羽釜・土師器皿・漆器等の木製品などで、時期は15世紀代と考えられる。SD-1とSD-2は出土遺物が小片のみで時期は不明である。SD-2はSD-3を覆う第5層上面から掘り込まれ、レベル的にみてSD-1と同一面の遺構と考えられる。SD-3の南側を整地した直後に掘られたのである。

第二次面

溝2条（SD-4・SD-5）と土坑1基



調査区東壁 (S=1/120)

(SK-1) を検出した。

SD-4

幅約30cm、深さ約5cm、検出長2.5mを測る。埋土は暗灰色砂混粘土である。

SD-5

幅約3.0m、深さ約0.4m、検出長5.0m以上を測る。北側の肩部はSD-3によって削平されている。埋土は第一次面のSD-3と同様で、上層は明青灰色系の粘土、下層は植物遺体を多量に含む褐色粘土である。時期は出土遺物から15世紀代と考えられる。

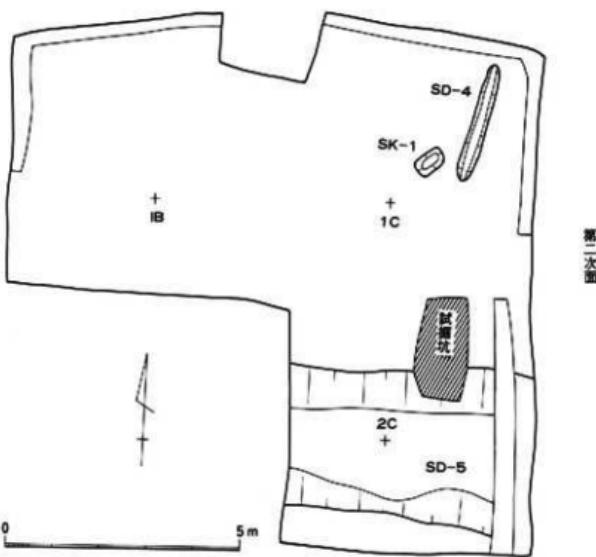
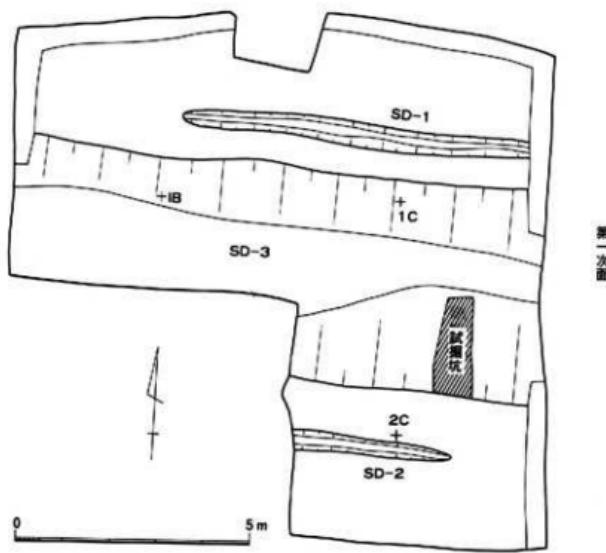
SK-1

平面形は長方形を呈し、0.7m×0.4m、深さ約0.5cmを測る。埋土はSD-4と同様である。

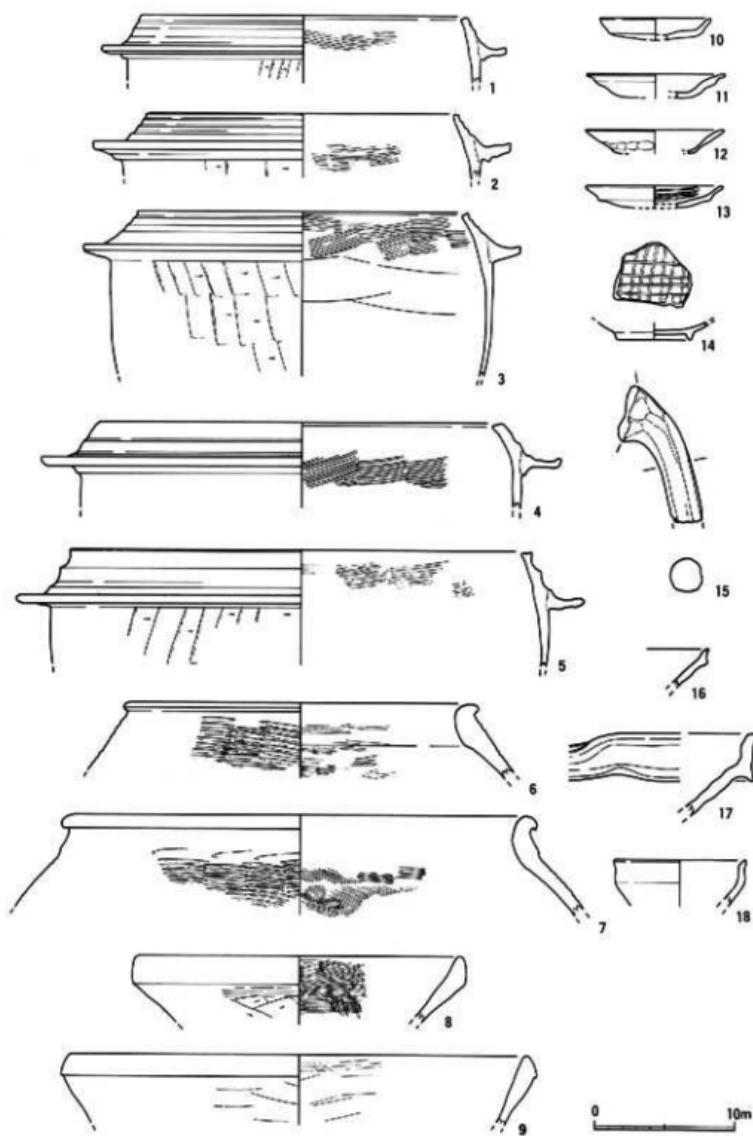
まとめ

今回の調査では空町時代の溝（SD-5・SD-3）を検出した。SD-5は、SD-3によって削平されているものの、出土遺物にはほとんど時期差は認められない。このことから何らかの理由で溝の掘り直しが行われたとも考えられる。両溝共に隣上の状況から、灌水状態にあったことが推察され、または東西方向に直線的に伸びていることから、流路というより区画溝的な機能が考えられる。

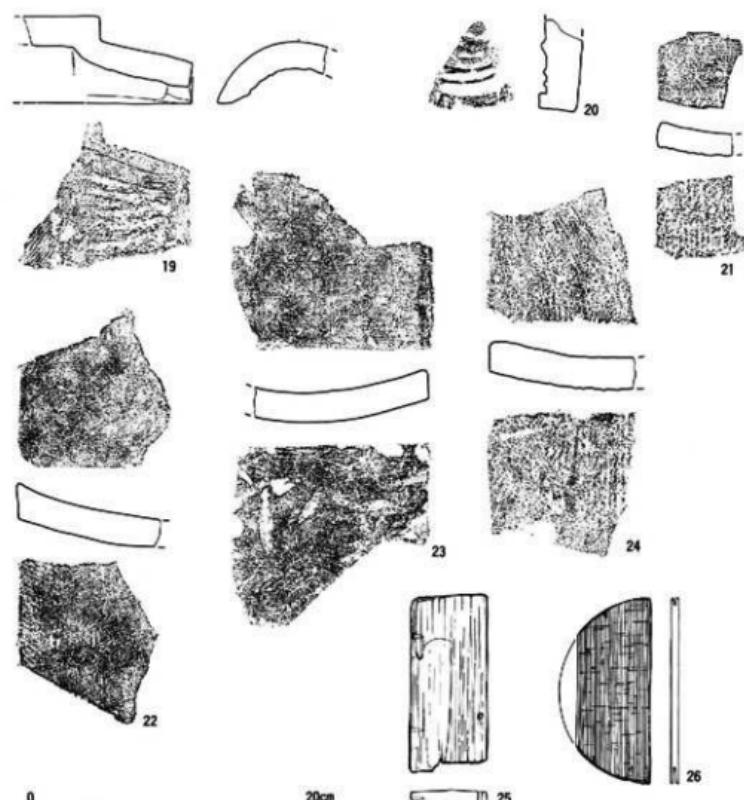
1. 埋土
2. 深褐色砂質土
3. 深褐色砂質土
4. 暗灰色粘土
5. 深褐色砂質土
6. 深褐色砂質土
7. 深褐色砂質土
8. 深褐色砂質土（植物土・インボン多く含む）
9. 深褐色砂質土（植物土・インボン多く含む）
10. 深褐色砂質土（植物土・インボン多く含む）
11. 深褐色砂質土（植物土・インボン多く含む）
12. 深褐色砂質土
13. 深褐色砂質土（植物土・インボン多く含む）
14. 深褐色砂質土
15. 深褐色砂質土
16. 深褐色砂質土
17. 暗灰色シルト
18. 深褐色砂質土（植物土・インボン多く含む）
19. 深褐色砂質土
20. 深褐色砂質土
21. 埋土
22. 深褐色シルト



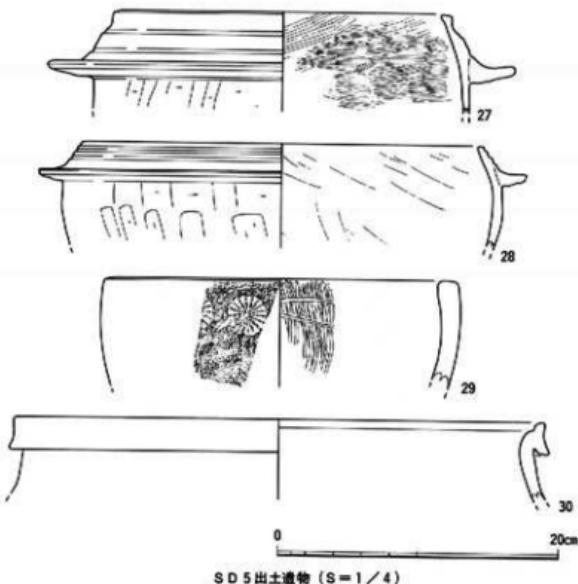
平面図 ($S = 1/120$)



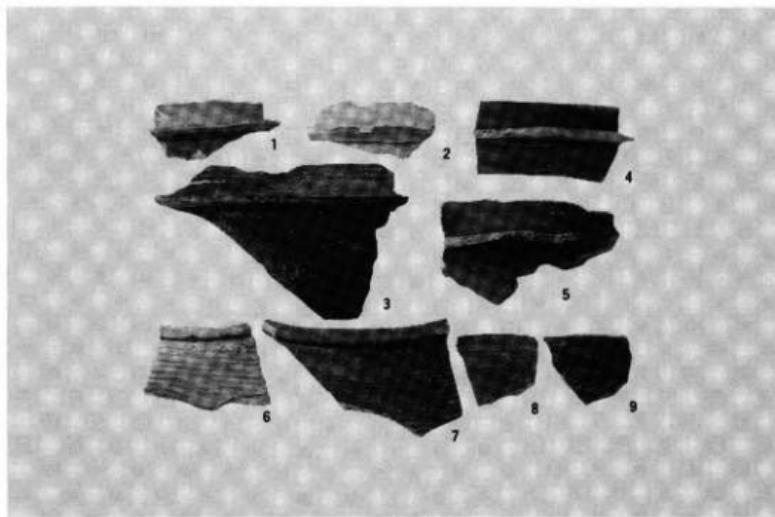
SD 3 出土遺物① (S = 1 / 4)



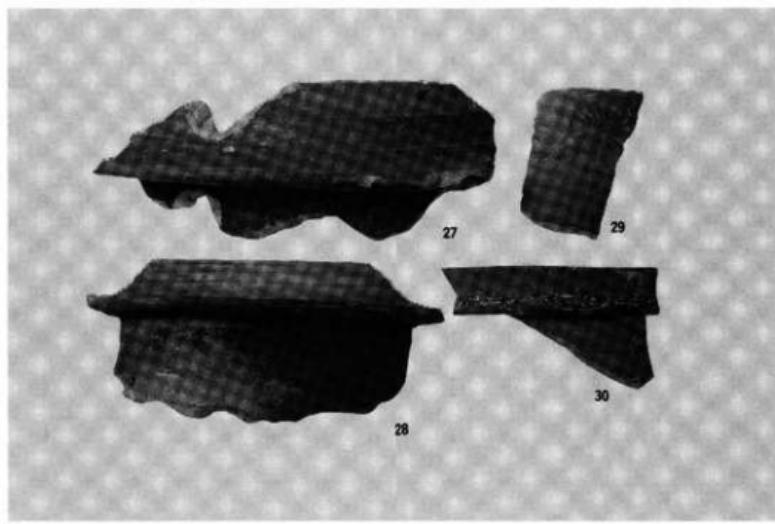
SD 3出土遺物② (S=1/4)



Sōdō 5 出土遺物 (S = 1/4)



SD 3 出土遺物



SD 5 出土遺物

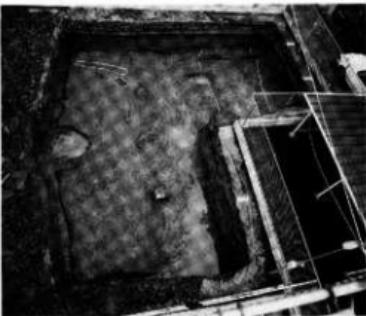
21 竜華寺跡
出土遺物観察表

遺物番号	器種	出土地点	法量(cm)	口径 器高	色調	胎上	焼成	技法・形態の特徴	備考
1	瓦質 羽釜	SD 3 2 A		21.4 4.8 飼径 29.2	淡灰色	密 1mm 以下の砂粒含む	良好	I I線 - 鋼ヨコナデ、口縁内面にハケ残る 体部は外側へラケズリ、内面ナデ	反転
2	瓦質 羽釜	SD 3 1 A		22.5 4.7 飼径 30.0	淡灰茶色	密 1mm 以下の砂粒含む	良好	口縁 - 鋼ヨコナデ、I I線内面にハケ残る 体部は外側へラケズリ	反転
3	瓦質 羽釜	SD 3 2 C		23.7 11.7 飼径 31.4	暗灰色	密 2mm 以下の砂粒含む	良好	I I線 - 鋼ヨコナデ、口縁内面にハケ 体部は外側へラケズリ、内面ナデ	反転
4	瓦質 羽釜	SD 3 2 A		29.0 5.6 飼径 37.4	暗灰色	密 0.5mm 以 下の砂粒含む	良好	口縁 - 鋼ヨコナデ 口縁内面にハケ残る 体部は外側へラケズリ、内面ナデ	反転
5	瓦質 羽釜	SD 3 2 B		33.3 8.2 飼径 40.8	暗灰色	密 2mm 以下の砂粒含む	良好	口縁 - 鋼ヨコナデ、口縁内面ハケ残る 体部は外側へラケズリ、内面ナデ	反転
6	瓦質 甕	SD 3 2 A		25.5 5.3	灰茶色	密 1.5mm 以 下の砂粒含 む	良好	I I線ヨコナデ 外面タタキ 内面ハケ	反転
7	瓦質 甕	SD 3 2 A		34.2 7.1	灰色	密 0.5mm 以 下の砂粒含 む	良好	口縁ヨコナデ 体部外面タタキ、内面ハケ	反転
8	瓦質 すり鉢	SD 3 2 B		24.1 4.7	暗灰色	密 1mm 以下 の砂粒含む	良好	口縁ヨコナデ 体部外面へラケズリで I I線 直下にハケ残る 体部内面ハケ後オロシ口	反転
9	瓦質 すり鉢	SD 3 2 C		34.2 5.0	暗灰色	密 1mm 以下 の砂粒含む	良好	口縁ヨコナデで、内面にハケ残る 体部 外側へラケズリ、内面ナデ	反転
10	土師質 甕	SD 3 1 A		8.0 1.6	暗灰茶色	密	良好	口縁ヨコナデ 底部ナデ	反転
11	土師質 甕	SD 3 1 A		10.0 1.8	淡灰白色	密	良好	内面 - I I線端部ヨコナデ 外面ナデ	反転
12	土師質 甕	SD 3 2 A		10.0 1.7	淡茶色	やや粗	良好	内面 - I I線端部ヨコナデ 外面ナデ	反転
13	瓦器 甕	SD 3 1 A		9.8 1.6	暗灰色	密	良好	口縁ヨコナデ 底部ナデ 内面底部 - I I線に圓錐状の暗文	反転
14	瓦質 甕	SD 3 2 B	高台付	1.4 5.6	暗灰色	密	やや 不良	高台ヨコナデ 底部外側ナデ 底部内面に格子状の暗文	
15	三足釜 脚部	SD 3 2 A		10.2 2.3	淡灰白色	密	良好	ナデ	
16	須恵質 鉢	SD 3 2 B		2.9	淡青灰色	やや粗	良好	回転ナデ	
17	備前 すり鉢	SD 3 2 C		5.9	灰褐色	密	良好	回転ナデ 片口	
18	瀬戸系 施釉碗	SD 3 2 C		9.6 3.3	茶褐色 断 - 灰 白色	やや粗	良好	内面 - I I線回転ナデ 体部外側ケズリ	反転
19	丸瓦	SD 3 2 B	器 高 長 厚	6.2 12.0 2.0	暗灰色	やや粗 0.5 ~ 3mm の砂 粒を含む	良好	外側ナデ 内面ハケ 卡線部内面綱目	
20	軒丸瓦	SD 3 2 B	底 高 瓦 厚	6.6 2.9	灰白色	密 0.2 ~ 2.0 mm の砂粒を 含む	やや 不良	瓦当内面ナデ 三つ巴文	

遺物番号	器種	出土地点	法量(cm)	口径 器高	色調	胎土	焼成	技法・形態の特徴	備考
21	平瓦	SD 3 1 A	長 辺 厚 さ	5.5 1.7	灰青色	密0.2~1.0 mmの砂粒を 含む	良好	凹面ー布目、離れ砂 凸面ー溝目、離れ砂 端部ーナデ	
22	平瓦	SD 3 1 A	長 辺 厚 さ	10.7 2.1	灰黄褐色	密0.2~1.0 mmの砂粒を 含む	やや 不良	凹面ーナデ 凸面ーけずり、離れ砂 端部ーナデ	
23	平瓦	SD 3 2 B	長 辺 厚 さ	12.6 2.1	灰黄褐色	密0.2~1.0 mmの砂粒を 含む	良好	凹面ーナデ 凸面ーナデ 端部ーナデ	
24	平瓦	SD 3 2 A	長 辺 厚 さ	10.5 2.2	暗灰褐色	密0.2~2.0 mmの砂粒を 含む	良好	凹面ーケズリ、離れ砂 凸面ー溝目、離れ砂 端部ーナデ	
25	木製品	SD 3 2 A	長 辺 短 厚 さ	12.7 5.6 1.0				表面にケズリ痕あり 表面に2か所、側面に2か所の釘痕あり	
26	木製品	SD 3 2 A	短 辺 厚 さ	13.3 5.3 0.6				側面に5か所の釘痕あり 曲物の底部と考えられる	
27	瓦質 羽釜	SD 5		24.5 7.1 鉢 径 33.6	暗灰色	密1.0mm以 下の砂粒を 含む	良好	内面細かいハケ後、口縁荒いハケ 外面は 口縁ー鉢ヨコナデ、体部ケズリ	反転
28	瓦質 羽釜	SD 5		29.1 7.4 鉢 径 35.2	暗灰褐色	密1.5mm以 下の砂粒を 含む	良好	口縁ー鉢ヨコナデ 体部内面ナデ、外側ケ ズリ	反転
29	瓦質 火鉢	SD 5		25.4 7.7	暗灰色	密1.0mm以 下の砂粒を 含む	良好	外側ー口縁唇部横方向、内面縦方向のヘラ ミガキ 口縁外面に菊花文スタンプ	反転
30	常滑 甕	SD 5		38.9 5.7	茶褐色	密	良好	圓板ナデ 自然釉	反転



第一次面（西から）



第二次面（西から）

22. 郡川遺跡 (K R 89-1)

調査地 八尾市黒谷474 番地

調査期間 平成2年2月6日～2月13日

調査面積 60m²

はじめに

郡川遺跡は、八尾市の南東部の生駒山西麓部から平野部に位置しており、現在の行政区画では、郡川・黒谷・教興寺・垣内にある。当遺跡推定範囲の北西部には、古墳時代中期末から後期初頭に比定される郡川西塚古墳・郡川東塚古墳が位置するほか、東部の生駒山地一帯には高安古墳群が存在している。また、古代寺院としては、調査地の北約350mに高麗寺跡があるほか、南西約130mには教興寺跡が位置している。

当遺跡内では、昭和63年に当調査地の南東100mの地点で八尾市教育委員会によって宅地造成に伴う調査が実施されており、古墳時代中期～後期の遺構・遺物が検出されている。

調査概要

調査は重頭池西部の堤体築造工事に伴うもので、試掘調査で確認された古墳時代の遺構の広がりを追求することを目的とした。調査地点は重頭池南西部の池底で、地表面は西から東に向かって緩斜面を呈していた。この部分に南北方向に調査区（南北20m、東西3m）を設定した。掘削に際しては、現地表下0.6mまでは機械掘削し、以下0.5mを人力掘削して遺構・遺物の検出に努めた。調査の

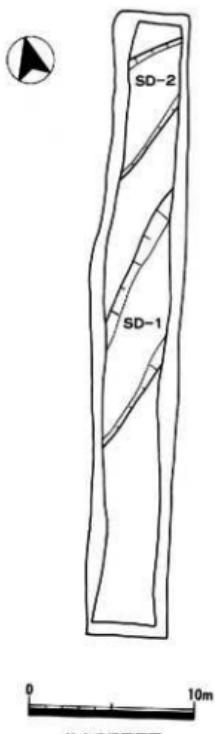


調査地位置図

結果、地表下1m前後（標高30m前後）で古墳時代中期に比定される溝2条（SD-1・SD-2）を検出した。

まとめ

今回の調査では、古墳時代中期に比定される遺構・遺物を検出した。この結果、昭和63年に八尾市教育委員会が実施された調査成果を合せて、古墳時代中期から後期の集落がこの付近一帯に存在していたことが明らかになった。特に、既往調査と同様、鉄滓・ふいごの羽口・製塙土器・馬の歯が出土しており、製鉄に関連した遺構の存在が推定されよう。また、細片ではあるが韓式土器が出土しており、遺跡の性格を知るうえで示唆的である。なお、今回の調査は、生駒山西麓部で高安古墳群の造営に関連したと推定される集落の存在が明らかになった数少ない例で、高安古墳群の成立時期の様相を知るうえで貴重な資料と言えよう。



検出遺構平面図



調査区全景（北から）

23. 渋川廃寺 (S K T 90-1)

調査地 八尾市渋川町5丁目11

調査期間 平成2年3月7日～4月15日

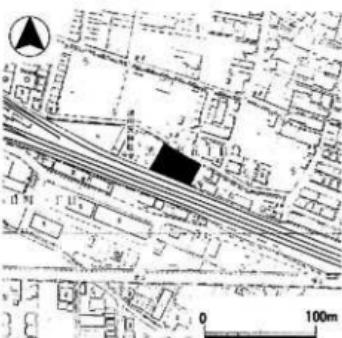
調査面積 350m²

はじめに

渋川廃寺は、八尾市西部の渋川・春日町にかかる地域に所在したと伝えられる白鳳時代の寺院である。かつて渋川天神社の南側のJR関西線の敷地内より塔心礎や古瓦が出土しており、宝積寺の地名の残ることから、この辺一帯に寺域の存在が想定されている。地理的には、旧大和川の主流である長瀬川とその支流となる平野川に挟まれた三角州上に位置しており、寺院跡の存在する立地条件にある。当廃寺の周辺では、北に久宝寺遺跡、南に跡部遺跡、太子堂遺跡、東に成法寺遺跡、矢作遺跡がある。これまでの周辺遺跡の調査では、跡部遺跡（安中町3丁目）で渋川廃寺の瓦とみられる忍冬唐草文軒平瓦が1点出土している。また、成法寺遺跡や矢作遺跡では、当廃寺の創建期に近い時期の6世紀末葉の掘立柱建物遺構が検出されている。

調査概要

今回の調査は、マンション建設に伴い、調査面積350m²を対象として実施した。調査は、排土処理の問題もあり、調査区を南北に分割しておこなった。また、それぞれを東西に二分し、各々を南東区、南西区、北東区、北西区として4区画を設定し調査を進行した。さ



調査位置図

らに、調査期間中に予定建築物の設計変更に伴い、南東区の東側に拡張区を設定した。現地表面下0.7mまでを機械掘削した後、それ以下は人力掘削により現地表面下1.8mまで掘り下げを行い、遺構・遺物包含層の検出に努めた。その結果、古墳時代中期の遺物包含層、飛鳥・白鳳時代の大溝、土累状遺構、土器群、それに平安時代前期までに数回の立て替えが考えられる掘立柱建物群と溝などの遺構を検出した。出土遺物の総量は、コンテナにして約25箱であり、そのうち8箱分は瓦類である。

なお、2年4月7日に現地説明会を実施し、調査成果を公表した。雨天の中であったが、約150人の見学者があった。

基本層序

基本的には、以下のような層序となっている。

第0層：盛土。層厚約60cm。

第1層：旧耕土。層厚約15cm。

第2層：にぶい黄褐色砂質土。層厚約15cm。

上部に約10~20cmの緑灰色粘質土の堆積がみられる。

第3層：黄褐色粘質土。層厚約20cm。若干の炭を含む。上下2層に分離でき、掘立柱建物群の検出面を含む。また、古墳時代後期~平安時代の遺物包含層もある。

第4層：褐色微砂質土（やや粘質）。層厚15cm。飛鳥・白鳳時代の遺構面。

第5層：明黄褐色微砂質土。層厚約10cm。

第6層：灰黃褐色~オリーブ灰色シルト。層厚約20cm。古墳時代中期~後期の遺物包含層。

第7層：青灰色粘土質シルト。層厚約25cm。上部に古墳時代前期~中期の遺物包含層。

第8層：青灰~明青灰色微砂~粘土互層。

層厚約40cm以上。

物群とその区画溝としての東、西、南の溝、そして、その構築面の時期を示す土器群の検出により、7世紀の第2四半期にまでさかのぼって、この地が寺院の一角になっていたことが判明した。また、特筆すべき遺物として、西大溝出土の鶴尾が挙げられる。これは、調査区西側の近辺に講堂、金堂などの寺院の主要な建物が存在する可能性を示している。

西大溝に沿って南北に延びる土壘の性格を考えると、ある種の地鎮祭祀を目的としたものとも考えられ、最古の地鎮遺構となる可能性を持つ。

いずれにせよ、これらの時期が即ち当廃寺の創建期を示すものと断定はできないが、現状の（平安時代前期頃）が当地での寺院の廃絶期であると考えておきたい。

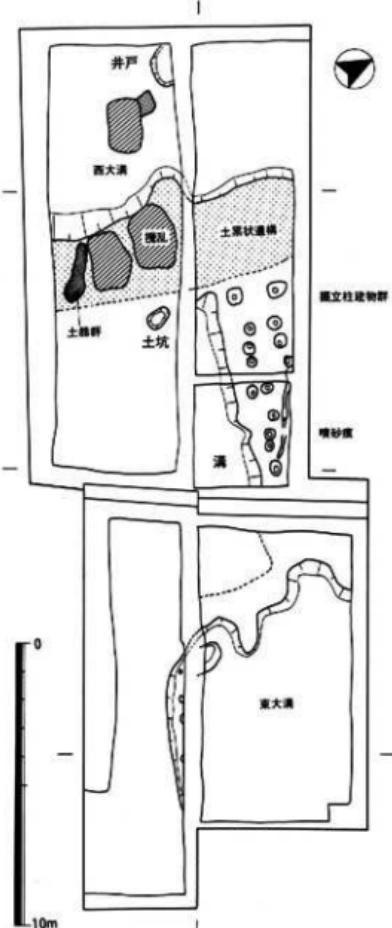
検出遺構

大溝2条（東大溝・西大溝）、土器群1箇所、井戸1基、土坑1基、土累状遺構1条、掘立柱建物群、溝1条を検出した。

まとめ

今回の調査は、江川廃寺における最初の発掘調査であり、中心と考えられる江川神社の隣接地であることから、当初より江川廃寺に関連の遺構・遺物の検出が予想される場所であった。

今回の調査の成果として、創建期を示す建



遺構平面図



南部調査区（東から）



北部調査区（東から）



須恵器検出状況（北から）

III 委託業務

1. 八尾市立歴史民俗資料館の管理

(1) 施設概要

敷地面積 1752.02m²

延床面積 1193.50m²

構 造 鉄筋コンクリート2階建

主施設面積

室名1階	面 積 (m ²)	室名2階	面 積 (m ²)
展示室	202.500	研究室	119.918
収蔵庫	181.712	写場	34.850
作業室	93.735	図書室及資料室	78.840
くん蒸室	9.500	特別収蔵庫	40.000
管理室	37.196	ロビー・その他	130.392
ホール	86.840		
その他	178.017		

(2) 開館時間等

開館時間 午前9時～午後4時30分(入館は4時まで)

休館日 毎週月曜日の午後・火曜日および祝日の翌日・年末年始

観覧料 大人200円・高大学生100円・小人50円(団体20人以上半額)

(3) 公開展示

① 常設展「八尾の歴史と文化財」

② 特別陳列

春季「八尾を握る」—前年度発掘調査報告—

4月26日(水)～6月11日(日)

夏季「河内木綿」

6月14日(水)～9月17日(日)

③ 特別展示

テーマ「八尾再発見」—里帰りの文化財展—

10月1日（日）～11月23日（祝）

④ 特別公開

跡部遺跡「春日町出土の銅鐸」

2月10日（土）～2月12日（振休）

（4） 利用状況

開館日数延べ286日 総観覧者数 8495名（1日平均29.7名）

（内部）有料観覧者数

個人 大人2173名 学生 262名 小人 1196名 計3631名

団体 大人 788名 学生 623名 小人 161名 計1572名

招待・減免関係

大人1675名 学生 3名 小人1614名 計3292名

（5） 講座の開設

①「体验学習」河内木綿の綿つみと藍の生染め

9月17日（日）親子15組

講 師 寺尾和一郎氏

浅生有記氏

内 容 ビデオ観賞・・・種まきから収穫まで

・綿つみ

・綿くり

・藍の生染め

②「古文書講座」

2月3日・10日・17日・24日・3月3日・10日の各土曜日

講 師 尾崎良史

内 容 「古文書とは」読み方から演習をはじめて、中世及び近世の古文書を学習する。

時 間 午後1時30分～3時30分

受講者 25名

③「古代史入門講座」

2月4日・11日・18日・25日・3月4日の各日曜日

講 師 平林章仁氏

内 容 日本書記や古事記に掲載されている河内に関する事柄を中心に、その相違や背景を学習する。

時 間 午後1時30分～3時30分

受講者 27名

(6) 学術講演会

①「河内木綿と模様」で8月27日（日）に予定していたが当日、台風で警報が発令されたため講演会を展示解説会に変更して実施した。

講 師 让合喜代太郎氏

②「銅鐸講演会」2月12日（振替）午前10時30分～午後3時30分

内 容 ・類似遺跡報告（徳島・岡山・奈良の各発掘担当者）

・銅鐸とは

講師 佐原 真氏

参加者 96名

(7) 資料の収集・調査

①久保田家資料整理

5月17日約2週間

②高田家資料収集

③国庫補助事業

「市内主要寺院古文書調査事業」

第1回調査会議 6月24日実施

第2回調査会議 11月11日実施

10月14日調査開始

常光寺（調査日数のべ5日）

勝軍寺（　　～　　7日）

光蓮寺（継続中）

大信寺（継続中）

(8) 紀要・館報の発刊

(9) 友の会の育成

結成に向けて10月22日大阪市立博物館友の会と交流会実施

(10) その他

河内木綿の栽培

春から木綿と藍を栽培し、9月17日に体験学習に供した。

2. 環山櫻の公開

(1) 週2回(水・土)の公開

延べ108日公開

入場者延べ1333名(1日平均12.3名)

(2) 要請に応じての公開

① 見学会

・日 時: 平成元年6月20日(火)

見学者: 高美小学校6年生136名

・日 時: 平成元年12月13日(水)

見学者: 八尾小学校1年生126名

・日 時: 平成2年1月27日(土)

見学者: 安中小学校3年生113名

② 史跡めぐり

主催者: 八尾市

日 時: 平成元年11月12日(日)

3. 河内木綿伝習所の管理

開設日: 平成元年5月18日(木)

河内木綿同好会(会長 辻合喜代太郎氏)が中心となり、毎月第1・第3木曜日の午後1時から3時半まで実習を行う。

IV 啓発事業

1. 出版物の刊行および頒布

- (1) (財)八尾市文化財調査研究会報告19 龜井遺跡—南龜井町4丁目41-1の調査—
- (2) (財)八尾市文化財調査研究会報告22 矢作、花崗山遺跡発掘調査概要
- (3) (財)八尾市文化財調査研究会報告23 竹渕、水越、恩智遺跡発掘調査概要
- (4) (財)八尾市文化財調査研究会報告24 福万寺遺跡発掘調査概要
- (5) (財)八尾市文化財調査研究会報告25 昭和63年度年報

2. 文化財講座の開催

- (1)「芝塚古墳の象嵌遺物」

日 時：平成元年11月4日(土)午後2時～4時15分

場 所：文化会館

講 師：奈良大学助教授 西山要一氏

参加者：40名

3. 出土遺物等の展示および報告会

テーマ：「八尾を撮る」—昭和63年度発掘調査報告—

期 間：平成元年4月26日(水)～6月11日(日)

* 5月28日には調査員による報告会を行う。

場 所：市立歴史民俗資料館

展示内容：昭和63年度に調査を行った市内遺跡(東郷・久宝寺・萱振・高安古墳群)

の紹介と出土品の展示

4. 現地説明会

- (1)「芝塚古墳」 神立2丁目地内(道路建設予定地内)

日 時：平成元年4月8日(土)午後1時～3時

見学者：161名(市内29名・市外54名・不明78名)

- (2)「八尾南遺跡」 若林町1丁目76(社屋建設予定地内)

日 時：平成2年2月10日(土)午後3時～4時30分

見学者：250名(市内58名・市外192名)

5. 講演会・講習会への職員派遣

(1) 「土器づくり講習会」

主 催：桂小学校

日 時：平成元年 6月27日(火)～6月29日(木)・7月8日(土)

場 所：桂小学校体育館及び校庭

対 象：6年生55名 教諭5名

(2) 「要請に応じての現場公開」

①主 催：八尾市自治推進課

日 時：平成元年 9月21日(木)午後1時～4時30分

場 所：恩智遺跡調査現場(青少年施設建設予定地)

尚、見学後南高安コミュニティセンターで土器づくりを実施

参加者：市政モニター20名

②主 催：堺川コミセン歩こう会

日 時：平成元年 9月24日(日)午前9時～10時

場 所：恩智遺跡調査現場(青少年施設建設予定地)

参加者：会員40名

③主 催：大阪市立博物館パルの会

日 時：平成元年10月22日(日)午後4時30分～5時

場 所：成法寺遺跡調査現場(共同住宅建設予定地)

参加者：会員50名

(3) 「歴史セミナー・芝塚古墳の調査について」

主 催：中央公民館

日 時：平成元年11月28日(火)午後1時30分～3時

場 所：市立教育センター

参加者：市民80名

(4) 「銅鐸研究会」

主 催：野洲町立歴史民俗資料館、野洲町教育委員会

日 時：平成元年 2月18日(日)午後2時～4時

場 所：野洲町立歴史民俗資料館

参加者：40名

(5) 「郷土文化講座」

主 催：八尾市立労働会館

日 時：平成2年2月22日(木)午後6時～8時

場 所：山本労働会館

参加者：80名

6. 跡部遺跡出土の銅鐸に関して

(1) 特別現場見学会(関係者対象)

日 時：平成元年11月11日(土)午前10時～午後3時

見学者：64名

(2) 現地説明会(一般対象)

日 時：平成元年11月12日(日)午前9時30分～午後4時30分

見学者：1,470名(市内1,161名、市外285名、不明24名)

(3) 速報の刊行及び頒布

(4) 特別公開

期 間：平成2年2月10日(土)～12日(振休)

場 所：市立歴史民俗資料館

(5) 講演会

主 催：跡部遺跡発掘調査委員会

日 時：平成2年2月12日(振休)午前10時30分～午後3時30分

場 所：市立歴史民俗資料館

講 師：桜井市教育委員会

萩原儀征氏

徳島市教育委員会

勝浦康守氏

岡山県古代吉備文化財センター

小松原基弘氏

奈良国立文化財研究所

佐原眞氏

7. 現場見学バスツアー

日 時：平成元年10月25日(水)午後1時～4時30分

内 容：公用マイクロバスを使用して、市内の調査現場と歴史民俗資料館・環山楼を見学する。

参加者：19名

8. 「発掘ってなあに？」を市政だよりに掲載(月1回)

内 容：発掘調査や埋蔵文化財などについてを、分かりやすく市民にPRする。

V その他

1. 「第1回埋蔵文化財写真技術研究会」に参加

主 催：埋蔵文化財写真技術研究会(京都市埋蔵文化財研究所内)
日 時：平成元年7月4日(火)・5日(水)
場 所：京都市埋蔵文化財研究所

2. 「第20回大阪府下埋蔵文化財担当者研究会」で発表

主 催：(財)大阪文化財センター
日 時：平成元年7月2日(日)
場 所：大阪府立労働センター
発 表：芝塚古墳出土の象嵌遺物について

3. 「第7回近畿地方埋蔵文化財研究会」の協賛

主 催：(財)大阪文化財センター
日 時：平成元年11月26日(日)
場 所：大阪府婦人会館

4. 「第21回大阪府下埋蔵文化財担当者研究会」で発表

主 催：(財)大阪文化財センター
日 時：平成2年2月25日(日)
場 所：大阪府立労働センター
発 表：跡部遺跡出土の銅鐸について

VI 受贈図書一覧

団体名	書名
北海道 上ノ国町教育委員会 千葉 (財) 君津都市文化財センター	史跡上之国勝山鉱脉概報Ⅹ 塙No.2遺跡 箕輪富士塚群 金谷城跡 四留作第1古墳群第1号墳 明石II遺跡・中今谷遺跡 蓮草寺遺跡 俵ヶ谷古墳群 花山遺跡 東天王台遺跡 永青台遺跡群 岩井作横穴墓群 片井台北遺跡 打越岱遺跡 堤遺跡(2次) 早谷古墳・畠沢遺跡(2次) 三箇遺跡群V 同上VI 藏王岩跡 年報No.6 年報No.7 宮平遺跡概報 佐久間遺跡 山武考古学研究所年報第5号 同上第6号 成井鶴ヶ峰遺跡 常陸國分僧寺跡報告書 大管向台遺跡 牧野大丸久遺跡 寺光寺村近瀬跡 宮平遺跡 流前・瀬下遺跡 九十九里地域の古墳研究
山武考古学研究所	
東京 文化庁 府中市郷土の森	都市周辺の軽石堆積地における遺跡・保存方法の検討 あるむぜおNo.1 同上No.2
神奈川 神奈川県立歴史文化財センター	草山遺跡II 砂田台遺跡I 年報8
神奈川県教育庁	神奈川県文化財調査報告書第48集

神奈川県文化財調査会 山梨	神奈川県文化財調査報告31 神奈川県文化財調査報告32 研究所報第7号 同上第8号 研究報告第1集
愛知 (財) 愛知県埋蔵文化財センター	埋蔵文化財愛知第16号～第19号 年報昭和63年度 蹴跡遺跡・杉山端城跡 下山古墳 加美遺跡 町田遺跡 愛知県埋蔵文化財情報4 くらしの中の木 昭和62年度瀬戸市埋蔵文化財年報 博物館だよし第5号・第6号 特別展回録「尾張のもん」 年報1 平成元年度秋季特別展「一宮の名宝Ⅲ」
愛知県教育委員会 清須貝殻山貝塚資料館 瀬戸市教育委員会 ・宮市博物館	
石川県立埋蔵文化財センター 水呑モンショ遺跡	金沢市米泉遺跡 佐々木アサバタケ遺跡Ⅱ 末松遺跡 犀川鉄橋遺跡Ⅱ 所報「拓影」第27号～第30号 寺家遺跡発掘調査報告Ⅱ 漆町遺跡Ⅱ 石川 金沢市教育委員会 金沢市墨田町遺跡Ⅱ 金沢市末室跡群 金沢市西念・南新保遺跡Ⅱ 金沢市笠舞A遺跡(IV) 昭和63年度金沢市埋蔵文化財調査年報
府中町教育委員会 鹿道上の出塗跡	
福井 武生市教育委員会	武生市埋蔵文化財調査報告書Ⅷ 同上Ⅸ 八日ヶ瀬山古墳群 下屋敷遺跡・堀江干渠遺跡
福井県教育行政埋蔵文化財調査センター	
滋賀 八日市市教育委員会 滋賀県埋蔵文化財センター	下羽州遺跡発掘調査報告書 滋賀埋蔵ニュース第108号～第119号
京都 (財) 京都府埋蔵文化財調査研究センター	京都府遺跡調査概報第31冊 同上32冊

	同上33番
	同上34番
	同上35番
	同上36番
	京都府道路調査報告書第11回
	同上12番
	京都府埋蔵文化財情報第31号
	同上32号
	同上33号
	同上34号
	小さな展覧会（第8回）
	5年のあゆみ
(財) 京都市埋蔵文化財研究所	昭和60年度京都市埋蔵文化財調査概要
長岡京市教育委員会	長岡京市文化財調査報告書第22番
(財) 長岡京市埋蔵文化財センター	(財) 長岡京市埋蔵文化財センター調査報告書第4集
被部市教育委員会	昭和62年度年報
	被部市文化財調査報告書第15集
	同上第16集
京都大学文学部	椿井大塚山古墳と三角縁神獣鏡
同志社大学考古学研究会	百花台1982
	同上1983
	考古学と技術
	兵庫県赤石市鴨谷池遺跡
	伊木力・熊野神社遺跡
	伊木力遺跡
	和歌山市橋身附谷古墳調査報告
	鹿島県三好郡三加茂町丹出古墳調査報告
化開大学考古学研究室	考古学研究室だより15
	同上16
	花園大学構内調査報告目
	鳴谷東1号墳第2次発掘調査概報
立命館大学文学部	昭和63年度泉佐野市埋蔵文化財発掘調査概要IX
大阪	日根野遺跡88-6区の調査
泉佐野市教育委員会	湊遺跡89-2区の報告
大阪市教育委員会	昭和62年度大阪市埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書
	大阪市の文化財1989
(財) 大阪文化財センター	(財) 大阪文化財センター通信№1～№2
	大阪府下埋蔵文化財研究会資料第20回
	同上第21回
	近畿地方埋蔵文化財研究会資料第7回
	久宝寺南遺跡その1
	小阪遺跡その5
	同上その6・6-2
	同上その7・7-2
	日置莊遺跡その1

	同上その2
(財) 大阪市文化財協会	同上その3
(財) 大阪府埋蔵文化財協会	同上その4
貝塚市教育委員会	丹上遺跡
	近畿造和歌山編・府道松原・京大津軒間連第2回発掘地報展図録 表火19-24号
門真市教育委員会	文化財資料展示室よりNo28
柏原市教育委員会	貝塚市遺跡群発掘調査概要Ⅳ 東金跡り 貝塚の海とくらし 貝塚の歴史と文化 普賢寺遺跡発掘調査概要Ⅰ 柏原市埋蔵文化財発掘調査概報 大原遺跡 平尾山古墳群 高井田遺跡Ⅲ 柏原市所在遺跡発掘調査概報 原山遺跡 三日市遺跡発掘調査報告書Ⅱ 河内長野市埋蔵文化財調査報告書Ⅲ 河内浅畠の民話 堺環濠都市遺跡S K T 236地点・四ツ池遺跡Y O B地区 堺市文化財調査報告第40集
河内長野市教育委員会	同上第41集 同上第42集 堺市文化財地図 埋蔵文化財保護の手引き 堺の文化財(考古資料編) 堺市文化財調査報告 昭和63年度埋蔵文化財緊急発掘調査概報 吉志部瓦窯跡 吹田市文化財ニュースNo10 人東市埋蔵文化財発掘調査概報1987年度 同上1988年度 特別展「近世大阪の新出開発」
吹田市教育委員会	船上海跡発掘調査概要13 羽鳥台団から倭の五王へー東アジア社会からみた古代豊中ー(市制50周年記念シンポジウム)
人東市教育委員会	豊中市埋蔵文化財発掘調査概要1988年度 新免遺跡第11次発掘調査報告書
高槻市教育委員会	阪南町埋蔵文化財報告Ⅵ 同上Ⅶ
豊中市教育委員会	同上Ⅷ 東大阪市埋蔵文化財包装地調査概要30 協会ニュースVOI 4 No 2 同上No 3
阪南町教育委員会	
東大阪市教育委員会	
(財) 東大阪市文化財協会	

(財)枚方市文化財研究調査会	(財)東大阪市文化財協会概報集1988年度 鬼虎川遺跡第19次発掘調査報告 同上第29次発掘調査報告 同上第30次発掘調査報告 鬼虎川遺跡測量概要Ⅰ(遺物編木梁品) 西ノ辻・鬼虎川遺跡 神並遺跡第12次発掘調査概報 神並古墳群遺跡第3次発掘調査報告 若江遺跡第29次発掘調査報告 (仮)枚方市文化財研究調査会発掘調査報告会資料年報Ⅸ ひらかた文化財だより第2号
美原町教育委員会	黒坂山古墳墓発掘調査概要 大阪府縄文時代遺跡・監表 大阪の歴史87
府立京北考古資料館	泉北考古資料館だより 環濠一基の面を削った人びとー 近大山遺跡Ⅱ発掘調査報告書 大阪府市町村等刊行物収集目録 郵政考古紀要14 同上15
堺市博物館	かしばの文化財Ⅰ
近畿大学	昭和63年度稻庭莊第3地点道路発掘調査概報 瓦口森遺跡発掘調査概報 藤ノ木丁遺跡
府立中之島図書館	川尻岬一小和幹線建設事業に伴う発掘調査概報 赤土山古墳第1次範囲確認調査概報
大阪郵政考古学会	天理市の文化財 天理市埋蔵文化財調査概報 郡山城第16次・第17次発掘調査報告書 平城京右京八条一坊十一・十二坪 本庄・杉町遺跡 発志院遺跡(桜井地区) 神木坂古墳群Ⅱ 同上Ⅲ
奈良町教育委員会	延喜藤ノ木古墳 大和を掘る(1988年度発掘調査速報第IX) 兵生動乱の時代青野ヶ原遺跡の同時代史 一万年前を掘る(山添村シンボジウム) 遺藏文化財ニュース64-66 文化財学報第6集
県立橿原考古学研究所	木の本Ⅲ遺跡発掘調査報告書 和歌山城下まちじるべ
奈良国立文化財研究所	金津山古墳關塗の発掘調査
奈良大学文学部	
和歌山	
和歌山市教育委員会	
兵庫	
芦屋市教育委員会	

	芦屋発寺遺跡 K 地点、寺出遺跡第16次発掘調査報告書 昭和63年埋蔵文化財調査概要37 平成元年埋蔵文化財調査概要17 同上19
伊丹市教育委員会	試掘・立会概要報告 有岡城跡発掘調査報告書Ⅵ
川西市教育委員会	埋蔵文化財の手引き及び分布図 川西市柴木遺跡発掘調査報告書
神戸市教育委員会	昭和61年度神戸市埋蔵文化財年报 昭和63年度遺跡現地説明会資料 口春遺跡発掘調査報告書 神戸山田廟山久次町遺跡第一次発掘調査概報 地下に眠る神戸の歴史展Ⅷ
豊岡市教育委員会	豊岡市文化財調査報告書18 同上19 同上20 同上21 同上22
氷上町教育委員会	街内・船塚一帯場整備事業に伴う兵庫県氷上町の発掘調査...
岡山	所轄吉備第7号
岡山県古代吉備文化財センター	岡山県埋蔵文化財発掘調査報告74
津山郷土博物館	博物館だよりNo.1～No.2
倉敷市教育委員会	美作の歴史と文化 倉敷市文化財だより第5号 倉敷市櫛ヶ浜生墳丘墓発掘調査概要報告第V次 同上第VI次
鳥取	
鳥取県教育委員会	国道9号線建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書VI 同上、青
鳥取大学附属岡吉館	山陰造城研究伝統文化部門分冊第5号
山口	
山口大学埋蔵文化財資料館	山口大学構内遺跡清査研究年報Ⅸ 山口大学埋蔵文化財資料館案覧
徳島	
徳島市教育委員会	徳島市埋蔵文化財発掘調査概要1 第8回埋蔵文化財資料展図録 同上第9回
福岡	
九州大学文化部	九州文化史研究所紀要第34号(考古学関係抜刷)
長崎	
長崎県教育委員会	魚洗川E遺跡
多良見町教育委員会	琴ノ尾岳峰火台跡緊急整備発掘調査報告書
佐賀	
佐賀県教育庁	佐賀県遺跡概要図

	吉野ケ里遺跡 等別史跡名護屋城跡並びに陣跡
熊本	
熊本県教育委員会	熊本県文化財調査報告第73集 同上第75集～76集 同上第79集 同上第86～89集 同上第93～96集 同上第98集 同上第100～106集
高崎	
高崎町教育委員会	高崎町文化財調査報告書第1集
鹿児島	
鹿児島大学附属文化財調査室	年報Ⅳ
その他	
高井柳三郎	銅鏡《辰馬考古資料館図録》
村川行弘	義王塚・觀音寺所蔵遺物の再検討 銅鏡 3例
木簡学会	木簡研究第11号
旧石器文化談話会	旧石器考古学38
地域歴史民俗考古研究会	郵政考古紀要14
朝日新聞社	アサヒグラフ

(財)八尾市文化財調査研究報告28
八尾市文化財調査研究会年報

平成元年度

発行 平成2年12月

編集 財団法人 八尾市文化財調査研究会
〒581 大阪府八尾市清水町1丁目2番1号
TEL 0729-94-4700

（表紙 レザック66（215kg）
本文 マットアート（10kg）
見返し 上質（90kg））

